
幾望の月

雨宮 だりあ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幾望の月

【Nコード】

N8682F

【作者名】

雨宮 だりあ

【あらすじ】

幼馴染のカオルとユウ。二人の前にある日突然、現在と未来の世界を賭けた男が現れる。太刀を背負った黒豹のような彼の語る、世界の危機とは？誰も知らない、ひっそりとした闘いの中、微妙な段階だった二人の関係も動き始める。スペースや改行や、細かい点でミスが多発していることに気づいたので、だいぶ後から全体的に手を入れました。トータルでは読みやすくなったと思います。

前章・既朔の月／＼1・豊かの海

前章 ― 既朔の月

天を、闇が覆っていた。

彼は二本の太刀を改めて点検した。

刀袋を手に取り、一瞬躊躇してから太刀を入れる。

ほつれかけの古い袋を、ぎゅっと紐を引き締めて留めた。

刀と袋の両方を愛でるように、上から撫でる。決意と感慨で、表情は余りにも硬かった。

どこからか、ひっきりなしに地鳴りがする。

彼は暗い空間のすぐ傍に佇んでいた。

取り囲むように、彼を見守り、監視する目。

「おい」

同僚が声を掛けた。そちらに目を向けると、彼は気の毒そうに言葉を失くした。

「戻って、こいよ」

彼は反応せず、しゃがんで起点に手を当て確認した。

見えるものならば、二日目の細い月が見えるはずだった。

期待できぬと知りながら仰ぎ、空白の心で任務に臨む。

心と同じく何も無い、空白の地。

ここから先どうなるのかを實際体験した者はいない。

神経を研ぎ澄ます。

一方の太刀を抜き、頭上で二度回転させた。

検証通りの円陣が現れ、もう一方の太刀に持ち直す。

乾いた地面を突き刺すと、黒い空間が現れ、彼はあっけなく沈んで消えた。

湧き上がる歓声。

同僚だけが怒りで黙り込み、彼の消えた行方を想った。

…何の挨拶もなしに行きやがった。

まあ、あいつらしい消え方ではあるが。

上層部は成功したのを見届けて祝杯のために去り、男一人だけが取り残された。

祝杯などというものに参加する気にはなれる筈がない。

誰にともなく怒りを感じ、時間の許す限り、ただ立ち尽くして地を見詰めていた。

素っ気ない、友人とはなかなか言わせてもらえない男のことを想いながら。

一 ― 豊かの海

廊下の窓越しに見える空は突き抜けるように青く、眩しかった。

期末試験の最終日。午前中に全てが終わり、あとは結果を待つのみ。の身分。

その「結果」にはまったく自信はなかったのだが、何はともあれ試験勉強からは解放されたのだ。

天城ユウはヒョロリと高い背を伸ばし、ウキウキした気分で通学鞆を後ろ手に肩に掛けた。

キラメル色の短髪に陽が差し、薄く透けて光る。

自然と足が速くなる。今ならまだ間に合うだろう。

「おっと」

階段の途中で、親友のジュンに出くわした。

「おう。これからツタヤ行くんだけど、お前も行く？」

ジュンは親指を駅前の方角に向けた。繊細そうな指の関節に血管が浮き出る。

「いい。明日のために練習しとくよ」

「一曲に集中しすぎると、他がだらけるぞ。俺なら新しいCD聴いてリセットするけどな」

「そんなに器用じゃねえよ。じゃな！」

ジューンは踊るように階段を駆け降りる彼を見送り、教師に説教されてばかりの長い前髪を指で漉いた。

「まったく、真面目だね。気合いが入るのもわかるけど」

彼はできたばかりの新曲のサビを鼻歌で歌いながら、教室へと戻って行った。

ユウが下駄箱の手前まで行くと、真田カオルが友達二人と話しながら靴に履き替えるところが見えた。

帰る生徒はとくに帰り、ダラダラ居残る生徒はまだ帰らない、空白の時間。

人気のない下駄箱に話し声が響き、思わず壁の陰で足を止めて隠れる。

「最近天城くん、ポイント高いから気を付けなよ？」

見た目が派手でクラスメイトから敬遠されているが、カオルとは仲がいいアキの声がする。

「なんで私が」

むきになって否定するカオル。すかさず、変わり者で有名なノンが突っ込みを入れた。

「素直じゃない。情報も遅い。」

他校の友達、通りすがりじゃなくてわざわざストリート見に行ってるよ」

アキも大きなヒソヒソ声で同調する。

「ジューンの方がモテてるけど、天城くん急に背が伸びたし、彼目当ての娘も絶対いるって」

「だからっ！関係ない。それより、せっかく試験明けなんだもん。ランチして帰ろうよ」

「いいけど、幼馴染みだからって気を抜いて、かつさらわれても知

らないよ？」

二人が呆れて上履きをしまう鉄の扉の音がした。
後ろから、誰か来る。

出るに出られない会話も一段落したので、何食わぬ顔で角を曲がった。嘘の苦手な顔に、作り物の笑顔が貼り付いていないかどうか、自分でも自信がない。

「あれ、まだいたんだ」

空々しく声を掛けると、アキはノンの腕に腕を絡ませ、思わせぶりにニヤついた。

「ランチ…はまた今度だね」

ノンが、絡まれた腕をうるさそうにしつつもそのまま、カオルの胸元を指差した。

「そういえば今朝、カオルの近況で逆位置の運命の輪が出てた。アクシデントがあるかもしれないから、心得ておいて」

うつ。彼女は息を詰めた。

ノンはタロット狂。しかもよく当たる。

特に悪い予告は的中率が高いので、予告によってアクシデントが舞い込んだように思わされることすらある。

「わかった。大人しくしとく」

「それから天城くん」

ユウもどきりとし、ノンの指差しを甘んじて受けた。

「天城くんはハングマン―吊るされた男の正位置。」

避けることのできない通過儀礼と、忍耐や奉仕がカードの意味だから」

「ちょっと待て。カオルはともかく、俺のことまで占ったのか？」

「占ってるよ。毎朝：クラスの全員分、ね」

ノンは平然と言つてのけ、アキと共にカオルとは反対方向の門へと立ち去った。

カオルは占いが気になり、ランチをスルーされたことはすっかり頭から消えていた。

「怖っ。タロットより黒魔術の方が似合いそうだ」

ユウは身震いしながら靴を履いた。

気分を変えるように、別の話題を振る。

「そういえば試験どうだった？トップテンの座は守れそう？」

ユウが聞くと、彼女は暑苦しそうに赤い縁のメガネを外し、曇りを拭いて掛け直した。

「順位にはこだわってないけど、今回は易しかったから拮抗するんじゃないかな」

「や・易しい？って、どこが！一体どの教科のことを言ってるんだよ」

「何となく、全体的に。中間試験よりは比較的にね」

自然に話しながら、一緒に歩き出す。

わざわざ約束して一緒に帰ることはないが、タイミングの合いそうな時は合流する。たまにはランチしたり、お茶して帰ったり。それが二人の日常だった。

それをからかわれてしまうこともあるのだが、三軒隣に住んでいるのに、帰るタイミングが合ったのに、仲が悪い訳でもないのに、完全に無視して別々に帰るってのも、ね。それはそれでかなり不自然。

もちろん、素敵な力レでもできたら話は別だけど。それは向こうも同じこと。

「ユウはどうなの？万年中盤を死守できそう？」

「それが…実は、最後の古文が少々…多分、追試だな。それなりに頑張ったんだけどね」

にははっと笑うと、日焼けした頬にえくぼが現れる。どんなに背が伸びても、幼い頃からそれだけは変わらない。

外に出るとさすがに夏の真昼時。熱気と陽差しに眼がくらむようだ。

ユウは力オールの横に並び、額の汗を手の甲で拭った。彼女の長めの三つ編みが揺れる。

「カオルさん、実はお願いが…」

「古文の解答貸せなんて言わないよね？」

横目で軽く睨むと、ユウは胸を張って拳を突き上げた。

「俺にはわかっていていることがある。解答だけ借りても、全っ然理解できないということが！そして、今度こそ追試一回で通過しないとまずいということが！」

カオルは肩をすくめて、腕時計をチェックした。

「…ランチしそなたし、せつかくだから頭が新鮮なうちに教えようか？」

大袈裟にジャンプして喜ぶユウ。カオルからも笑みが漏れる。

風が止み、今年初の蝉の鳴き声が聞こえた。

二人は大通りに出て、いつものファミレスの扉を開けた。途端に身体に纏う冷氣。

出入り口近くの、いつもの席。冷房に弱いカオルが扉側。ユウはいつも通り奥に座り、メニューを差し出す。

「お礼する。遠慮なく選んで」

「いいよ。どっちにしてもアキたちと食べて帰るつもりだったから」「いいって。教えてもらうんだし、兄貴からバイト代もらったばかりだから」

医者長の兄に言いつけられる、怪しげなバイト。

たまにはあるが見返りは相当で、高校生には分不相応な収入だ。詳しくは話せないことばかりなので、周囲にはひたすら雑用だと偽っている。

「そう？ありがと。じゃ、遠慮なくドリアとホットカフェオレにしようかな」

「あつつい注文だな。冷たいデザートは？」

「冷えるからいい。その代わり夏休みの宿題も面倒見るから、今度またランチご馳走して」

「ぜひ喜んで！ありがたいことですー」

わざとらしく深々と頭を下げ、今日のテストを取り出す。

こんな会話が、テストや長期休暇の度に繰り返される二人だった。しかし、教えながらもカオルはつらつら思う。

ユウの家は資産家だ

父は大学病院の教授で、長兄の他に、新進気鋭と評判のデザイナーの次兄がいる。

それなのにユウだけいきなり公立高校で、カオルの祖父の営む剣道の道場に通い、親友と二人してストリートで歌ったりしている。三男坊の特権なのか、環境の割にはかなり不可解なユルい生活だ。こうやって時々勉強を教えるのは苦ではない。どころか、密かに楽しみにしている時間でもあるのだが、ユウが本気で勉強する気になつたら、いくらでも家庭教師をつけて教えてもらうことはできるはず。

来年受験が迫つたら、きっと私の出番はなくなるな。

二時間ほどかけて、ユウはその日の文系テストを消化することができた。

カオルは外に出た途端、熱気に対比した冷気の残滓に身震いした。それが治まると同時に、今度はじわじわと暑さを直接肺に吸い込んでいるように錯覚し始める。

剣道の稽古の間はあまり暑さを感じないのだが、こういう瞬間、夏が大嫌いだと思う。

拡散していく集中力。アスファルトを踏む重い足。

ユウは逆に、こういう感覚が嫌いではない。度が過ぎればクラクラくるが、熱気でむしろ身体が軽くなる気がするのだ。

追試への自信が出てきた嬉しさも手伝って、ちよつとハイにすらなっていた。

「な、明日の夜ライブ見に来なよ。新曲お披露目があるんだ」

「ライブだったって、ストリートの、でしょ。で、どっちが作ったの？」

「初めて、俺が作詞作曲！天才アーティストの誕生だな！」

「へえ。いつもジユン君が作詞してるのに。どんな感じの曲なの？」

「恥ずかしながら、恋がテーマです」

肌に、ピリツと電気が走った気がした。知る限りでは、今まで初恋の話すら出たことがないのに。

少し無理して、ぶつと吹き出して笑ってみせることができた。

「…妄想の産物？」

「あ、馬鹿にしたろ。違うよ。好きな女の子に、もっというろまっすぐ向き合えよ！ってメッセージを贈る…応援歌ってとこ。

あんまり甘いメロディにしちゃうとジユンと被るし、俺らしい曲って思ったらそんな感じで落ち着いた」

ユウの言葉がするりするりと耳の横を滑っていった。

「ふうん。正直びっくりした。ユウが恋愛ねえ！」

全然そんな話聞いたことないけど、誰をイメージしたのかな？」

もう少し無理して、明るく聞き出そうとする、振りをする。

なんで作り笑いしなきゃならない訳？なんか、凄く自分に対して不愉快なんだけど！

…そっか。内緒にされていたのがつまらないんだ、私。

なんにしても、絶対、動揺を見せて誤解させてはいけない。

でないと、何かが壊れてしまう。

「誰、つつつか、だから、色んな好きがあってみたり、あとはほら、想像を膨らませてみり、だな」

一気に、彼女の肩から力が抜けた。脱力感に襲われる。

「なんだ。やっぱり妄想じゃない。なーんだ、なんだ、とんだ肩透かしくらわされた。聴きに行く気を失った」

「あ、来る気になってくれてた？なーんだ、なんだ。じゃあ気を取り直して、試しに聴きに来てよ」

軽く乗せようとしつつ、ユウも実は焦っていた。

二人の間を微妙な空気が流れる。

最初から妄想ですって誤魔化しておけばよかったのに。俺、馬鹿

だな。

こんな成り行きで、簡単に悟られる訳にはいかない。

でないと、何かが壊れてしまう。

「じゃ、代わりにこっちの稽古も真面目にやってよね」

「頑張りまあいっす！」

しぶしぶ了解する素振りの時、彼女は必ず「その代わり」の条件を付ける癖がある。

歩きながら、ユウは数々の「その代わり」に思いを巡らし、こっそり微笑んだ。

長い間、同じ目線で話していた気がするのに、今彼女の頭は大分低く見える。

斜め上から、剣道で健康的に締まった上半身と、女性らしさを帯びた白いうなじも盗み見る。

おっと、駄目駄目。意識的にガードレールに視線を移した。

トラックが通り、車道からの熱風に煽られる。

脳裏に浮かぶ、小さな、透けるような影――

あの時のあの表情を見た瞬間から、彼女をずっと守っていかうと決意していた。

だから、両親を説き伏せて公立高校に進学を決め、しかも力オールと同じ学校に行こうというのだから、必死で勉強もした。

大して才能がある訳でもないのに、真田家の家業の剣道にも通い続けている。

鼻歌を聴かれて「いい声してるよね」と言われたたったその一言で、相方を募集していたジュンに申し込んで歌うようになった。

それもこれも、彼女は全然自分と関連付けて考えてはいないようだ。

さっきの立ち聞きからしても、今は相手にされてないことがはっきりした。

でもこんなに長く、ずるずるとただの幼馴染みで誤魔化していた自分にも、そろそろ我慢の限界。

だから今回、初めて自分だけで作った曲に、全部の想いを込めていた。

普通の人が聴いたら、普通の曲。しかしちょっと仲がいい友達なら、カオルのことを歌っているとバレてしまうくらい、あからさまな歌詞だ。

それを聴いて彼女がどう思うかは、まだ想像が付かない。

少しは意識してくれるのか、気付かない振りでやんわりと遠回しに拒否か。

人前で歌って玉砕したら無茶苦茶格好悪いし、その途端に「幼馴染」から「気まずい近所さん」に降格の恐れすらある。

そのリスクを考えると、やっぱり少しは慎重に……ってのは言い訳で、本当はただ怖いだけだ、きっと。……やっぱり俺は、馬鹿なんだな。

ま、例え玉砕しても時間はいくらでもある。

修復なり改善なり、自分のペースで歩くしかないさ。

2・東の海―1

カオルの自宅を兼ねた道場はとても古い。

昔ながらの瓦屋根は重たげで、壁や天井は染みが目立つ。

しかし、誰にでも誇れると思う点が道場にはあった。

長年磨き上げられ、飴色に艶のある床だ。

この床を何百回磨き、その上をどれだけの足音が響いただろう。

その足音も年々減り続け、今や高校生はカオルとユウだけ、そして週一回通う子供たちが十五人ほどになっていた。

彼女は帰宅すると、まず仏間でロウソクに火を灯し、線香をあげた。写真に写る、色褪せた若い母親の姿。それよりは大分新しい父親の写真。

額が埃っぽくなっているのに気付き、一つ一つ丁寧に綺麗にして戻した。

台所で麦茶を飲み、水切りに茶碗が伏せてあるのを確認してから、奥の部屋に声を掛ける。

「じいちゃん、ただいま戻りました」

「おう」

庭からパチリパチリというハサミの音が聞こえた。縁側を覗くと祖父の重三が日課の庭木いじりをしていた。

声に張りがあると思ったら、来客だったらしい。

近所のサトさんというおばあちゃんと、立ち話の最中だったようだ。

少し離れて立ったまま、こちらにニコリと会釈する。

ははあ、道理でハサミの音も景気いいと思った。

「カオルちゃん、こんにちは」

「こんにちは。暑いでしょう。入ってください」

「いいのいいの。さっきまで上がらせてもらって、ちょうど帰るところだったんだから」

遠慮がちに手を振る仕草が、カオルの目にも可愛らしく見えた。少女趣味のふわふわスカートも、年甲斐もないのに不思議とセンスがいい。

この人以外のおばあちゃんが着たら、絶対引いちゃうんだけど。やっぱり若い頃からずっと可愛いかったんだろな。

「あ、遠慮しないでゆつくりしていつて下さいね。じいちゃんも、サトさんがずーっといてくれた方が喜びますから」

「カオル！」

重三が慌てた途端、バチ！とおかしな音がした。

お気に入りのケヤキを、大枝ごと切り落としてしまったのだ。

あわわ、と拾って元のところに合わせるが、戻るはずもない。

「あーあ、やつちゃった」

「あらあら、どうでしょう」

「いや、いや！何てことはありません。どうせ、手をかけすぎて枯れそうなのだったのだ」

恥ずかしそうに言い訳をして、彼はそれを隅の方へ押しやった。

「長居しちゃってごめんなさい。後で娘が来るから、そろそろ失礼しますね。カオルちゃんも、ごきげんよう」

おっとりと言い、腕にかけていた白いレースの日傘を開いて、彼女は門から出て行った。

「うわー、出た。『ごきげんよう』なんて素で言っちゃう人、初めて見た。しかも全然、厭味でも慇懃でもないし。」

重三は彼女を見送りながら一言二言話し、また庭へと戻ってきた。もう一度ケヤキを取り上げてしげしげと眺めたが、結局諦め、何も言わずに他の切り屑と共にビニール袋に捨てた。

本来ならば、大事な盆栽が駄目になったと叱られるところなのだが、「サトさん」絡みの話だと、最近やけに弱気になる。

本人には悪いが、それが面白くて仕方ない。

稽古でしごかれている分、こういうところで仕返ししなくちゃ。カオルはわざと、何事もなかったかのように聞いた。

「お昼、何食べたの？」

「サトさんが芋の煮付けを差し入れてくれたんでな。冷蔵庫にまだあるぞ」

「ごめん、食べてきちゃった。夕飯でまた出そうね」

重三がふんと鼻を鳴らし、次にお氣に入りの松の盆栽を眺めた。やっぱり、ちよつと可哀想だったかな…

カオルはそのしょぼくれた後ろ姿を見て、ふと昔を思い出した。

彼女の母親は物心つく前に亡くなり、父親は三年前に亡くなった。二人暮しに直面した時、重三は彼女を前に座らせてこう言った。「今まで片親だったのに曲がりもせず、よく育ってくれた。お前はもう有段者で、生活にも手がかかる歳じゃない。お前さえよければ、これからは道場を手伝ってもらって、小遣いではなく賃金を出そう。わしはお前を縛らない。その代わり、身の心配をさせるような羽目の外し方はしない。」

お前もわしを縛らない。その代わり、身の回りの面倒はかけないし、老後の心配もさせないつもりだ。

お互いを、ちよつと近しい同居人くらいに思ったらいい。迷惑を掛け合わない程度の心がけで、肩の力を抜いて暮らしていこう。どうだ？」

その声も表情も、見たことがないほど消耗しきった様子だった。線香の匂いの中、背筋を伸ばして対峙し、彼女は黙って頷いた。

「家族として、二人で力を合わせて頑張ろう」と言われるより、遥かに氣が楽になったのをよく覚えている。

それから二人はその通りに暮らしてきた。

夕飯は効率を考えると大体一緒だが、その他はそれぞれが食べた時に作って食べ、時間や献立や量によっては誘うこともある。

掃除も洗濯もそれぞれで、共用の部分はその時気付いた方が済ませる。お互いの領域は侵食しない。

その日常が、二人ともとても氣に入った。孫だけでなく弟子という立場も持つ以上、ほどほどに干渉し合わない関係がちょうど良か

ったのだ。

「後で買い物行ってくるけど、ついでに買うものある?」

重三はその言葉を待っていたように振り向いた。

「そうそう。便所の電球が切れておったんだが、どれを買ったらいいかわからん。それから…」

急に大きな咳払いを始め、ハサミを左右に忙しく持ち替えた。

「ちよつと参考までに聞こうと思ってたんだがな。その…明日、サトさんの誕生日でな」

空いた手で口髭をゴリゴリ擦りながら目を逸らしつつ、カオルにその先を促した。こっちの方が本題だったらしい。

「プレゼント? 駄目だよ、そういうのは自分で買いに行かないと」

「わわ、わかつとる! だが、何を買ったらいいのか、皆目見当がつかなくてな…」

じいちゃん、耳赤い!

彼女は真面目に考える振りをした。

「装飾品は趣味があるし難しいから、花でも用意して外食に誘ったら? たまにはデートしたらいいじゃない」

「デ・デートだと!? わしがか!」

「そう。そのわしが! その意外性が女性のハートにぐつと来るのよ。花は私が見繕って予約しておくし、お店はユウにネットで調べて予約してもらうから、まずは約束取り付けておいてね」

それ以上はとても耐え切れず、逃げるように自室へと戻った。後ろで、またしばらく咳払いの音が続いていた。

パーカー付きのTシャツとデニムに着替えながらも衝動を抑えられず、祖父に聞こえないように枕に顔を埋め、声を出さないように努力して笑った。

あの頑固じじいが、とうとうマジモード突入? いいじゃない。老いるくの恋!

じゃあこっちもマジモードで、サトさんを落とす算段を付けますか。

とりあえずはコウに電話、
ね。

2・東の海―2

「ぎやはは、あのじいちゃんが！超可愛いんですけど！サトさんてよく出入りしてる小柄で上品なおばあちゃんだろ？」

「おばあちゃんだったって、じいちゃんよりは結構年下なはずだよ？六十七・八くらいじゃないかな」

洗濯と片付け物を済ませてユウを駅前に呼び出した頃には、夏の陽が傾き始めていた。

駅ビルの花屋の店頭でウィンドウを眺めながら説明すると、ユウは遠慮なくげらげらと笑い出した。

まだ暑そうに、染みひとつない真っ白なポロシャツの胸をバタバタはたきながらひとしきり笑うと、デートコースについて真剣に思案した。

「和食だろ？懐石なら、前に親父がいつて言ってた店があるよ」

「天城家で利用するお店なんて無理無理！私も笑いを堪えるのに必死で、予算聞けなかったんだけど」

「ランチならどこでも意外と安いって。じゃあうちにノート取りに寄って、検索しながら本人に選ばせようぜ」

「…面白がってるでしょ」

「当たり前前だろ！こんなこと、滅多にあることじゃないからな！」カオルが横目で睨んだが、ユウは全然気にしない。幼い頃から道場に通っていたこともあり、自分の祖父同然に思っているのだ。

面白いのはもちろんだが、参加する気も満々である。

「絶対に！じいちゃんの前で笑っちゃ駄目よ。ややこしくなるから」わーってるって」

花束は、サトさんが着ている洋服の色調に合わせて選んだ。淡く、上品な白のリシアンサスのトルコキキョウ。差し色に濃紺のベラドンナを合わせ、あとはお任せでアレンジメントの注文を済ませた。

約束通りトイレの電球も買い、最後に食品売り場で夕食の買い物。

ちょっと迷って、鰯の開きを三尾カゴに入れた。

「たいした物はないけど食べてく？これと煮物と、あとは味噌汁くらい」

「おっいいね。カオルの煮物、久しぶりだな」

「残念、煮物はサトさんの差し入れの残りでした。でも多分私のより全然おいしいよ。こっくりしてて」

「何でもいいよ。俺んち洋食ばかりだから、正直和食はほっとする。じゃ、俺飲み物買ってくわ」

重三のためにビールの六本パックを手に取り、ジュースの棚の方へ姿を消した。

会計を済ませると、既にビニール袋を提げたユウがやってきて、さっとカゴを運んだ。

品物を詰めた袋も彼が持ち、歩き出す。

「ユウってさ、そういうの、お母さんに教わったの？」

「そういうのって？」

「当然のようにカゴを運んだり、荷物持ったり。前から聞こうと思ってたんだけど、すごく身についてるっていうか」

「そう？男が持つのは当たり前じゃん？」

「色々聞くとそうでもないみたいだよ。全然気付かなかったり、余計なことまでしちゃったり。アキなんて、カレが頼みもしないのに勝手に袋詰めして、スナックの上にジュース載せて中身ボロボロにしたって呆れてたもん」

ユウは想像して笑いながら、ビニール袋を持ち替えた。

「それだけ気を引きたかったんだよ。呆れたら気の毒だって。

言われてみると確かに、母親からしつっこいほど言われてたな。女の子には優しくしなさい。いつでも気を遣って、できるだけ女の子のしてほしいことをしなさいってさ」

「あのお母さん、あんなにユウに甘いのに、そんなとこだけしかり賤けたんだね。なんか変わってる」

ユウの母親は、サトとは別の方向だが、ものすごくエレガントだ。

家事に荒れた手などしていたことがなく、それでいて運動会には重箱に凝ったご馳走を作ってくる。そして毎年カオルのレジャーシートにも顔を出し、お握りばかりの弁当箱の横に、にこやかに差し入れてくれていた。

気配り上手な、セレブな奥様を絵に描いたような人。

「うちの母親はさ、三人目も男で滅茶苦茶ガツカリしたんだって。そんで、ある意味やけくそになったらしい。

二人目までは気合入れて教育ママやったけど、末っ子はもう、自分好みの男に育てて楽しもうって。笑えるだろ？」

女の子には優しくしろってのもそうだけど、勉強はそこそこでいいから遅くなれって剣道始めたしな。そうそう、なのに私服がヒラヒラ王子服だったの、覚えてる？」

その癖、思った通りのイケメンに育たなかったからいらない、勝手にしろなんて宣言しちゃってさ。顔は俺の責任じゃないって」

「あはは、どんなイケメンをイメージしてたのか、そっちが知っていた」

「鹿賀文史の若い頃、だって。あの両親からあの顔は産まれないだろー、どう考えても」

二人で笑い、カオルはほっと溜息をついた。

「でも、本当にいいよね。優しいお母さん」

「…あ、ごめん。俺」

「違う違う！そういう意味じゃなくて、本当にいいなって。自分にどんなお母さんがいたとしても、多分きつと羨ましくなっちゃうような話だから」

彼にしてみれば、話した内容に嘘はないものの、実際もう家族とベタベタ仲良くする年頃でもない。

一日中全員がそれぞれのスケジュールをこなし、家政婦さんの作った食事を別々に食べ、会話することなく終わることも多い。父親は大人しくて影が薄いし、母親もダンス、ピラティス、フラワーアレンジメントと趣味に忙しい人だ。

長兄のレンは腹黒い。どうやったらそんなに性格が捻じ曲がるのか、家族でも理解できない人物。ユウへ回すバイトだけでも、一体どんな裏稼業なのか絶対に知りたくもないし、本当は関わりたくもない。ただし向こうはユウを可愛がって、面倒を見てやってるつもりらしい。

次兄のシンは極度の人嫌い。なかなかの売れっ子なのにアトリエに引きこもり気味で、度々ユウが使いつぱしりをさせられている。こっちも、それなりのバイト代込みで。

近所に住んでいても、彼らがカオルと顔を合わせる機会がほとんどないことだけが救いだと思ってしまう。家族だから普段はあまり気にならないが、もしかしなくても特異な家族構成なのだろう。

それに比べたら、彼女と重三の暮らしぶりの方が、どう考えても羨ましい。

気楽で、ほどほどの距離感があって、それでいて深い絆が感じられて。

つつい家にいるより楽しくて長居し、稽古の時には夕飯まで食べて団欒に参加した気分で帰るのだ。

カオルに訂正してもよかったのだが、なんだか無意味に思えてやめてしまった。

家族だの、絆だの。力説すればするほど、上滑りして嘘臭くなりそうだ。

3・蒸気の海

カオルが夕飯の支度をする傍でユウはノートパソコンを立ち上げ、早速懷石の店をチェックしていた。

その隣には、氣難しい顔の割にはソワソワしている重三。

「まず予算はどうよ？」

「この際、予算は問わん。でも、まああまり高級で堅苦しくても、サトさんに気を遣わせてしまうしな。ほどほどで頼む」

「ん〜、なら飲み物込みで一人五〜七千円台までのコース、てこだな。じゃ、検索しましょ。近場で、駅前で、静かな雰囲気で、…料金的に個室は無理かな」

「んなつ！何を想像しておる！個室だなど！」

突然真つ赤になって、重三が立ち上がる。ニヤつきを必死で抑えるユウ。

「はーあ？じいちゃんこそ、何想像してんの？俺何も言ってないのに、やらしっ」

「ぐぐつ余計なことはいいいから、はよう選ばんか！」

あらら、じいちゃんマジでマジなんだ。「もうよい！」なんてキレだすと思ったのに。

カオルを見ると、眼鏡の奥の猫のような目を細くして、脅迫氣味にユウを睨んでいた。

わかったわかった、と目で合図して、条件に合う店のHPをクリックする。

「銀座まで出れば選び放題なんだけどな」

「わしはいいが、サトさんはちよつと身体が弱いからな。暑い中電車乗り継いで移動するのは辛いかもしれん」

「じゃあ新宿が限界か」

カチャカチャとキーボードを叩き、料理と店構えの写真をチェックし、ブックマークを付けて次へ移る。

「ちょっと待て、早過ぎてよくわからん。今の店は駄目なのか？」
「一件に時間かけてる場合じゃないよ。手際よく選んで早く電話しないと。」

まったく、こういうことはもつと早く相談してくれよな。

前日じゃ、メールより電話の方が確実に安心できるし、あんまり忙しい時間に予約の電話なんてできないんだから」

「い、いや…まさか外食って話になるとは」

ぶつぶつと言葉を濁し、緑茶をすすって誤魔化す。

最初はプレゼントという発想しかなかったが、今では外食が相應しいと思い始めていた。

それどころか、カオルが出掛けてすぐ、こつそりいそいそと電話したくらい、乗り気になっていた。

老いては子に従えというが、デ・デ・デート…か。

何十年振り…と思ったが、よくよく考えてみれば、若かった頃は夫婦以外の男女で外出など考えもしなかった時代。

見合いし、結婚し、夫婦として出掛ける。そんな時代に文句がある訳もないが、要するにこの歳で、初めてデートをするということだ。

人生、長く生きれば余禄もあるということか。

おかしなテレビにしか見えない機械に、次々と目まぐるしく情報が映し出される。

口を出そうとするが、面倒になりユウが選ぶのをただ見ていた。

…老いては子に従え、か。

普段は絶対に認めないが、もしかすると案外いい言葉なのかもしれない。

今だけ、若者に任せることにしよう。

ぼんやりしていると、ユウが一息ついてパソコンを重三が見やすいようにぐつと曲げた。

「条件に合ってよさそうなところ、絞ったよ。」

探せば探すだけキリがないから、とりあえず見て考えな。

桐の家はほら、中庭の庭園が見えて雰囲気よさそうで、多分親父が*い*いって言っていた店だよ。

ほむらは、コースは高いけど、ミニ懷石で四千八百円なのが手頃だろ。

寿京庵は蕎麦がメインで一品料理も多いから、小食ならアラカルトで好きな頼むとちょうどいいかも」

三軒をじっくり見せてもらい、二人で食事することを想像する。

普通の店で向かい合わせに座ることを考えると、どうにも気恥ずかしくなった。

「庭園：があるのはいいな。緑があるのはいい」

他に何か見るものがある方が、会話が途切れても気まずくなくて済むかもしれない。

ほどほどに喋り好きで楽しい相手ではあるが、話題に乏しい自分に退屈されない保証はない。

ユウは見透かしたように返事をして、電話番号を控えた。

いろいろメモする振りをしながら、さり気なく聞く。

「あのだ。この際だからはっきりしてほしいんだけど」

「なんだ？」

「二人は合意の上で付き合ってるの？」

カオルの包丁の音が止まった。思わず指を切りそうになりわたわたする。

ユウったら、聞きにくいことを、さらーっと聞いたよ。

でも、自分が聞くよりユウに聞かれた方が、答えやすいのかもしれない。

静かに、ゆっくり出汁を取る素振りで見聞き耳を立てた。

「どういうことだ？」

質問にピンとこない重三に苛立ち、ユウはペンでテーブルをコツコツ叩いた。

「だからっ。ちゃんとコクったのかってこと」

「？若者言葉はわからん」

「だーかーらっ言にくいこと言わせんなって。」

サトさんに直接ちゃんとききだって言ったのかってこと！」

「なっとなっ何を世迷い言を！そんなではないわい！」

「ああ？そんなでないのに誕生日にお祝いランチなんかするかよって。」

昔みたいに、言わなくてもわかるだろ、とかいうのは通用しないからな！

こんなにいい店に招待しといて、何もなしで帰ったらガツカリさせるぞ。ていうか、俺がガツカリだ！」

「お前の落胆は知ったことではない！大体、そんな歳でもないだろう。お前たちのように若者ならいざしらず」

「歳は関係ねえよ。とにかく、明日は気合入れて、コクるなりプロポーズするなり、覚悟決めろよ？」

「プ…！」

重三が目を見張った時、廊下で電話が鳴った。逃げるように、重三はさっと立ち上がって廊下へと急いだ。

それを見送り、すぐにカオルが小声で釘を刺す。

「もう、あんまり追い込まないでよ。臍曲げると長いんだから」

「大丈夫だって…でもさ、マジでプロポーズとかしちやったら、どうする？」

二人のために思ったアドバイスのつもりだったが、さすがにプロポーズは言い過ぎたと反省した。勢いで、ちよつと無責任に火を点けちゃったかな。

カオルはコンロを止めた。どう考えても、重三と結婚はつながらない。

「プロポーズは…ないでしょ」

「いや、わかんねえよ。サトさんて同居とかしてんの？」

「一人暮らしだと思ったけど、娘さんは近くにいないかな」

「もし結婚とか同居とか言い出したら…複雑？やっぱ俺、まずいこと言ったかな」

たつぷり三秒、彼女は考えた。味噌汁を注ぐ。

「歳とか考えると、確かに不安で心配。でももし本気でそんな話になるんだったら、それはユウの責任じゃなくて、じいちゃんの問題だと思う。私は喜んで全面的に協力したいな」

廊下のぼそぼそとした話し声が終わり、受話器を置く音がした。

それなのに、重三はしばらく戻らなかった。

それに気付いて二人が入り口を気にしていると、憔悴しきった表情の彼が戸口に現れた。

「ユウよ。予約は、もう、いい」

戸口から中へは入ろうとせず、食器棚の一点を見つめていた。

不安な空気が、急激に充満した。

「え…なんかあったの？」

「サトさんが、倒れた。心筋梗塞で、今夜がヤマだと。ちょうど娘さんが来ていたのが不幸中の幸いだった。慶心医大に運ばれたらしい。…これから、病院へ行ってくる」

彼は作務衣の衿を緩め、紐を解きながら自室へ下がった。

沈黙。

カオルは言葉を失くしたまま、味噌汁を静かに置いた。

ユウも言葉を失くしたまま、パソコンのモニターを静かに閉めた。食事はすっかり出来上がったが、食欲はすっかりなくなっていた。時計の音、冷蔵庫の唸る音、炊飯器が保温する電気音。微かな生活音が、余計に静寂を際立たせていた。

食卓にすでに出された、昼に差し入れられた煮物ばかりが目についてしまう。

しばらくすると重三が着替えて顔だけ出し、

「いつ帰るかかわらんが、お前らが心配することじゃない。カオル、夜稽古は中止だ。道場の鍵が開いているはずだから、閉めるのを忘れんようにな。」

…ユウ、信用せん訳じゃないが、飯を食ったらすぐ帰れ。わかったな」

強張った表情でそれだけ言うと、彼は裏口から出て行った。
再び、沈黙が流れる。

カオルはエプロンを解き、煮物を保存容器に詰め替えた。

「慶心って…」

「ああ。レン兄の病院だ。つっても、内科だから何の役にも立てないけど…」

「…これ、冷凍しちゃうね。じいちゃん、次いつ食べられるかわからないから」

「ああ」

「…どう、しょうか。私たちが参っても仕方ないし、とりあえず食べる？」

「気分じゃないけど、な」

「うん。…忘れないうちに、道場の鍵閉めてくる」

「じゃあここ片しておくよ」

「お願い」

まだ胸の中はザワついていたが、「心配しても仕方がない」と自分を奮い立たせるカオル。

ああ、この感じ、あの時と似ているんだ。父親が亡くなった一報が入った時と。

彼女が道場に入ると、窓越しに月明かりが差し込んでいた。

午後から閉めつきりで、ここだけ空気と熱がこもっている。

窓の鍵を確認し、いつも子供たちが出入りする扉の鍵を閉めた。

かちやりと小さな音がし、無為にがらんとした道場を見回した。

昔は賑やかだった。たくさん生徒たちと、じいちゃんと、お父さんと。

お父さんは優しくて頼もしくて、でもある日突然、死んでしまった。じいちゃんも、いつか突然、いなくなってしまうのだろうか。

私独りで、この家に住む日が来るのだろうか。

それって、すごく、すごく怖い現実だ。

慌てて眼鏡を外し、指で目頭を押さえる。泣くのは嫌い。

嫌い以前に、泣く資格なんて、ないんだから。

―その時。

ぐらりと家が揺れた。

一瞬にして平衡感覚を失くし、カオルは床に倒れこんだ。

4・雲の海―1

顔を上げると、目の前の光景が変わっていた。

月明かりで飴色に光っていた道場の木の床に、強く輝く円陣が現れたのだ。二重の円の間に、見たこともない文字のようなものが浮き出ている。

そしてその円の中心には、禍々しい色の、黒い水のようなものが湧き出ている。

彼女はただ、その光景と恐ろしさに圧倒されていた。目の当たりにしながらも、現実のこととして目に映らなかった。

同時に、深く暗い井戸に突き落とされたような、絶望感に襲われる。

はっと我に返り、飛んだ眼鏡を拾って慌ててかける。

もちろん現状が変わる訳もなかったが、しっかりと見るだけの冷静さを取り戻し、少しだけ近付くことができた。

黒い水だと思ったものは、正確には、うねっている空間だった。

そこだけ宇宙空間が現れたように、ただぼっかりと波打つ、黒い空間。

突如、中から鋭い物体が突き出て光が迸った。同時に横から、人間の、腕。

その手が穴から這い出すかのように、何もない暗がりをつかみ、身体を持ち上げようとしている。

黒い服が肘までまくられ、手の周りだけ赤黒く血塗られているのが見える。対比した白い腕が妙に生々しい。

誰か、出て来る――

カオルは初めて、大きな叫び声を上げた。

「どうした!」

ユウが応える声、足音。

とうとう、淵ががっちりと押さえられた。次の瞬間、ほとんど見

えないほどの速さで何かが飛び出し、背後から押さえ込まれた。

「うつ…」

助けて、と言おうとしたが、口も塞がれて叶わなかった。

「カオル！離せ！」

ユウが道場に転がり込み、そのまま一直線に背後の人間に飛びかかるうとした。

しかし即座に横蹴りが入り、壁に叩きつけられて崩れ落ちた。

カオルは口元に当てられた手を掴み、抵抗を試みる。この手は、男のものだ。しかし、それ以外にはわかることが何もない。

血に染まった手で押さえられ、鉄を含んだ臭いで気分が悪くなりそうだった。剣道で鍛えた身体全身で暴れるが、男は相当に力強い。何でもいい、何かできることは。必死で見回した。

先ほどユウを蹴り上げた脚が見える。そしてその陰には、円の中心から突き出てきたものの正体が横たわっていた。

今は鉛色に月明かりを浴びているだけの、黒い柄の日本刀。

このまま、この太刀で殺されてしまうのだろうか。

疲れと恐怖で、汗が頬を伝う。

耳元で、男の声がした。

「疲れたか？騒がないと約束すれば、手を離す…カオル」

押さえ込む力の割には、敵意も殺気も感じない、平坦な声だった。名前を呼ばれ、自分を知っているのかと錯覚しそうになる。いや、さつきユウが私の名を呼んだはず。騙されちゃ駄目だ。

もう一度抵抗し、男の腕に爪をたて、前かがみになって身体を離そうとする。

「ユウは一撃だというのに、大した体力だ」

腕や首から力が抜けた。限界に達していたし、信じられない単語が耳に入ったからだ。

私はユウのこと、名前呼んでない――

息が苦しくなり、目の前が暗くなった。

「大丈夫か？聞く気になっていたら、聞いてくれ。私は敵ではない。」

大騒ぎにせず事態を收拾しようとしているだけだ。まだ、抵抗するか？」

力なく、首を横に振った。信じる信じないは別問題として、もう力が残っていないかった。

恐る恐る口元の手が緩められ、彼女が騒がないのを確認すると、ゆっくりと身体を離された。

ぺたりと床に座ったまま、見上げるように後ろを振り返る。

男は二十代前半くらいだろうか。黒い開襟の、カッチリしたデザインのシャツを着ていた。靴もボトムも黒一色。

そして印象的なのは、長めの髪も瞳も同じように漆黒な、端正な顔立ちだった。

「…手負いの獣のようだな」

「誰なの？」

しゃがれた、小さな声しか出てこない。

気配が静かになって気が付くと、何事もなかったかのように円陣も黒い空間も消え去っていた。

隅で二つ折りになって倒れていたユウが、呻き声を上げて身動きする。

「ユウ…」

まだ立ち上がることはできず、男を見据えながら腕の力で少しずつユウの方へ移動した。

男はカオルの顔一面に血を付けたことに気付き、自分の手を見た。静かに、動揺も見せず、目を閉じて背中に手を遣る。

左の背中に傷があり、カオルとの格闘によってひどく出血していた。青白い顔に、冷汗が浮かんでいる。

「ユウ、起きて、大丈夫？」

「うあ…カオル」

うつすらと目を開け、彼はカオルを見た。そして、黒づくめの男も。

腹と頭が痛いことも忘れ、ユウは庇うようにカオルの前に転がり

出た。

「なんだ、お前！」

男は床の太刀を取り上げ、座ったまま背中にかけて刀袋を下ろして中の鞘に収めた。二本目の白い剣の柄が露わになった。

男はふらつきながら必死でそこまでやり遂げると、苦しげに小さくなった。

ユウもそこで冷静になり、カオルの顔の血、床にぼつぼつと垂れている赤黒い血に気付いた。

男は徐々に黒い瞳の焦点が外れ、背中を庇うように右側に手を着いて横になり、とうとう目を閉じた。慌てて近づく二人。見る見るうちに、血溜まりができる。

「ど、どうしよう、何なのこれ」

「救急車！変な奴にここで死なれたら困る！」

気を失っていると思われた男が、がしつとユウの腕を掴んだ。

「ひっ！」

「駄目だ。少し休めば…死ぬほどじゃ、ない…誰も、呼ばないでくれ。頼む…」

床に完全に頬を落とし、今度は本当に気を失ったようだった。

「そんなこと言われたって、どうしよう」

どうしよう、とそればかり言っていては仕方ないのはわかっていて、カオルには他に何の案も出すことが出来なかった。

結局ユウに、全部丸投げしようとしているのと同じじゃないの。

どうにかしなきゃ、だから、だから、どうしよう…あ、また振り出し。

ユウは黙ったまま、少しは冷静に分析していた。とりあえず、道場の電灯を点けて観察する。

血の色に頭が痛くなり、そこから目を逸らした。

自分は医者ではないが、父やレンの仕事の話を聞かされるうちに、なんとなくわかることもある。

額に手を当て、脈を取る。冷たい。しかし脈は自分と比べ、ひど

く弱いというほどでもないようだ。

確かに死ぬほどじゃないけど、出血が多めで、貧血で…

考えあぐね、やはり救急車は呼ばないことにした。

名前がわからないどころか、どこから来たかもわからない男の説明を、高校生二人でできるとは思えなかった。

警察沙汰になるのは明白だ。そして重三にも連絡が行き、負担を掛ける。それを回避するなら、やれるだけのことをやるしかない。

ユウはすつくと立ち上がった。

「ちょっと、自宅へ戻ってくる」

「えっやだ、どうして！」

「なんとかする。とりあえずカオルは顔洗って、綺麗なタオル用意して待っててくれ」

そうと決めたら、急がないと…

4・雲の海―2

門を出て、走れば十歩の三軒隣。自宅は玄関灯以外に、どの窓にも明かりが点いていなかった。

玄関をそつと開け、中を窺う。こんな時間にも関わらず、まだ誰も帰っていない。家政婦さんは、既に帰ったようだ。

こりゃ、好都合。

無人をいいことに、二階に駆け上がってから一応、耳を澄ます。気配、なし。

念のため、自宅にいても暗い中静かに過ごすこともある、シンの部屋をノックする。無音の後にそつと中を覗くと、やはり不在だった。その隣に、目的の部屋がある。

長兄である、レンの部屋だ。

こちらでもノックし、返事がないのを確認して扉を開ける。

確か、デスクの引き出しのどこかに、怪しげな道具と共に手術用の針や糸があった筈。

それを確保できたら、医大の時から並んでいた教科書を調べる予定。

どうして俺は、見ず知らずの男のために、誰よりも恐ろしいレン兄の部屋に忍び込んでいるのか。

違うか。この上なく迷惑な話だが、あの男のためじゃなくて、俺とカオルのためなんだよな。そうでなければ、こんな泥棒まがいのマネなんて働かない。いや……れっきとした泥棒か。まあ、持ち主は持ち主で不法行為のオンパレードだから、いいでしょう。

レンに気付かれないよう、物をどけて探せばきつちりと同じ場所に同じ向きで戻す。

それくらいしないと、絶対に悟られてしまう。

「ヒット！」

思わず言葉が出た。

真ん中の引き出しの手前に、それらしき道具がケースに入れられていた。ユウがそれを取り上げた時、後ろで声がして飛び上がった。「何か、探し物？」

足音も、気配も一切なかった。

背中をだらだらと冷汗が伝う。ゆっくり振り返ると、部屋の主がいた。

「一日働いて疲れて帰ってきたのに、おかえりもお疲れ様もないのかな」

彼は首を傾げ、心の底から楽しそうに笑っていた。

それが、その笑顔が、何より怖い…

「お、おかえりレン兄、お疲れ様でした」

「はいただいま」

彼はニコニコしながらカバンを置いたが、その場を動こうともしないし、電灯も点けなかった。

「ご、ご、ごめん。俺」

「いいじゃないか。僕のモノはユウのモノ。そのつもりがなければ、そんな危ないモノばかりの引き出しには鍵をかけるさ。そうだろう？」

「や、やっぱり、いいです」

つかつかと近寄り、ユウの手にした物を取り上げる。

ユウは今すぐにも逃げ出したかったが、目の前には、物理的にも精神的にも兄が立ちはだかっていた。

力はこちらの方が強い。逃げるだけならできるだろうが、その後は？

地獄の果てまで追ってきて、笑顔で抹殺だ。そう思われることで、常に兄に支配されていた。

「ふうん、これで誰を縫うつもり？まさか新手的プレイか何か？」

自分の背丈を追い越した弟の瞳を下から覗き込む。

部屋を漁られた怒りより、発見されて怯える可愛い弟をじりじり虐める楽しみの方が、遥かに大きかった。

「何言ってるんだよ。その…わかった。事情話すから、許してくださいさ」

いつ」

手を合わせて頭を下げるが、レンは両頬が潰れておかしい顔になるほどの力でユウの顎を掴み、笑顔は崩さずにじり寄った。

「僕に背くほどの理由があるなら、言ってみろ。…嘘を吐いても、無駄だよ」

「…変な男が、カオルの道場に侵入したのを見つけて」

「殺したのか？」

「殺していない！入って来た時から、背中に怪我してたんだ。救急車でも警察でも、呼んだらとにかく大騒ぎになるし、真田のじいちゃんや友達が…そう、慶心さんだけど入院してて今夜がヤマらしいし、心配させたくないからって」

レンの瞳が、ずっと医者らしくなった。一時、毒が抜ける。顎を解放され、よろめくユウ。

「血は？鮮血が勢いよく出てるか？ドス黒いか？深さは？傷はちゃんと直接見たのか？脈は取ったのか」

「えっと、静かに赤黒い血が出る。傷は…見る暇がなかった。青白い顔してるけど、脈は普通…だと、思う」

レンはケースを引き出しに戻し、初めて乱暴に、音を立てて引き出しを閉めた。そしてその勢いのまま、ユウの胸ぐらを掴んで壁に押し付けた。

片手はポケットに突っ込んだまま、優しく静かに言う。

「お前、その男を殺すぞ？死ぬような傷じゃなくても、素人が適当なことやって、雑菌でも入ったら一発だ。お前の処置でそいつが死んだら、一体どうする…あんまり、僕に心配させるな」

「あ…ごめん」

空いた手で子供のように頭を撫でられ、一瞬、ついホロリとしそうになる。

「お前が警察にでも捕まってみろ。…僕の可愛い、大事な駒が減ったら困るからね」

「う…」

これだ。上げて落とす、お馴染みの精神攻撃をくらう。

「いいよ。僕が行こう。カオルちゃんもいるんだろ。」

「…そうだ。僕のモノはユウのモノ。ユウのモノは僕のモノ、だったな」

カバンを持ち直し、必要な物が揃っているか開けてチェックする。別の引き出しから消毒薬を足し、様子見で使うかもしれない薬を次々に放り込んだ。

「な…何がお望みで？」

次が続かないので、恐る恐る聞く。

「今度、カオルちゃん一晩貸しなよ」

ラベルをチェックしながらの淡々とした言い方が、本気半分の冗談の匂いを漂わせ、一瞬でがっとなくなり、次にぞっと鳥肌が立った。

「無理！というか、まず俺のモノじゃないだろ！」

必死でレンに縋って懇願する。

「なんだ、まだヤツてないのか？呆れるほどのヘタレだな」

「そ・そうだけど、そういう問題じゃなくて、モノじゃないから！」

「そうか。ユウがいらないなら、僕がもらおうかな。ちょっと本気を出せば…」

「わあああっレン兄、頼む！頼むから！」

泣きそうなユウの手を冷徹にぱつと払い、急ぎ足で歩きだす。

「馬鹿で純で、本当に可愛いな、お前は。あのテの女の子は、一回押し倒せば夢中になるって。その後は調教次第、駒どころか、奴隷にでもなってくれる」

「うわーっ聞かない聞かない！」

両耳を手で細かく叩いて、絶対に聞かないようにしながら付いて行く。聞いただけで、耳から毒が入り込んで来るような錯覚に襲われてしまう。

レンはこれ以上ないくらい幸せそうな表情で、三軒隣に急いだ。

5・泡の海―1

「あ、レンさん……」

時計を見れば十分間くらいだったが、カオルにとってはとても長く感じられた。

まず洗面所で顔を洗い、タオルを何枚か出し、ハンドタオルを一枚濡らして戻った。

まだ冷や汗をかいて意識のない男の額を、ビクビクしながら拭いてやる。

落ち着かず、何度も入口を見る。

今は動かないこの男が怖いかどうかを聞かれれば、怖くない。

彼が流している血が、閉じたままの瞳が、そこにもしかしたら迫っているかもしれない死が、とにかく怖かった。

シャツの切れ目を見るが、シャツも黒く傷も黒っぽく、よく見えない。思い切って裾を持ってたくし上げ、背中を露わにした。

「う……わ……」

傷は幅が狭く、ナイフで刺したように見える。

派手ではないがたらたらと出血し続けていた。

「……ぐ……」

彼が呻き、身動きした。

抱き締めるようにしていた袋の中の刀がガチャガチャと音を立て、顔の部分に柄が当たった。

刀をどけてあげようとそっと引っ張るが、意識がないままがつちりと押さえ、遠慮がちな彼女の力ではどうにも取れなかった。

「取らないから……痛そうだから……」

弱々しく言うが、無反応だった。

そこへ、レンとユウが入って来たのだ。

「カオルちゃん、無事？」

表向き、一切毒を含まない言い方で駆け寄るレン。

三つ編みが乱れ、シャツに血が移ったカオルを見て、ただ事ではないことを悟った。

視線にカオルは慌てて髪を撫で付け、男を示した。

「大丈夫です。それより」

身動きでまた隠された傷を見せる。レンは素早く脈を取り、瞼を開けて反応を調べた。

「ユウ、ハサミ。消毒薬を二つとも」

ユウも駆け寄り、兄のカバンを探って手際よく渡した。

レンは手術用の手袋をはめ、素早く男の洋服を切り裂き、身体の向きを変えさせた。

ユウの目に、予想以上に生々しい血と傷が視界に飛び込んだ。くらっ

どすんと尻もちをつく。顔から血の気が引いていた。

「ユウ大丈夫？どうしたの？」

「な、なんでもない……」

「だらしないな。そんなことで、本当に自分でやろうと思っていたのか？」

大胆に消毒薬をかけると、男が呻いた。

「意識が戻った」

注射器に透明な薬剤を注入し、傷の周囲に注射した。麻酔が効くまでに傷を観察する。

「鋭利な物で切られたにしては、断面に熱傷が見られるな。いや……凍傷、か？」

状況はわからないが筋肉に沿っているし、皮下組織を傷つけただけだ。これならすぐ綺麗に治るだろう」

「レンさんが来てくれてよかった。血がたくさん出て、怖くて……」処置の合間、彼は最高の笑顔をカオルに向けた。

「確かに貧血は起こしているけど、これは元から栄養失調気味だな。輸血までは必要ない。」

素人の目には大変な傷に見えるけど、こういう表面的な傷では、

滅多に死ぬようなことはないよ。

消毒もしたし、薬を飲ませれば感染症も防げるから、安心して。もし万が一、高熱が出るようなことがあったらすぐ、連絡すること」

テキパキとした口調に、カオルはほっとしてユウを見た。まだ、蒼い顔で座り込んだままだ。

「本当に無鉄砲なんだから。レンさんがいてくれて、よかったね」

ユウは黙って無難に頷いて、頭を床に付けて血が戻るのを待っていた。

マジで、格好悪い。レン兄は本職だから当たり前だけど、どうしてカオルは大丈夫なんだよ。

女の方が神経太いって、ジュンが言ってたのは本当だな。

レンはいかにも簡単そうに縫合を済ませ、ガーゼを当てた。半端に切ったシャツも完全に脱がせ、カオルに手伝わせて床を拭いた。

「これで、よし。それでどうするの。警察の知り合いに電話しようか？」

手袋を外して汚れたシャツの上に投げ、カバンから携帯電話を取り出した。

「ちよつと、待ってください…この人、何か事情がありそうなの」

警察を呼んでどうする？ 玄関から侵入されたと嘘を言う？

それは簡単なこと。でも、床から出てきた不思議な現象を、男に直接追及することはできなくなる。

カオルもユウも、それがどうしても聞きたかった。

レンは腕組みしてしばし考え、

「親切にしてやるつもりなら、気が付くまでちゃんと寝かせて、何か食べさせた方がいい。

詳しく話したくないみたいだし、僕も付きっきりで協力するほど暇でもないし。当分ユウを貸すから、便利に遣って守らせたらいいよ」

「話したくない訳じゃないんですけど、でも…本当に助かりました。ありがとうございます」

レンは携帯を胸ポケットに入れた。入れ替わりにカードを出す。

「お礼はデート一回でいいよ。なんてね。」

ユウがしょっちゅう入り浸って迷惑かけているんだから、気にすることない。ただし、何かあったら大人を頼ること。いつでも駆け付けるから電話して」

プライベート用の名刺を渡し、ユウを手招きして外に出た。玄関から離れ、話が漏れ聞こえないところで弟に耳打ちする。

「二人してひどいな。僕を仲間に入れてくれたら百人力なのに。」

「これからどうするつもりか知らないけど、もし殺しちゃったりしたら、すぐに電話しろよ。どうにでも、処理してやるから」

肩をぽんぽんと叩いて、凍っているユウを尻目に門を出た。

綺麗な月明かりを仰ぎ、末弟の行く末を想像する。

シンの奴は完全に失敗だったが、もしかするとユウはもっと使い物になってくれるかもしれない。

5・泡の海―2

道場は蒸し暑く、硬い床では休ませられない。

絶対に刀を離さないで重労働だったが、協力して男をユウの背に乗せ、空き部屋へと連れて行って横にした。生前、父が使用していた部屋だ。

家具がそのままになっているので少し狭いが、なんとなく両親が見ているようで、仏間に寝かせるのは気が引けたのだ。

そこまで行ってから男のズボンも当然汚れていたことに気付いたが、脱力した人間から脱がせることは難しいのでバスタオルを重ねて敷くに留め、ようやく一息つくことができた。

ユウは箆笥に寄りかかって座り、ただ眠っているだけの男を眺めている。

カオルは男の枕もとに正座し、時折顔を拭いたり、熱がないかと額に触れたりしていた。ポツリと、不安が口を衝いて出た。

「これで、よかったのかな」

「何が？」

「だって、この人誰？ どうしてうちに来たんだろう」

「知らないよ」

「…機嫌、悪い？」

「そんなことはないけど」

まだまだ悪魔のような兄の言葉が耳に付いて離れず、内心葛藤していた。

こんなことがなければ、今頃家でギターでも弾いて練習していた筈なのに。今更思い出したけど、さっきすげえ勢いで蹴られたし。目が覚めたら、絶対文句言ってる。それで、大した説明がなかったら、殺…さないけど、一発殴ってる。危ない。今、一瞬レン兄に毒されそうだった。

カオルは傍らのカードを取り上げてじっと見た。水色の和紙の、

高級そうで綺麗な名刺。

紺色の斜体で「天城レン」。下にはパソコンと携帯のメールアドレスと電話番号がある。たった一枚の名刺で、この男の身体に関しては安全を保障されたかと錯覚できてしまうほどに、心強かった。何かあつたら、大人を頼ること。

この場合の大人とは、レンをおいては他にいない。大人…大人、かあ。

「内科、なんだよね」

「え？」

「レンさん」

「ああ…うん」

「縫うのもできるんだ」

「医大で習ってるし、内科の前は救急センターにもいたから」

彼女はふう、とため息をついた。

「ふうん…素敵だな」

「どっどこがっ！」

「だって仕事はできるし、優しいし、いい匂いとかさせちゃってるし、大人の色気だよな。」

ユウの家族が引越してきた時、私たち五歳で、その時もう高校生だったでしょ？今の自分と比べても、その時点ですごく大人っぽかったし、実は初恋だったんだ」

思わず、身を乗り出すユウ。

その頃、既にもう兄が立派に悪魔だったことを思い出す。シンの人間嫌いもちょうどその頃からで、多分兄が原因だ。

「お・大人って、あんな汚い大人は駄目だろ！駄目！駄目駄目！絶対駄目だ！」

不必要なまでにリアルに、レンの毒牙にかかるカオルが目に見え浮かんだ。兄は、少しでも欲しいモノならあらゆる手段を駆使しても絶対に手に入れる。

今度、カオルちゃん一晩貸せよ。

冗談じゃない。初恋なんて知られたら、マジでその気になりかねない。

「それ、絶対に、絶対にレン兄に言うなよ！」

ユウの剣幕にびっくりして、唇に指を当てた。

「シッ！静かに！…どうしたの急に。今もし好きだったら、こんなこと言わないってば」

むすつと黙るユウ。

レンのことが好きだったなんて、知らなかった。

…いや、この際五歳の頃の話を蒸し返すのはやめよう。

「…じゃあ、今は誰が好きなんだよ」

そっぽを向いたまま、ぼそりと聞く。

「え…何で？」

どきつとして聞き返す。

いないって答えれば、一言で済む話なんだけど。

「いや…参考までに」

「参考？何、それ。一体、何の参考よ」

ユウはうまく説明できずに困った。

普通そこから先まで追及しちゃう？「参考」は「参考」でいいだろう。

いくら成り行きでも、知らない男越しにいきなり告白するってのも、空気が読めない行動だ。

なんでもいいからと、とにかくボソボソ取り繕うしかなかった。

「だから…一緒に帰ったり、どっか寄ったりしてるの、もし迷惑だったら悪いかって。」

誰も好きじゃないなら俺は構わないけど、好きな奴にそんなところ見られたら不利だろ？」

「…不利、なんだ。へえ」

急速にイライラと胸に広がるものがあり、自然と声を荒げた。

「そういうユウはどうなのよ。ストリートやったりするのに、不利なんじゃないの？」

アキが、天城くんは最近ポイント高いって言ってたよ。もし人氣が出て、ファンの女の子に囲まれたりしたら、選りどり見どりだね」
「何だよそれ。別にモテるためにやってる訳じゃないって、わかってるだろ。…どうして怒るの？」

カオルはぷいっと横を向いた。

「怒ってないよ」

「怒ってる」

「怒ってない！自分でもわからない！」

ただ黙って、動揺して惨めな気持ちが収まるのを待っていた。
どうして私、怒ってる？…違う違う。予定外のごたごたでナーバスになっているだけ。

だからといって、せっかく頑張っている歌のことで悪く言うなんてルール違反だ。一瞬で反省し、自分の手を見詰めていた。

「…ごめん」

「いいよ。俺が最初に変なこと言ったんだ。ごめん。やつぱりちょっと、レン兄のことで機嫌悪かった。奴の裏の顔を知ってるのって俺やシン兄くらいだから」

「あんなに人当たりがよくて素敵なのに？」

「だから目をハートにすんなって。お前は知らないだけ！」

「ふうん…兄弟がいたらいたで、大変なんだね」

自嘲的に吹き出して、ユウは手を横に振った。

「多分、こんなに屈折してんのはうちくらいだと思うけどな。その辺は、当事者じゃないとわかんないことだから」

全然、傍目には仲のいい兄弟に見えるけど…

—ユウを貸すから、便利に遣って守らせたらいいよ
当然のように言い放った台詞が、どことなくひっかかってはいた。あれが軽口でなく素で出た言葉なら、確かに屈折した兄弟関係かもしれない。

まあ実際のところ、一人っ子の私にはわからないけど、ね。

「いない、と思うよ。多分。私、そういうとこすごく下手な自信、

あるから」

足を崩してデスクの足に寄りかかって言った。刺々しい気分は、多少の惨めさを残して消えていた。

「何が？」

「好きな人がいるかってこと。だから、私は迷惑でもなんでもないよ。」

ユウこそ、私なんかといるところばかり見られてたら、せつかくの人氣にミソがついちゃうんじゃないかって心配してた。だからさつきはつい嫌な言い方しちゃったけど、私は私なりに応援してるからさ、迷惑なら別にいいから。

帰りに会ったからって一緒に歩かなくなっちゃっていいし、ランチだって遠慮するし」

「それ、本気？それとも遠慮？俺的には、そんな不自然に自分を曲げるくらいなら、歌う意味がないって思ってるけど」

今度はユウが惨めな気分になる番だった。

「あ、もちろんユウが迷惑なら、って前提でね。だってどう考えても、友達が誤解したり冷やかしたりするのは当然だもん。…付き合ってもいないのに、二人でランチしてるのとか目撃したら」

じゃあ付き合っちゃう？そうしたら誤解じゃなくなるだろ？

付き合ってないから、逆に冷やかされるんだよ？

…って、どうして言わないんだ俺は。

意を決して、言うか。

いや、言わないか。

…よし、言うか。言おう。言うべきだ！

「じゃあ、さ」

重い口を開いた時、男が身じろぎした。

うわ。静か過ぎて、途中からこいつのこと完全に忘れてた。なんでこのタイミングで動くかな！まったく。

カオルはユウの内心を知る由もなく、男の顔にタオルを当てた。うつすらと、男が目を開けた。

「大丈夫、ですか？気分はどう？」

彼は漠とした意識でカオルを見詰め、逆にいるユウも見た。焦点がきりつと合い、はっとして身体を起こす。ぱつと辺りを見回したが、刀が手に握られていることに気付くと、ほっとして中を確認した。

「随分、大事なんだな」

ユウが脱力気味に問い掛けると、男は黙ったまま刀袋を抱き締めた。

カオルは居心地が悪くて立ち上がり、電灯を点けた。ここまでは必死でそれどころではなかったが、上半身を露わでいられたままでは話もできない。

「着る物…何かないかな。お父さんのはもうほとんど残ってないし」
言いながらも一応、筆筭を開けようとしたが、その前にユウが声を掛けた。

「俺の取りに帰ってもいいけど、あれ、ないの？体育祭で作ったＴシャツ！」

「そうだ。あれメンズの一サイズだったよね！」

いい思い付きに浮足立ち、彼女は自室へ行った。いなくなった隙に、ユウが男に釘を刺す。

「今じゃないと言えないから、事情を聞く前に先に言うておく。」

一個貸し、だからな。お前のせいで、自宅で手ぐすね引いて俺を待つてる悪魔がいるんだ」

彼は初めて、ユウにはつきりと口をきいた。

「済まない。彼女が戻ったら、事情は全て話そう。ここまでの迷惑とは比べものにならないくらい、まだ面倒を掛けてしまうことになるが」

すぐに彼女が戻ってきた。

手には、鮮やかなオレンジの半袖Ｔシャツ。

「ごめんなさい。とりあえずそれで我慢してください」

「謝ることないぞ、カオル。まだまだ迷惑に終りがないらしいから」

「怪我人にそんな意地悪言わないの！」

「2-Aというロゴと、ふざけて寄せ書きしたマーカーが、どう考えても不似合いだった。」

男は戸惑い気味に袖を通した。

「ユウの怒りはもっともだ。しかし、まず私の話を聞いてもらえるだろうか」

「もちろん、そのつもりじゃなければ今頃病院か警察だから」

男はふつと笑い、蒲団の上に座り直した。

刀を膝の前に綺麗に置き、背筋を伸ばして二人に対峙した。

6・波の海―1

「私は、ナツネという。ある目的のために、いろいろな世界を移動している。さつきは押さえつけて悪かった。緊急事態だったのだな」
彼は腕を正座の膝に載せ、淡々とした口調で説明した。

「いろいろな世界―？」

ユウはカオルを見、カオルもユウを見た。困惑するしかない、漠然とした語句の羅列としか思えなかった。

ただし、実際に有り得ない円陣や空間が現れたことは事実。

「どうして、ユウの名を知っていたの？」

「俺のこと、知ってるのか？」

ユウが驚いて、男をまじまじと見た。何度見ても、やはり知っている顔ではない。

ナツネは一度咳払いをして、語り出した。

「突飛な話で信じ難いとは思うが、とりあえず最後まで聞いてほしい。

私は約百年後の、未来の住人だ。私の住む世界は地中から生まれた闇に吞まれ、滅ぶ直前という状況だ。

闇の正体を調べるうちに、わかったことがある。この闇は長い間、地中に眠り続けていた。成長はゆっくりだったが、この時代を境に徐々にそれが早まり。私の時代で臨界点を超えて溢れ出したということ。

そして、まだ成長していない時点で退治しなければ、後から対処することは不可能だったということも。

更に研究し、この刀の能力を開発した。白い柄は「暁」、黒い柄を「宵」という。白い柄は闇を退治し、黒い柄は隣の世界に孔を開けて移動することができるという太刀だ」

ユウが頭を抱えて口を挟んだ。

「ちょ・ちよっと待ってくれよ。全然付いていけない。

じゃあさつきは隣の世界から移動してきたところだったってことか？隣の世界っていうのは、お前のいた、未来のことなのか？」

彼の目が、道場のある方向の壁を見た。

気味が悪いような、どこかワクワクするような話に、ユウは色めき立っていた。

これがただの大ぼらで、実はただの強盗だったなら、本気で殺したくなるかも。

「それは違う。お前たちのことは知っている。隣の世界でも、その隣の世界でも逢っていた。

…どこかに行く時、何か選ぶ時、結果として選ばなかった方の選択肢があるだろう。隣の世界というのは、無数にあるその『選ばなかった方』の世界のことだ。

さつきまでいた隣の世界では、お前は結構やさぐれていたし、カオルはもつと派手だった」

今度はカオルが目を閉じたまま、小さく手を挙げた。

「右に曲がるか左に曲がるか、そんなレベルの選択肢一つ一つに対してどんどん世界が増えていくってこと？それも、一人一人の選択肢で？ネズミ算どころの話じゃないと思う」

「しかし大局に変わりはない。

たとえどんな格好をしていようとカオルはカオルだったし、多少の揺れ幅はあろうとも、例えばいるはずの人間がいなかったり、死んだ筈の人間が生きていたり…極端に言えば、どこかの世界だけ突然日本が共産主義になってしまっ、というような大きな変化はない。そして共通項で所々繋がったり分裂したりしている。

世界は、お前たちが思っているよりもずっと混沌としているのだ」「何をしてても、未来は大きくは変わらないってこと？なんだか努力する気がなくなるような話だけ。じゃあ、その刀を使おうとも未来は変わらないって話になりませんか？」

「その変わらない筈の未来を捻じ曲げるために、私は来た。そして」ナツネは俯いて太刀をじっと見つめた。打ちひしがれたように肩

の力が抜け、握った拳が解かれた。

「隣でも、その隣でも失敗し、未来ではなく過去を捻じ曲げた。私の空けた孔の刺激で闇が活性化し、いくつか世界が消失した」

二人は黙って息を呑んだ。不安と疑問が次々と湧き、何から聞いたらいいかわからない。

「これで最後にしたい。出発点がここだった以上、どの世界でもお前たちには迷惑をかけたし、ここでも了解してもらうしかない。だがこれ以上、お前たちが傷つき、血を流すのを見たくもない。

協力するのが嫌なら、今すぐ遠くへ逃げることだ。失敗した場合、呑まれるのが少しでも先延ばしになる」

「過去を捻じ曲げて……って、じゃあ、あなたのために、私たちの知らない私たちが消えて、ここでも同じことになる可能性があるってこと？ そんな勝手な話がある？ あなたたちの世界を救うために、私たちを犠牲にするの？」

カオルは怒りを隠そうともせず、真っ直ぐにナツネを見た。

「そうだ。その通りだ。しかし、私の住む未来には、お前たちの子や孫がいるかもしれないことを忘れるな。それにこの世界で闇を潰したとしても、私が帰るべき世界が必ずしも救われる訳ではない。何故なら、この世界のゆくべき未来が私の元いた世界に繋がっているとは限らないからだ。

私は『闇に呑まれないかもしれない可能性を持つ未来を作りに来た』だけの話。

私が来たことで、もうこの世界は崩壊のきっかけを作られてしまった。成功することができたら、お前たちの子孫は安穩とした生活が続けることができる、かもしれない。

そして私は私が帰るべき元の世界に戻り、他の人間と共に闇に呑まれよう。

万に一つの可能性で、私自身が救われる可能性は、あるかもしれない。直線状に私の世界がなくなるとも、うまく混線して大局に捻じれが生じれば、あるいは――

しかし、私は限りなくゼロに近い話だと思っている。

それでも全ての未来が、全ての世界が完全に消失されてしまうのは、あまりに辛いと思った」

ナツネが低い声で話すのを、二人はじつくりと考えながら聞いていた。

限らない選択肢。運命のように大筋は変えられない未来。たくさん糸が束ねられ、混線しながら過去から未来へと真っ直ぐに伸ばされている。

混沌とした世界を旅する中、彼は自分が助かるためだけに、平気で過去を犠牲にしているのではない。

自分の世界は変えられない事実を受け入れ、危険を冒しているのだ。

6・波の海―2

「俺…その頃、子孫なんているのかな。想像つかないけど」

ユウの頭の中はわからないことだらけだったが、百年後が大して遠い未来ではないことはわかっていた。

俺がもし超長寿だったとしたら、ギリギリまだ生きているかもしれない、くらい？よくテレビでやってる超長寿の老人って、百二十歳いかにないくらいだったよな。

俺がそんなに生きてても仕方がないけど、俺の子供がやっぱり長寿でも死んでるか死んでないくらいで、孫は中年で、ひ孫が結婚しててその子供が…

あ、わかんね。ごちゃごちゃしてきた。孫子の代がどうでもいいとは思わない。けど、俺にとってはそれよりもずっと、今が大事だ。で、脅迫もいいとこだけど、俺らが協力しなきゃナツネは独りで闘うしかなくて、その分不利で、負けたらここを見捨てて、また隣で同じことを繰り返すしかないけどどうする？ってことを今言っていたんだよな。

ふと、彼はナツネの痩せた身体を眺めた。

「お前には、家族はいるのかよ。戻れないかもしれないのに、そんなリスクの高い賭けに送り出したのか」

目の前に刀を置かれ、何も現状を変えられないかもしれない前提の、しかも帰ることすら叶わないかもしれない旅に出てくれと誰かに言われたら―

闇に吞まれるとか、消失するとか、何も実感できないけど、でもそんな旅に出なければならぬ時の、そんな気持ちは、少しなら想像できる。

どうしようもなく、不安で寂しいってことが。

蹴られたことも、レンのことも忘れ、なんとなく同情したい気持ちになっっていた。一度そう思ってしまったえば、元来の人懐っこい心で

接することもできる。

しかし、ナツネは冷淡とも取れる口調で突き放すように言った。
「私には、大事なものも家族もない。しかも当初から闇の存在を発見し、研究する立場にあった。自分でもこれ以上の適役はいないと確信している。そもそも、私のことはこの際関係ない」

カオルも鋭い思考でじっくり整理していたが、慎重に言葉を選んで口を開いた。

「どうしても、わからないことがあるんだけど」

「答えられることなら答えよう」

「闇に吞まれたらどうなるの？あなたはさっき黒い空間から出てきたけど、あれと闇は関係ないの？その剣によって地中の闇が活性化されてっていう話は、本来未来で出るはずの闇が、予定外に今現れるってことよね。どんな風に発生するの？」

ユウからカオルへと向き直り、ナツネは真摯に答えた。

「順番に答えよう。闇に吞まれた人間は決して戻ってこない、と考えられている。」

闇は空間という概念であり、様々に姿を変える。

背中への傷は、こちらへ移る直前に受けたらしい。この傷のように、ほんの少し触れば肉がえぐられるくらいで済むが、呑むことが目的の時には傷付けずに丸呑みし、身体ごと消してしまう。完全に死んでしまうのか、それとも意識あるまま闇の中を彷徨い続けるのか、その後のことは一切知る術がない。

さっき私が出てきた空間は、この「宵」が創り出した闇の擬似空間。闇の力を応用して、世界を跨げるほどのエネルギーを作り出している。

円陣は「暁」が創り出す、闇とは真逆の属性を持つものだ。円陣によって、間違っても「宵」の闇が流れ出すことのないように守る力がある。

最後の質問だが、いつどうやって発生するのは私にもわからない。だが、マイナスのエネルギーが爆発するようなことがあると、

そこに現れ易いようだ。飽くまで実証でなく、私の印象だが。…他に質問は？」

カオルは決意した。

「遠くに逃げても、何も変わらないんでしょ？それって、私たちに何も選択肢をくれてないのと同じだと思っただけ。何をどう協力したらいいの？」

ユウが驚いてカオルを見た。

何事も、良くも悪くも融通が利かないところがある彼女が、自分より先に現実として受け入れ始めている。

「俺だって！俺だってできること、あるだろ？」

初めて、ナツネの表情が和らいだ。

「ありがとう。とりあえず、夜が明けるまでは休ませてほしい。お前たちにもつと理解してもらって対策を練る必要があるが、闇が勝手に発生しない限りは、こちらが焦る必要もない」

「ちよつと待って」

カオルは異論を唱えた。

「休むのは、いい。でも寝るより前に、まずは何か食べないと。栄養失調気味だって、お医者様に言われたから」

ナツネは自分の身体を見回し、恥ずかしそうに赤くなった。

「…ありがとう」

ユウが手を出し、立たせてやった。

「ありがたく思えよ。カオルの料理はうまいからなっ！」

7・危難の海―1

円陣から出てきた時。淡々と話していた時。

あまりに荒唐無稽な出来事に、そこにいるナツネのことさえ現実の人間とはなかなか認識しにくかったが、リビングの蛍光灯の下、重三が座るはずだった席に付いた彼は紛れもなくまともな人間だった。

「いただきます」

彼は手を合わせて頭を下げると、綺麗な箸使いで器用に鰯の開きをほぐし、さも嬉しそうに食べ始めた。

「ユウったら、相変わらずなんだから。貸して」

カオルはユウの魚を取り上げると、まだ口を付けていない箸でさつとほぐしてやった。

「仕方ないだろ？うち、マジで洋食がほとんどなんだからさ。魚だったらムニエルとかフライとか」

「そおゆう問題じゃないっ！そもそも箸の持ち方からおかしいから！」

不毛にもこのやり取りを頻繁に繰り返すが、ユウは箸の持ち方を直す気がさらさらなさそうだし、カオルもまた、毎回当然のように魚をほぐしてやっている。

「楽しそうだな」

ナツネが冷静な声色で薄く笑うと、カオルは真っ赤になって首を振った。

「な・なんでこれが楽しいのよ！全然、ただの面倒よ！魚が！あまりにもつたいない食べ方するから！」

「そんなに力一杯否定しなくても！じゃあいいよ。今度からはさかなくんみたいに、頭から全部食べるから」

ユウはわざと悲しそうに首を振り、味噌汁を啜った。

「あのねえ、魚には可食部と非可食部って区切りがあるの！わかん

ないこと言わない!」

「えー、だって、面倒なんだろう? いいよいいよ。さかなくんは食べるんだから」

「あれは特別!」

カオルはユウの茶碗にほぐした鰯を乗せ、勝手に大根おろしをガツとかけた。醤油を垂らしてユウの前に差し出す。

「はい、真田家の定番!」

「さんきゅ。うまいよね、これ」

ナツネが箸を置き、完全に俯いていた。顔を手で隠し、黒髪も肩も揺らしている。

「ど・どうしたの…?」

泣いているように見え、おずおずと聞いた。

「く…はは」

遠慮して我慢していたのらしく、とうとう彼は声を出して笑い出した。

「何なのよ、もう!」

顔を上げ、笑いすぎて出てきた涙を拭き、彼は言った。

「私も、やってみていいか?」

「…どうぞ」

不思議に思いつつカオルが大根おろしと醤油を差し出すと、遠慮がちに受け取った。

彼女と同じ順番で慎重に乗せると、まじまじと眺め、ゆっくりと箸を付けた。

「うまいだろ?」

何故かユウが自慢気に胸を張ると、彼は無言で薄く、小さく頷いた。

今は笑っていない黒い瞳が、濡れている。

カオルは彼の瘦せた体と頬を見、その過酷な使命を想った。彼女にとって、彼はまだ宇宙人と同じくらい異質な存在だった。でも本能的な部分で、感じるものもある。

この人には、何の敵意も悪意も、それどころか善意すら見てとれない。ただただ、透明な心で自分の役割を果たそうとしているように見える。勝手に決め付けるのは危険だけど、きっと悪い人ではない。

そしてとても、傷付いている人なんだ――

「よし！大サーブスしちゃおう」

彼女は盛り上げるように立ち上がり、冷蔵庫からビールとジュースを出し、コップも並べた。

「お、いいねー」

ユウがビールを手にとって彼に注いでやり、さり気なく自分のコップも引き寄せた。

「こら。何やってんの。ユウはこっちでしょ」

ちえ、と肩をすくめ、ジュースに持ち直す。

相変わらず、融通利かねえな。ま、そこが頼もしいんだけど、さ。

「はい、かんぱーおい」

ユウはおどけてグラスを持ち上げたが、ナツネがビールをただ眺めているのを見て、顎で催促した。

「あ、ああ…乾杯」

グラスがカチンと物寂しげな音をたてた。

「改めまして、かんぱーい！」

「はいはい。乾杯、ね。何に乾杯するんだか」

「新たな出会いに祝福あれ、つてさ。何でもいいじゃん？」

「…あんだ、さっきの底はかたく暗い話、聞いてた？」

「当たり前だろ？でも、それとこれとは別。何でもいいんだって」
は、と軽く溜息が出る。気の抜けた会話によって、こちらの気も軽くなるようだ。

何でもいいのか、そっか、なんてね。

ナツネはまだ何か考えていたが、ビールに口を付けると、しみじみと目をつぶった。

「おいしい」

「さつきから、気になってんだけど」

カオル流の鰯ご飯を口に運びつつ、ユウはナツネに尋ねた。

「ナツネ、ってさ。未来の日本人、なんだろう？…なんかすごく、飢えすぎじゃん？あ、いやいいんだよ、食べるのは全然。でも、そんなにありがたそうにされると、ちよっと驚くよな」

カオルも同じような違和感を感じていた。

「確かに。栄養失調だなんて、例えば悪いけど戦時中の人っぽい」
彼は何も言わず、とにかく最後の二口を噛み締めるように味わってから箸を置いた。

「…今、暑いかな？」

「え、うん」

二人がキョトンとしたのを見ると、ナツネは冷えて汗をかいだグラスの縁をなぞった。

「百年後の暑さは、これとは比べものにならない。」

この時代の温暖化対策は政治の問題にすりかえられて先送りされる。結果、暑いだけではなく、気候が極端に変動して、穀物が育たなくなる。

世界的に食料が足りなくなり、私が子供の頃、とうとう大きい変革を迫られた。

世界政府が指揮を執り、食料を無駄にしないように管理されるようになったのだ。管理されても、生産する国、消費する国は偏る。バランスが崩れれば、戦争も起きる。

戦時中というのは、その点では当たっている表現だ。

私が毎日食べていた主食は、穀物や肉や野菜の栄養素を取り入れた完全栄養食だった」

「…完全栄養食」

「人工的に何種類かの味付けがされた、食べ応えのあるビスケットのようなものだ。」

賞味期限が長い。衛生的に管理しやすい。生ゴミが出ない。輸送も簡単。何もかもに無駄がない。

それがなければとくに破綻しているはずだが、一言で言えば、あれはただの餌。カオルの出してくれた食事を味わえば、それが嫌でもわかる」

「…すごく、ショック…」

ユウは改めて食事に目を遣り、きまりが悪くなった。まだ「可食部」が茶碗にたくさん残っている。不器用ながらも、細かく集めて口に入れた。

「うまいまずいとか言っていられないんだな。俺だったら耐えられないかも」

「耐えられなくてもそれしかない。空想の話ではなく、事実だからな。もちろん、育ちやすい生野菜なら調達する手段があるが、肉や魚は相当な御馳走だ。ビールのような嗜好品もまた同じ。ない訳ではないが、頻繁には手に入らない。」

私は政府関係の研究機関にいたが、優遇されていてもその程度でしかなかった。

それが、私の現実そのものだ」

「だから、そんなに痩せてるんだな・・・」

「ああ、いや。これは元からの体型だ。そんな餌でも肥満はいる」
思わずずっとこけそうになるユウを差し置き、彼はゆっくりと、また味わうようにビールを飲み干した。

ユウやカオルの暮らしとのギャップが激しく、想像すらままならなかった。

しかし彼にとっては当たり前の話で、事実を語る表情からは何も読み取れなかった。

7・危難の海―2

更に、悲しみも怒りも混じらない口調で続ける。

「この時代の人間は『過去のツケを払っている』と知っている節がある。しかし、百年後には確実にこの時代の代償を払うことになる人間がいる。

だからこの任務に関しての計画が出た時は紛糾した。

カオルの言ったように、過去を捻じ曲げて犠牲にするのか、と正論を言う者。

いくら失敗しても試し、この時代がまともになるまで過去を捻じ曲げればいい。ここまで大きなツケを払わされているのだから構わない、と世論を味方につける者。

私はどちらでもなかった。ただ、可能性が欲しかった。だからこそ適任だったとも言える」

すべての動きが影響しあう。何かの結果が未来へとつながる。カオルは、また複雑に絡まった糸のような世界をイメージしていた。

その一本に、自分がいる。そしてその隣には、自分とは少し違う自分が存在している…

派手な私って、一体どんな風貌なんだろう。

何があったら、そんな風にしてくるんだろう。

私はずっと三つ編みなのに。それで安心して、それが私自身だと思っているのに。

でも、大局は同じ。私は私で、真田カオルとして、極端には違う人格を持っている？

じゃあどうして、私は三つ編みで安心するんだろう。

一歩間違えると、どんどんその思考にハマって抜け出せなくなりそう、思考を元の方に戻した。

そう。今は百年後の話だった。過酷な環境に喘いでいる、未来の人間たち。

「私たちに何ができるかわからないけど、子供や孫の世代にそんな思いをさせるなんて、罪深いことなんだよね…」

「お前にできることは何もない。だから苦しむ理由もない。言っだろう、どんな分岐があるにしろ、大局は変わらない、と。」

一刀両断にあっさりと遮り、彼は言い切った。

「あ…」

「いや、でもさ！」

カオルは二の句が継げなかったが、ユウが被せるように割って入った。

「俺は、何とかしたいよ。何ともならないから何もしないなんて、そんな無責任なこととはできない。」

俺は俺が大事だし、今が大事だし。でも、できることはやらなきゃ。

俺がもし一生独身で、子孫とか全然関係なかったとしても、その気持ちは変わらないよ。

ああ俺、もうエコバッグ持ち歩くし、マイ箸持ち歩くからな！」

力一杯のユウを見て、ナツネは楽しそうな顔をした。

「頼もしいことだ。ただし忠告しておく。」

レジ袋も割り箸も、環境問題としては実は大した意味がない。努力の割には報われない方法の典型だな。」

「ええ、そうなのか？…じゃあ、じゃあどうするか」

ユウはうーんと唸って考えたが、ない知恵を絞って出てくるものでもない。

日頃、享樂的に生きている彼の脳に、環境問題の引き出しはなかった。

「特に何も、するな。個人でできることなんて高が知れている。」

ただ、小さな子供に胸を張れるような生き方をすればよい。

無駄を省き、浪費はせず、真面目に働け。箸でも何でも、無理のない範囲で環境に貢献したらいい。そして日々の糧に十分感謝し、子供たちにそれを教えることだ。その方がずっと実がある」

「うん、うん。そうだな。なあカオル、やっぱり俺、魚を頭から全部食べた方がよくないか？」

浅い発言とは裏腹に、真剣な表情でユウはカオルを見た。

「注目するところ、そこ？まあ、やりたいなら勝手にやりなさいな。まだ、食べられます？なんか、そんな話聞いたら、もつと色々食べてほしくなちゃった」

カオルはまた立ち上がり、返事も聞かずに冷蔵庫を開けた。

「卵あるか？カオルのふわっふわの卵焼き食べたらびっくりするぜ？煮物だつてうまいし。遠慮すんなよ」

「どうしてユウが仕切るのかがよくわからないんだけど？じゃあ卵焼きと、フリージングのヒジキを煮なおしてみよっかな」

ナツネは感謝と期待を込めて彼女を目で追っていた。

「もうあまり量は入らないが、とても嬉しい。」

既に十分面倒をかけているのに、遠慮しなくてもいいのだろうか」

カオルは素早く鍋に冷凍のヒジキをあけ、水を足して温めた。と同時にフライパンも温め始め、その間に卵を割る。

張り切った気持ちで、快活に言い放つ。

「あなた、ここで遠慮してどうするの？元の時代に帰った時に後悔するわよ。」

ま、豪華にはできないけど任せといて。欠食児童を満足させるくらいのものは出しちゃうから」

「欠食児童……」

ナツネが目点をし、ユウが手を叩いて笑った。

「欠食児童！ウケる！」

「…そうだな。私は確かに飢えているし、欠食児童そのもの、だな」
ナツネも思わずくりと笑った。

カオルは五分とかからず皿を出し、そのまま座らずに出て行くとした。

「ゆっくり食べて。汚れたズボンじゃ休まらないし、何かまた着

るもの探すから。傷はあるけど、工夫してシャワーくらい浴びられるように考えましょう。…本当、改めてみると、疲れてひどい顔してる」

食事を取って和んではいたが、目の下には影が差しているのを彼女は見逃さなかった。

ユウが何かを思いつき、慌てふためく。

「待て！今夜は俺も、泊まるからな！」

「どうして？」

「無用心だろ！貞操の危機だろ！」

「ああ。でも部屋に鍵あるし、明日の朝また来てくれれば…」

「だー！駄・目・だ！俺も泊まる。絶対泊まる！帰らないって親に電話しちゃうからな！」

「はいはい。部屋は余ってることだし、私はどっちでもいいけど」冗談めかしてからかつてはみたものの、正直、ユウが泊まってくれるのは嬉しかった。

ユウが言うような意味で、ナツネを警戒しているのではない。

卵を焼いている最中、ずっと過酷な未来と、それを呑む闇を想っていた。闇とは、一体どんなものなのだろうかと連想する。

実際に目にした時は、きっと自分自身の危機でもあるのだが、想像せずにはいられなかった。

そして、自然とナツネが出てきたあの空間のことを連想する。

擬似空間とはいえ、あれは恐ろしい、冷たいエネルギーを発していた。

心にある温かい気持ちを全部吸い取られてしまったような心細さ。それをよくよく思い出すと「絶望に襲われた」というよりも「希望が流れ出した」ような感覚が合っていた。

本物の闇が、あれよりも深く冷たいとしたら。

彼女は身震いした。

両親のことを思えば、死はいつも思いのほか彼女の傍にあった。自分自身が死の恐怖を味わったことはなかったが、闇にただ吞ま

れて消えるというのは、事故や病気で死んでいくこととはまったく別のことに思える。

彼は隣の世界に移動する度に、あの闇に飛び込むのだ。その時の感覚はいかばかりのものなのだろうか。

彼女は父親の使っていた和ダンスを片っ端から開けた。

比較的新しく、処分しないままになっていた浴衣を発見し、ナフタリン臭くないか一応確かめた。

短時間でもじっと看病したせいかな、妙にナツネに感情移入している自分がいた。

今は少しでも気分良く眠らせてあげたい。

8・既知の海―1

食後に落ち着いて見ると、居心地悪そうにダイニングに座っているナツネは、本当に酷い格好をしていた。黒く艶のある髪は血や砂で固まっている部分があるし、全身に押し掛かる疲労の塊が目に見えるようだ。結局ユウの発案で傷にビニール袋を付け、布テープで二重に保護して入浴させることにした。

剥がす時はさぞかし痛かったろうが、髪を拭きながら出てきたナツネは、別人のようにさっぱりとした表情になっていた。

「久々の食事と入浴で生き返ったようだ。心から感謝する。血の付いた服は一応洗っておいたが、どこかに干させてもらえるだろうか？」

先ほどとはうって変わって顔色が良くなり、頬に赤みが差していた。

端正な顔に、人間臭いリラックスした笑顔が浮かんでいる。

「お粗末さまでした。下洗いしてくれたなら他の物と一緒に乾燥までかけるから、そのまま置いておいて。ユウのも洗濯機に入れてね。ポケットの中身、気を付けて」

「え、俺いいよ。自宅でさつと風呂だけ入って着替えてくるから」

「あーあ、そっか…とうとう貞操の危機か」

「うっ。…やっぱ洗濯してください。おい、ナツネ。俺がシャワー浴びてる間に、変なことすんなよ！」

振り返りざまにぐいと斜めに指をさし、小走りで風呂場へ急いだ。「本当に、面白い男だな」

彼は椅子に立てかけておいた刀を取り上げ、すらりと鞘から抜いた。

カオルは食事の後片付けをしていたが、突然のことに動きを止めて見入った。

蛍光灯の光の下、ナツネは刃を上にし、目の上にかざすようにし

た。微妙に角度を変え、刃の光を凝視する。

「…「暁」はまだ綺麗だ。「宵」の方は酷使しているが状態は悪くない。これならなんとか持つだろう」

彼女は皿を持ったまま、彼の横顔を見ずにはいらなかった。

集中して刃を見る瞳は切れ長で、細かく睫毛に縁取られていた。

闇、とは違う、美しい星空のような黒。

白地に紺の柄入りの浴衣が、妙に様になっていた。

ユウほどには背が高くないが、瘦身で背筋が真っ直ぐに伸びている。英気を養った仕草はしなやかで無駄がなく、孤高の獣を思わせた。

どきり。

何これ。私、おかしいかも。勘違いしちゃ駄目だってば。

ナツネが視線に気が付き、刀を下ろした。

「すまない、怯えさせたか？最低限の点検はしておかないとな」

首を横に振った。何でもいいから話を継いで、気持ち了他へ持っていきたかった。

「その…「宵」の方が酷使されているってことは、「暁」は使う機会が少なかつたってこと？」

彼は今度は抜き身のままテーブルに置き、柄や刀身を触って確かめながら答えた。

「いや、回数の問題じゃない。回数だけなら「暁」の方が頻繁に使っているが、闇の本体を刺すところまでいっていないからな。全体で使っているエネルギー量としては想定内だ。

それに比べ、「宵」は予定以上に空間を裂いている。隣の世界に移動する孔を空けるというのは、私の力も消耗するが、剣へのダメージも相当なものなのだ。

…使う機会があるやもしれん。構えてみるか？」

彼は「暁」の柄を彼女に向けた。

カオルは、あまり抵抗なく柄を握った。剣道の竹刀とは形状が違うが、基本ができている自信はある。

ナツネが左手で支えていた刀身から手を離すと、がくり、と手に重みが来た。

心得がない女の子ならまったく保てず、そのまま下へと取り落としているだろう。

「真剣つて、やっぱり重いよね。機会があつたとしても、武器として役立てられるかわからない」

「闇は基本的にゆっくりとしか動かないから、身を守るために何度か振るくらいならできるだろう。重いが、梃子の原理で得られるパワーも大きい。それよりも」

彼が続きを話そうとした時、どたどたと妙な足音を立てて、ユウが帰ってきた。紺地に白い緋の入った浴衣を前で合わせ、帯を巻いたまま引きずっている。

「これ、どうやって着るんだよ。って、わああ、お前何構えちゃってんの！」

ナツネが右手でひょいとカオルの手から刀を取り上げ、くるりと回して鞘に収めた。さらり、かち、といい音がする。

「お、その動き格好いい。やっぱり竹刀とは勝手が違うなあ」

気を抜いた拍子に帯が完全に落ち、前がはだけた。

ぱつとカオルが顔を押さえ、後ろを向いてまた皿を拭き始めた。

「馬鹿！早く着なさい！」

「だって、着れないんだよ。しかも微妙にちっさいし！」

「お父さんのだったんだから、仕方ないでしょ！」

「そもそも帯を後ろで結ぶなんて不可能だろうが」

ユウがあたふたしている間に無言でナツネが後ろに回りこみ、腰に手を回した。

「ひいっ！俺にそんな趣味は！」

ナツネは悲鳴を無視して身頃をぴつと左前に合わせ、手際よく帯を回して結んだ。

「あれ？…おお、さんきゅ。でも、気配を殺して背後に回りこむのはやめてくれ！」

「…なんか、誰かを思い出す」

「悪いが、癖だ…田舎の子供、みたいだな」

カオルの父親はせいぜい百七十センチそこそこだった。

ナツネはそれより少しは大きいが、浴衣のサイズは許容範囲内。

しかしユウは百八十センチを超している。裕はなんとかなっているものの、膝に近い中途半端な位置に裾が来ていて、「微妙に」どころか完全に小さかった。

「やっぱり俺、着替え取りに帰ろうかな…」

半べそに近い声で訴える。

「あーあ、そつか…とうとう貞操の危機か」

「ああっお前、最初からこうなるのがわかってて遊んでたんだろ！」

「さあね、どうだか。いいんじゃない？どうせ寝るだけなんだから、かわいいかわいい」

通りがてら、くりくりと頭を撫でる振りをすると、彼は仔犬のような顔を赤くして避けた。

「かわいいって、お前なあ」

「私もお風呂入っちゃうね…あ、そうだ。絶対！覗かないでよ」

「誰が覗くか！」

うんうんとカオルは頷き、着替えを取って風呂に入った。

ユウとのかういうやり取りは飽きもせず心地いい。

でも私たちって、今どんな関係なんだろう？ふと、疑問に思ってみる。

陳腐に言えば、友達以上恋人未満？わ、いきなりこっぴどかしいカテゴリーに括っちゃった。

ひねくれて正直な見方をすれば、恋人以上友達未満、かな。

シャワーの温度を低くして、肌のほてりを抑えた。

自然とナツネの横顔が浮かぶ。どきり。

どうして思い出しちゃう訳？おかしいってば。ちょっと綺麗な顔をしているから、のぼせただけだって。

更に温度を下げ、水に近いぬるま湯を浴び続けた。

8・既知の海―2

カオルが髪を乾かし、少し迷ってパジャマの上からもう一枚羽織ってリビングに戻ると、ユウとナツネが缶ビールを囲んでいた。

「くおら！何でユウが飲んでんの！」

「あ、ばれちった」

悪びれる様子もなく、ユウは最後の一口を飲み干した。

「いいじゃん別に。一缶だけだしさあ。最初はいいちゃん公認で飲むつもりだったんだから」

彼は少し眠そうに、テーブルに頬杖をついた。ご機嫌の様子である。

「でもさあ、ナツネってば無口で、盛り上がらないことこの上ないんだよ。カオルちゃんも飲も」

「ちゃん、が出たら酔っ払いの合図でしょ。やめときなさい。弱い癖に無理しちゃって」

「違うよ、イチゴのパジャマ姿がかわいいから、直視できないだけだって。」

大して視力悪くないのに、いつも眼鏡してるしさ。勉強以外はそうやって外した方がいい。ていうか、今どきはコンタクトがグロ―バルスタンダードだろ。髪だって、三つ編みより下ろしてた方が似合うのにさ。もったい、ない、な」

左手に顎を乗せたまま、遠く届かない右手を伸ばして、毛先に触れようとする動きをした。

かあっとカオルの顔に血が昇った。

「な、な、何言ってるのよ！馬鹿じゃないの？私は、私はねえ！ずっと黙っていたナツネがユウの缶を取り、自分のと合わせて流しですすいだ。」

「眠ったようだ」

「え、ええっ？たった今喋ってたのに？」

見ると右手の肘を付いて手はまだ宙に浮いたまま、完全に瞼が閉じていた。

「もう、本当に馬鹿なんだから」

「ユウに大丈夫だと誘われて飲んでしまったが、すまなかった。どこに運ぶ？」

長身のユウの脇に入り込むようにして、ナツネが持ち上げるように立ち上がらせた。

「傷に触らない？」

「ああ。薬がよく効いているから痛くない。…そういえば、薬を飲んでアルコールはまずかったな」

「あ…薬とアルコール、駄目なんだよね。気付かなくてごめんなさい」

「いや、私がうつかりしていた。薬はいろいろ飲み慣れて耐性がある。変調はない」

ユウはほとんど眠りながらも支えられて歩き、なんとか布団に横になった。

「ん…、ごめん…」

そして、沈没…

「ここまで弱いはずはないんだけど。きっと疲れたんだと思う」

「自分の常識とはあまりにかけ離れたものを目にしたんだ。私が言うのもおかしい話だが、疲れて当たり前だろう」

カオルはユウの無防備な寝顔を眺めた。

本来よりカオルとは対照的に社交的な性格なので、無意識に気配りせずにはいられなかったのかもしれない。

そしてきつと、それはナツネに気を遣ったことではない。カオルが順応できるよう、全部肩代わりして、ある意味盾になってくれたのだ。

女の子には優しくしなさい。いつでも気を遣って、できるだけ女の子のしてほしいことをしなさい――

鉄砲玉のようなところはあるが、それをそのまま実行している、

そんな幼馴染なのだ。

彼女はそつとタオルケットをかけてやり、ナツネと共に部屋を出た。

「さっきの部屋を使ってください。父が使っていた部屋で悪いんですけど、ユウのいる仏間とこつちと、窓と襖を開けておくと風が通って涼しいから」

蛍光灯を付けて示すとナツネはにこりとし、カオルを残したまま居間へと刀を取りに行つた。そして刀を布団の横にそつと並べ、安心したように頷いた。

「気を失っていた時も、大事そうにしっかりと握って取れなかった。それがないと、帰れないもんね」

「帰れるかどうかは、実際あまり気にしていないが」

「気に、しないの？みんな待つてるでしょ？」

ナツネは背を向け、答えなかった。

浴衣の袂から煙草を取り出し、

「いいか？」

と聞いた。

彼女は父親の使っていた机の隅の灰皿を差し出した。ガラスの内側に、うつすらと埃が付いている。

「ありがとう」

腰窓の網戸まで全開にし、彼は窓枠に腰掛けた。

「虫が入る。吸ったら閉めるから、それまで電気を消してもらえるか？」

カオルは電灯の紐を引いて、部屋を暗くした。

無機質に照らされていた部屋が、今度は月明かりに照らされ、足元までナツネの影を落とした。

8・既知の海―3

彼は外を眺めながら、紫煙をくゆらせた。

「それ、未来の煙草なの？」

まったく見たことのない銘柄の煙草に、ふと興味を覚えた。

「ああ。未来といっても、SF映画ほどの未来じゃない。カオルが知っているメーカーが何十年後かに出すことになっている、ただの新製品だ」

つまらなさそうに言われ、ふうん、と彼女はナツネの肩越しの月を見た。

「聞いて、いい？」

「わかることなら、なんでも」

「ユウがシャワー浴びて戻った時、何か言おうとしていたでしょ。ちよっと気になって」

「刀の話をしていた時か…大した、話でもないが。」

この先何があっても、できるだけ怒りや悲しみに取り込まれるな。ユウは軽口ばかり叩いているが、実際かなり芯がしっかりしている。お前の方がずっと心配だ。

負の感情を爆発させれば、闇が増殖するきっかけになりうるからな。

最終的に闇の本体を引きずり出す必要はあるが、計画的に作戦として成功させなければ、お前たちを危険に晒すことになる」

「私あんまり、感情を爆発させた経験がない気がするんだけど…要するに、私次第で最悪の事態を招くってこと？」

「もちろん飽くまで仮定の話だ。私は未来から来ているが、今の瞬間を生きていることに変わりはない。私にも、この先どうなるかなんてわからない。」

犠牲は最小限にしたいから、念のために言っておこうと思ったただけだ」

ナツネは一言一言、カオルを見据えて丁寧に言い聞かせるようにした。

繊細な指先で灰皿に灰を落とすシャープな輪郭が、くつきりと照らされている。

「明日は満月だな。幾望の月、か…月は、いい。毎日姿を変えようとも、月は月だ。」

細く、円く、明るく輝こうとも暗く赤く浮かぼうとも、月以外の物に他ならない。

「私も質問していいか？」

煙が月明かりに白く光り、形を作っては消えていた。

「わかることなら、なんでも」

自然と、ナツネの言葉をなぞらえる。

彼は頬を緩ませた。

「どうして、自分を隠す？」

「え？」

質問の意図がわからず、不意を衝いて懷に猫が飛び込んできたような感覚に囚われた。

「お前は傷付く前に先回りし、防衛しているように思える。わざわざそのために、生き辛い世を、更に辛い方へと泳いでいるようだ」

「…そんな、抽象的なこと言われても…わからない」

不愉快なざわめきが胸に押し寄せ、唇をきゅつと結んだ。

だが、彼は責める口調でもなければ、意地の悪い口調でもない。

本人にもわからないその答えまで知った上で、ただ静かに指摘しているようだった。

彼女は悪いことをした子供のように小さくなり、後ろで手を組んでいた。

「いろいろなお前やユウと出会ったが、何もかも、この月と同じ。外見や趣味や環境に違いがあっても、お前はみんなカオルだった。いや、違う点がある中で比較するからこそ、共通する本質の部分が見える。」

月は月。私の心を柔らかく照らす。例え新月であつても、見えなだけで存在している。

お前は自分を隠そうとするが、自我がなくなる訳ではない。傍にいるユウがもつたいたいと言ったのは、当然の本音だろう。お前の本質は、もつと魅力があるはずだ。

人間、誰しもいつかは死ぬ。その時に後悔してはいけない。自分から逃げ回つても、見失うだけだ」

逃げ回る…逃げ回る？

脳裏に先ほどからチラついている、影。

父親の葬儀で、独りだけ時を止めた子供。

息を詰めてやり過ごし、現実を受け止めていると思ひ込みながら、ただ必死に逃げ回っていた？

微かに認識できる範囲には、大粒の涙を流して拭こうともしない少年――ユウがいた。

学ランの膝にばたばたと落ちる、透明な液体。震えるほど握り締めた拳。

無表情なまま、彼に白いまっさらなハンカチを差し出した。

私は、いないから――

それを見たユウははっとし、それまでよりもずっと悲しそうな顔になった。

その表情を思い出すたび、罪の意識に苛まれる。

私は冷たいんだ。父親の葬儀で涙を流すこともない。そんな人間がどうして自分を開け放して生きていける？

それからずっと、自然と感情を抑えて過ごしてきた。否、抑えずにはいられなくなった。それも当然の報いだ。と、納得してきたつもりだった。

…本当にそれでいいのか、それが正しいことなのか、ナツネの言葉を噛み締めるうちにわからなくなる。

「逃げてる、かな。私、精一杯現実を受け入れて諦めて、無いものねだりしないようにしているだけなんだけど。それって、駄目なこ

と？あなただつて、滅びゆく未来を受け入れているのに？」

強いて目を見開き、ナツネを射るように見た。

空気が重力を持ち、顔の周りがピリピリと音を立てている。

彼は煙草を消し、すつと立ち上がった。逃げる暇なく、豹のように静かに大胆に手を伸ばし、彼女の頬に手を当てた。

息を止め、立ち尽くす。

夜の逆光を浴び、一時、彼の姿がシルエットだけになった。

「有りのままのお前は別段、駄目じゃない。でも諦めることと受け入れることは、違う。

素直に泣いたり笑ったりすることも必要じゃないのか。自分を締め付ける生き方は、息苦しく、ないか？」

怯えさせることなく、指先がすつとうなじまで移動した。

その分だけ一步、近づく。そのたった三十センチが、突然至近距離に感じさせた。

触れるか触れないかという、柔らかな感触。

どうしてこの人は、人の心に簡単に滑り込んでくるのだろう。他の誰から同じことを言われても、やめて欲しいと拒否したくなるだけなのに。

ナツネの一言一言は、何故か抵抗なく心の中に染み込んでくる。

迷い、動揺。

逃げるのか。委ねるのか。

飛び込むのか、回避するのか。

許すのか、許さないのか。

…自分のことを。

「全然、自信がないの。自分のことが、嫌いな」

ナツネの距離でしか聞こえないほどの声で、彼女は打ち明けた。

「誰にも言えなかったけど、自分に嫌われた自分なんて、輪をかけて大嫌い。

いくら勉強しても、家事をしつかりやっても、そんなつまらないこと誇れない。例え誰かに褒められても、否定しかできない。

何かに反抗する覚悟もない。お洒落して羽目を外す勇氣もない。多分、そういう無鉄砲に憧れている自分がある、のもわかってる。でも何も変えられないの。変わることが怖い。だから髪型も変えないし、眼鏡を取るのも恥ずかしい。友達も、ユウだって、どんな変わって大人になっていくのに、私だけ。

置いて行かれるのが怖い癖に、自分が変わって、おかしいと思われたらどうしようなんて。変化しない自分が幼稚なんだってわかっていて、必要以上に大人ぶって…

おかしいでしょ？自意識過剰でしょ？誰も注目してねえよ、って。それでまた、自分のことが嫌いになるの」

できるだけ、自分の中でも向き合いたくないと思っていた、引き出しに鍵を掛け、しまいつばなしの負の塊。

言葉にして整理したら、いかに卑屈でみつともないかが曝されてしまう。だから、どんなに親しい関係の人間にも打ち明けたことはなかった。

もしユウがこれを聞いたら、どんな顔をするだろうか。また、殊更に悲しい顔をしてしまうのだろうか。

例え何も言わなくても、きっと優しい同情を寄せてくれるだろう。それだけは勘弁だった。

彼の優しさは最大の長所だが、無闇に同情されたのを感じたら、もう二度と親しく話せなくなる気がした。

でも、この人なら。

この人なら、おかしな同情や不必要な好意を寄せられなくて済む。口調そのままに淡々と受け入れてくれるという、過ぎた時間とは反比例して理解してもらえている根拠ない確信。その感覚が、彼を無条件に信頼させていた。

ああそうか、この人。

私とどこか少し似ているんだ。だから同情じゃなくて、同調してくれるんだ。

ナツネの鎖骨が目の前にある。

暗がり、白い浴衣の縫い目をじつと凝視していた。
鳩尾に置いた手を、ぎゅっと握る。

彼女はむしろ、仕方なく微笑んでいた。

「今だって、泣きそうなの。でも、泣けないの。もう何年も、心から泣いたことなんてないの。泣く暇なんてないし。そんな資格なんてないし。」

でもね、泣けないでいるうちに、いつの間にかうまく笑えなくなってきたやつた気がする」

耐え切れず、口を手で塞ぎ、防ぐように何度も瞬きをした。

その瞬間、うなじに置かれた手にトンと押され、ナツネの胸に額が当たった。

拍子に涙がポロポロと転がり落ちる。

「お前が自分を許さないなら、私が許す。誰も見ない。今だけ、この先笑うために泣け」

返事もできず、しばしカオルは泣いた。

うなじの手はそつと離れ、今度は後頭部をぎこちなく撫でた。

「ごめん、なさい……」

「謝るな。私が話を振ったんだ。泣くことを忘れれば、笑うことも忘れるのは当然だ。」

誰にでも怖いものはある。しかし嫌われることを恐れすぎれば、愛することも恐れるようになる。

独りが何より怖いのに、何とかして独りでいようと思うようになる」

ナツネの声が耳元で、そして額を当てた胸から響いていた。カオルのことを話すようできて、他の誰か―例えばナツネ自身の核心について話しているように聞こえた。

普段は嗅ぎ慣れない、煙草の匂いがする。不思議と心地よく、臭いとは感じなかった。

「私もまだまだ未熟者だ。任務の他の余計なことは絶対に手を出さないと決めていたのだが。…でも、思ってしまった。」

もしもできることなら、お前の未来を、もっと楽に幸福に捻じ曲げたいと。

伸び伸びと笑い、泣き、素直に自分を愛せるように」

静かな声を聞いているうちに、涙は徐々に納まった。

平常心を取り戻すうちに、今度は顔に血が昇ってきた。

あれ、私どうしてこんなに接近してるんだっけ。

どうしたらいいか混乱してはいたが、顔を見ないで済むよう俯いたまま身を引いた。

「あ、あの、ありがとう。もう、大丈夫…ごめんなさい」

瞼が熱を持って重たかったが、妙にすっきりと清々しい気持ちを感じていた。

ナツネは何事もなかったかのように後ろを向き、網戸を閉めた。

「月は、いい」

意識的か無意識か、さっきの言葉を繰り返す。

「私がここへ向かう時、私の世界は闇にすっぽりと包まれていた。

あとどれだけ持つかはわからないが、空を覆った闇が降りてきたら、触れた順にすべて無くなっていくだろう。そんな危機的状況だった。

無論、陽は差さず、月も隠されたままだった。

時と世界を跨いでいるうちに、自然がどんなに美しいか、平穩がどれだけ素晴らしいかを身をもって感じてしまった。…私も、あてどなく逃げたいのかもしれないな」

背を向けたまま、まるで独り言のように呟いた。

「本当に、大事なものは何も無いの？ あなたには―」

「ナツネ、だ」

「え？」

「それが私の名だ。私には大事な物は無い」

「…本当に？」

「ああ。守れる物など、とうに失くしてしまった」

言葉とは裏腹に、拳に力が込められていた。

何を大事に思い何を守り、そして叶わなかったのか。それが何だったとしても、彼にとってはもう済んでしまった過去なのだ。

自分たちから見たら、遥かに未来のことなのに…

私にできることは何もないかもしれないけど、でも—本当に、何も無いのかな。

彼女は明るい声を出した。

「じゃあ、代わりに…私やユウのこと、大事に思つてよ。

世界が、とか未来が、とか大きなことじゃなくて、私たちのことだけ守る気持ちで闘つてよ。失くしたなら、また新しく大事な物を作ればいい。

ただ漠然と全体を考えるよりも、その方が楽しいでしょ？…楽しいつて表現は、ちよつと違うかな」

彼は肩越しにこちらを見た。寂しげな、でも嬉しそうな顔だった。

「そうだな。お前たちが構わないなら、そう思うでしょう。私も、もうずっと楽しいとか嬉しいとか、そんな感情は忘れていた。冥途の土産にちようどいい」

「縁起でもない…」

彼流のギャグなのか本気なのか、捉えどころがないところにまた混乱させられる。

ナツネはさばさばと嬉しそうに言った。

「いつ死ぬかなんて誰にもわからない。日々の喜びが、冥途の土産だ。」

私はこの時代に来て、生まれて初めての喜びをもらった気がする。お前はどうか？心を動かして生きていけるか？」

カオルは天井を眺めて考えた。

あ、今までずっと、こういう瞬間には俯いて、床を眺めていた気がする。

ふつと肩の力を抜いて、彼女は頷いた。

「元々感情表現下手だし、急に人格を変えることは無理だけど、少しは吹っ切れそうな気がする。」

誰かの言葉で自分から変わりたいと思えるようになるなんて、なんだか不思議。

ありがとう…ナツネ」

初めて名前で呼んでみて、その声が自身の耳に入り、どうしても恥ずかしくなった。

「おやすみなさい」

いてもたってもいられず、彼女は部屋を出た。ユウの眠る部屋の前を通りながら、無意識に中を覗く。

彼はタオルケットを足蹴にし、ぐっすりと眠っていた。仔犬のような、無邪気な寝顔に少し安心して素通りし、自室のベッドに滑り込んだ。

自分を責めることもなく、罪の意識に悩まされることもなく、彼女は久しぶりにぐっすりと眠った。

9・湿りの海

早朝、ユウの枕元で携帯が鳴った。

完全に寝惚けながら、誰からの着信かもよく見ずに通話ボタンを押す。

「うあい」

「僕だ。すぐ出て来い」

レンの声で撤収の合図を聞いた軍人のように飛び起き、浴衣の帯を慌てて解く。

「門のところで待ってるからな」

「了解！」

洗濯せずに掛けておいたデニムに足を突っ込み、洗濯機を見るとエラーが出ている。乾燥の途中で止まってしまったようだ。中の物は、みんな湿っぽくて着られた状態ではない。

そういえばカオル、乾燥機の調子悪いつて言ってたんだよな。

あーもう。三軒隣なんだし、着なくてもいっつか！とにかく、あの兄を待たせる訳にはいかない。

上半身は裸のまま、スニーカーの踵を踏んで走って行く。

緑の朝露の匂いが心地よかった。

レンは早朝からきつちりとスーツを着こなし、BMWの運転席に座っていた。ユウを見て手招きし、パワーウィンドウを開ける。同時に中からクーラーの空気が流れ出し、柑橘系の香料の匂いが鼻についた。

上品なチタンフレームの中の瞳が、含み笑いをしていた。

「いい格好だな。とうとうヤツたのか？」

「んな訳ないだろ！」

「どうしてそんな訳がない。こんなチャンス滅多にないのに」

「うっ…出勤前にわざわざ厭味言いに寄ったのか？」

そう言われれば、チャンスはあった気がするのに、全部スルーし

て寝ちゃった俺。

レンに言われなくても、馬鹿なことはよくわかっている。

まあレン兄じゃあるまいし、チャンスがあつたからって強引に押し倒すような真似はしない……つもりだけどさ。

「あの男の様子はどうか？」

「あの後目が覚めて、飯食って、傷が濡れないように風呂に入らせて、また寝かせた。全然痛がる様子もなかった」

「寄る時間はないが、一応これでまた消毒しておけ。それから、これは僕からの気の利いた差し入れ」

渡された紙袋を見ると、消毒薬の下にユウの服が何組か畳んで入れたあつた。

「あ……さんきゅ」

すぐにでも取りに戻るのに、どうしてこんなサービスを？と訝つたが、素直に受け取った。

「うまく対処して、早く戻って来てくれよ。こつちの仕事も手が回らなくて困ってるんだ。

そういえば、シンもお前を探していた」

満面の笑みでエンジンを吹かし、黒いセダンは動き出した。

ウィンドウが閉まる直前、レンは右手をひらひらと振って、角を曲がって消えた。

ああ、そう。こつちが終わったらまたそつちか。要するに、恩を着せるためにわざわざ差し入れてくれたってことね。

いっそのこと、レン兄だけ闇に吞まれて消えてくれないかなあ。

穏便でない妄想に囚われる。いやいや、それじゃレン兄と同じになっちゃうじゃないか。俺は、絶対に俺を曲げないぞ！どんなに遣われても、俺は毒されないからな！そんで、早く自立して、奴の人生からフェードアウトして逃げてやる！

庭を横切りながらシャツを探って着る。

デニムも入っているし、ナツネに貸す分もありそうだ。

もしウツカリ母親と鉢合わせしたら、上半身裸の理由を紡ぎださ

なければならなかったところ。その点だけ考えれば、邪悪な兄も多少は有り難く感じた。

ふと、次兄のシンが気に掛かり、携帯を取り出す。

レンの頼みはいつも嫌々こなすのだが、シンの方は社会生活を送れるかが心配で、つい無理をしても手助けしてしまう。

しばしシンのアトリエの番号表示を眺め、じっと考え、結局電話せずにポケットへ入れた。彼がユウを呼ぶ時は、用事というより精神的なサポートが必要なことがほとんどだ。

高校生の弟を当てにしないやできない仕事って何なんだよ、とも思うのだが、それを指摘することも可哀想なくらい気弱なのだ。

兄には悪いが、今は対応ができない。無碍に断りにくい相手に呼ばれている場合じゃない。アトリエには、最低限だがスタッフがいる。ちよつとは自分と周囲の人間で対処することも学んだ方がいいのだと自分に言い聞かせていた。

後ろ髪引かれる思いでガサガサと袋の中を探ると、底で小さな封筒に手が触れた。

「？」

玄関前で立ち止まって取り出すと、どうやら中身は粉薬のようだ。飲み切った後の分の抗生剤か？でもちゃんと三日分あったし、痛み止めはカプセルだった。

レン兄のすることと言ったら。嫌な予感に襲われる。

確認しないうちは誰にも見せられない。つい周囲を見回してから、手提げの紙袋を地面に置き、封を開ける。

丁寧に紙で包まれた、やはり薬がいくつか出てきた。

その横にはメモが。

―あまり長引くようなら使うこと

十秒以内にすべて片付く

使ったらすぐ連絡しろ

持っていることすらはばかられ、中身をわたわたと全部取り落としてしまった。

悪い冗談にも、ほどがある。

…これ、冗談だと、いいな。冗談、だよな。

冗談とわかればゴミ箱に捨てれば済むのだが、そうとは言い切れない空恐ろしさを感じて、指で摘みあげる。

封筒にぽいぽいと入れ、袋ごとぎゅっと握り潰してポケットに隠した。

同時に逆のポケットの携帯にまた着信があり、飛び上がる。

今度はメールだった。

―見たか？

効果は絶大だから、よく考えて使うように、なんてな。

冗談かどうかは、判断に任せるよ。」

冗談…じゃ、ないな。これは。

背筋が冷たくなったが、要は使わなければ済む話。使われないことを見越した上での、ダークな「冗談」なのだ。

できるだけ、奴が痺れをきらす前に、片を付けた方がいい。

一応、医者としての正当な仕事だけでも忙しいから、数日は放っておいてくれると思っていいたいだろう。

ああ、もしかしくなくても、俺ってかなりの苦勞人なんじゃないだろうか？

許される期限を算段しつつスニーカーを脱ぐと、二人ともちょうど起きたところだった。

頭を切り替え、明るく振舞う。

「カオル、乾燥機止まってるよ。ナツネ、ちょっと大きいかもしれないけど、どれかやるから」

ナツネは袋から、迷わず黒いメッシュのＴシャツと黒デニムを手にとった。

「黒…」

カオルが思わず背後で呟くと、彼は一瞬戻そうとし、やはり持ち直した。

「黒以外の服は、どうも慣れなくてな。申し訳ない。帰る時に返せ

ればいいのだが…」

「いって。下は乾けば穿きかえられるにしても、シャツなしで帰る訳にはいかないだろ。黒があつてよかったな」

「…有り難く、着させてもらおう」

デニムのウエストと腰回り、裾も少しずつ大きかったが、裾を折れば十分穿けた。

「おっなんか、若者じゃん？って、顔は十分若者な筈なんだけどな。なんだろう。この落ち着き払った爺臭い感じ」

「失礼だよ…でも、強いて言えば話し方がね。まあ…ほら、個性個性！」

「爺臭いのか…私は」

「全部真に受けるのは爺臭い証拠だぞ！基本、冗談だつて！」

真面目に考え始めてしまったナツネの肩をばんばんと叩いて、ユウは笑い飛ばした。

カラ元気でもいい。あの冗談は忘れよう。

「うおー、すっげえ、初めて真剣に触っちった」

また欠食児童のためにトーストとハムエッグ、サラダとスープまで付けた朝食を食べ、三人は道場にいた。

普段なら道着を着、竹刀を振っている場所。スポーツブランドのTシャツとデニム姿で真剣を持つというのは、ユウにとって違和感に満ちていた。

が、それだけに新鮮な体験でもある。両手で「暁」を持って、正段に構えてみた。

「重いなーっ！」

「真剣にも重い軽いはあるが、「暁」は特別に重い仕様だからな。振れるか？」

大胆に大上段に振りかぶって、握りに力を込める。

重みをうまく利用して、投げるように…

振り抜く！

頭の中で感覚を整理しながら、力一杯振り下ろした。

同時に手首に瞬発的に逆方向の力を入れて絞るが、予想以上の重さに負けそうになった。

背筋にずしりと反動が来る。

「うわっ、っと。あつぶねえ。床割るところだった」

「え、気を付けてね。割ったらじいちゃんに殺されるよ」

「わかってるって。やっぱり竹刀とは勝手が違うな」

「しかし流石にコツは心得ている。初めて握るとは思えない」

「マジで？まあ、俺だって一応有段者だからな！」

「でも、私多分それ振れないよ。それこそ床割っちゃうもん」

ナツネどころかカオルにまで正面から褒められて、彼はポワンと赤くなった。

「なな、何だよ。俺を褒めてどうしようって魂胆だ？喜ばせて落と

す作戦か？」

「あ、素直じゃない！」

カオルはぷつと膨れたが、実はユウが素直じゃないのではない。調子が狂っているのだ。

彼女は昨夜の出来事が胸に響いたままで、感情をできるだけ素直に出すように努力していた。

ユウは普通の相手なら汲み取れないこの変化を、敏感に感じ取って反応してくれる。

そう思うと、ナツネの言葉とは違う面で心に染みた。

恋人以上、友達未満か。

ひねくれた表現だったけど、言いて妙なのかもね。

「そっちの、「宵」って方も重いのか？」

気を取り直して、ユウがナツネに聞く。

「重さとしては大差ないが」

ナツネは「暁」を受け取り、黒い柄を彼に向けて渡した。

「ふうん、確かにあまり変わらないな」

ユウがさつきと同じ要領で振りがぶる。

「振るな！」

足を踏み出し、突然ナツネが厳しい声を出した。勢いを挫かれ、そのまま後ろによるめく。

「重さは変わらないが、重心が全然違う。さつきの要領で振ったら今度こそ床を割る。それに、万が一床でなく空間に孔を開けたら、洒落にならない」

「あ…そっか、悪い」

「いや、怒鳴って悪かった」

ユウから太刀を受け取ると「暁」も握り、両手に同じように構えた。

「「暁」は重いながらもほぼ中央に重心がくるようにしてある。何度も振ることを考えてのことだ。「宵」はエネルギーを最高に生かせるよう、一番先の方に重心を持たせている」

手首を返して、軽く振る。

同じ重さなのに刀身の振れ方が異なった。

「そういうことは先に言ってくれよな…「暁」は闇を消す…殺す、とかそういう役目なんだろ？あと、円陣を描く時か。こいつは、空間に孔を開ける以外に用途はないのか？」

ナツネがちらりとユウを見た。

「宵」を鞘に収めて置き、「暁」を構える。

重さを知る二人にとっては驚くべき素早い身のこなしで、上段から振り抜き、そのまま斜めに切り上げた。

たたと軽い足音が響く。

刀の状態を見る必要があったし、背中痛みがどの程度邪魔しいか、動きもチェックしておかねばならない。

「「宵」はただ、時空を異質に変化させて通り道を開けるための刀だ。

「暁」とセットで使うために日本刀の姿に作ってあるが、特に刀で必要はなかった。

本来、何かを斬るためにはできていないからな。どうしてだ？」

「別に他意はないけどさ。例えば、闇が出現した場合、俺たちどうしたらいいかな、って。

闇から身を守る刀は一本だろ？ナツネが闘うのをただ見てるだけじゃ、何も手助けにならないし」

「手助けならもう、十分に受けた。後は私の問題だ。お前たちは全力で私が守る」

何度か素振りをする、今度は「宵」に持ち替え、また素振りをした。

「…やはり、微かにガタついているな。手入れをしておこう」

道場からリビングに移動し、ナツネが太刀をメンテナンスするのを見守った。

ナツネは鍔と目釘をよく調べ、刀袋に縫いつけた別の袋から道具を取り出し、手入れを始めた。

色褪せた黒の布袋は古く、妙に形が歪んでいた。目立たない色で「N」と刺繍がされており、端が少しほつれていた。

「それ、手作り？」

カオルが何の気なしに聞いた言葉が、彼の手を止めさせた。

「…ああ」

「へえ、何、カノジョ？」

色めきだつユウに一瞥をくれ、また手入れを再開した。

何の返事もなさそうだと思つほどの間があつてから、

「…今は、もういない…妹が作ったものだ」

と呟き、それきり本当に黙ってしまった。

―守れるものなど、とうに失くしてしまった。

二人は顔を見合わせ、口を噤んだ。何も言うことが見付からなかった。

ナツネが刀の目釘を外すと、案の定ヒビが入つてグラついている。少し背を丸め、髪を掻き上げて手入れに本腰を入れた。

冷蔵庫の脇では、麦茶を飲みながら、ユウがカオルをまじまじと見ていた。

朝から、言おうかどうか逡巡していたことがある。

でも、下手にコメントしたら怒られそうだしなあ。そういつとこ、本当にじいちゃんに似ていてタチが悪いよ。

数分の沈黙を破り、とうとう口を開いた。

「…それ、可愛いじゃん」

飽くまでさり気なく、ほとんど見もせず言い放つ。

彼女は驚いたようにも、恐れていたようにも見える表情で身構えた。

「な、何？」

「今日はえらく感じが違うからさ」

彼女は朝から迷いに迷つた挙句、髪を高い位置でまとめておだんごにした。

大きなピンで留めて、余った毛先をワックスで緩く流してみる。
ノンがそんな頭をしていたのを思い出し、一生懸命再現したのだ。
両肩から前に三つ編みが下がっていないと心許ないが、新鮮で嬉し
くなった。

あれ、アップにこの眼鏡、似合わない…

合わないのを知りながら身に付けることが怖くなり、眼鏡をケー
スに返す。

物が若干くつきり見えないのが心細かったが、少しだけ自信がつ
いた。

一応クローゼットも覗いてみたが、洋服ばかりは昨日の今日では
どうしようもなかった。

スカートも女の子系のシャツも全く無いわけではないが、もし太
刀を振るうようなことになったら動けないし、汚すのはもったいな
い。

結局いつものサブリーナパンツに、せめて数少ないピンク系のプリ
ントTシャツを着た。

朝一番、ナツネは彼女の目を見て、秘密を共有しているかのよう
に頷いて微笑んでくれた。しかしユウはノーリアクション。一切何
も言わないので、少しがっかりしている自分もいたのだ。

なのに今、忘れた頃のこのタイミング？

「暑いから…上げてみただけ」

違う違う、また強がろうとしてる。

ユウはそれでも満足そうにニコニコしているけど、それに甘えて
ちゃ駄目なんだ。

「それに、イメチェンもいいかな、なんて。…おかしい？」

恐る恐る見上げると、頭の上でもっと満点に笑いながら、ユウが
おだんごをちょんちょんと撫でた。

くすぐったいような気持ち。

そんな恥ずかしさを感じることすら怖がっていた自分が、なんだ
か不思議だった。

「いい。全然いい。さつき可愛いつて言ったる？背が、五センチ追いついた」

「そこ、褒めるポイントじゃないし。崩れちゃうってば」

「そうなの？じゃ、やめた。下手して元に戻されたら困るからな」
「別に困りやしないでしょ」

ユウは、彼女の変化にかなり驚いていた。見た目だけじゃない、口調や表情まで柔らかい気がする。

こんなに急に…はっ！まさか、昨夜俺が寝た後に何かあったのか？そういえば、カオルとナツネの距離感がぐっと近しい気がする。おいおい、遠慮している間に横からさらわれるパターンなのか？…てのは、疑りつつも悪い冗談として。

カオルの行動パターンは、長い付き合いで大体想像がつく。もし俺が怪しむべきおかしいことがあったなら、まず真っ暗になるか、真っ赤になるかのどっちかだ。

結論。彼女に何かがあった。でも「そっち方面」のおかしなことではなかった。

そしてその何かは、俺がずっと与えたいと願って叶わなかったもので、ナツネはそれを易々と果たした訳だ。

く・悔しい…でも、余裕かまして結果オーライとしてやろう。

お陰で俺も、うまくすればやりやすくなる。負けてやる気はないけどな。

彼は奉書で刀に油をひいているナツネの横顔を、好意と敵意を込めて見た。

「うんうん、やっぱり戻されたら困る。三つ編みより全然女の子らしいよ。ちゃんとしたデートに誘いたくなるくらい、いい。…だから、戻すなよ」

今、平静を装ってすらつと言えるギリギリライン。最高の、褒め言葉のつもり。と同時に、ナツネへの挑戦状のつもりでもあった。カオルは耳まで真っ赤になった。

「褒めすぎだつてば！」

そっぽを向いて彼女は麦茶を飲もうとし、思い切りむせた。

これこれ、待ってました。こういうツンツンした反応が、また可愛いだよな。

ナツネがこほんと咳払いをした。

「ラブコメなら、他でやってもらえないだろうか？外野は居づらくて仕方ない」

「ラブコメじゃない！もう、二人してからかうんだから！」

カオルは更に赤くなり、廊下へ出た。頬に手を当て、火照っているを感じる。

「もういい、やめる！」と言いたくなるのを止めたのは、初っ端としたら及第点、だよな？

彼女は赤い顔で戻る気にならず、洗面所で顔を洗おうとした。その時、玄関が開いて重三が入ってきた。

「あ、おかえ…わ、ちよつと待つて」
血相を変えて、リビングへと戻る。

ナツネは手入れを終えて刀袋へ太刀を入れているところだった。
「終わってる？良かった。じ…祖父が帰ってきたの。驚かせたくないから、真剣はしまっておいて。ユウの、バンド関係とか？そつちの友達つてことにしておいて」

バンドをやっている風貌には一切見えないが、この際それはどうでもいい。

どうせ重三にはわからないし、ナツネがカオルの友人であるという設定は余りに不自然すぎる。

また玄関に舞い戻り、重三を迎える。

「じいちゃん、サトさんどう？」

「手術はとりあえず成功だ。だが元々虚弱でな。意識が戻るまでは予断を許さんらしい。あまり詰めていてもご家族に迷惑になるから、とりあえず帰った」

「ちよつと相談ごとで、ユウとユウの友達も来ているの。うるさくしないから、ゆっくり休んでね。ご飯は？」

彼は物音のするリビングに目を遣つてから、自室へと入った。

このまま横になつても、休めるとは思えなかった。

心はまだ、色々な管につながれて別人のように横にされたサトのところにあつた。

「立ち食いそばに寄つてきた。道場に入る。独りにしてくれ」

疲労と睡眠不足で頭痛はするが、敢えて道着に着替えを始めた。

「はい」

彼女は重三の気持ちを悟つて下がった。

「ナツネに事情話しといた。サトさん、どうだった？」

リビングに戻ると、待ちかねたように真顔でユウが尋ねる。早い帰宅に、最悪の事態も覚悟していた。

カオルは二人に向かって頷いた。

「とりあえず大丈夫だって。あちらにも家族がいるし、他人にずっといられても、ね」

「他人で……そう言ってしまうばそうだけだよ」

「仕方ないわよ。道場に入るらしいから、そっとしておいてあげて」
ナツネがピクリと反応した。

「道場に？」

「ええ。よく精神統一するの。休もうにも休まらないんじゃないかな。どうして？」

「いや。なんでもない」

彼は指を唇に当て、何か考えている風だった。黙ったまま、膝に置いた太刀をじっと見ている。

ユウはふと、昨日から気になっていたことを口にした。

「その太刀ってさ、俺が想像したようなハイテクじゃないんだな」

彼は不意を突かれたようにユウを見た。

「俺てつきり、柄の中とかがコンピュータで詰まってるのかと思うた」

「柄に？」

「だって、普通の太刀に何をしたらって、空間に孔開けたりできないだろ？」

ほら、スターウォーズのライトセーバーみたいにさ。ボタンを押すとパワーが！って感じなのかと思った。未来人は知ってる？ スターウォーズ！」

「そういうことか。私はその映画は観たことがないが、イメージはわかった。」

刀自体は、名工が鍛えた古い銘刀だ。ハイテクと言えばハイテクだが、柄の中に何かを仕込むような古典的な方法は使わない。大体、

一番負荷が掛かる部分に精密機器を仕込むのは非効率なことだ。

私の時代でも頑なに伝承を守る刀鍛冶がいて、膨大なエネルギーと情報を組み込めるように技術を駆使して、協力して鍛え直してもらった。

だからたとえ柄が壊れて刀身と離れるようなことが起こっても、刃自体にエネルギーが込められているから対処できる可能性が高い。逆に短所を言えば、この刀がもし修復不可能なほど折れたりしたら、すべてがおしまいということだ。

精密機器ならともかく、私が直す術を持っていないからな」

ナツネは太刀を見ていたが、その瞳は愛しそうだった。

「短所があっても、愛着があるんだね」

カオルが含むように彼に笑いかけた。

「ああ、その通りだ。一人で作れる代物ではないが、一番深く開発に携わったからな。」

本当は、どんな姿でもよかった。「宵」をわざわざ刀に鍛えることは無駄だと馬鹿にもされた。しかし、私が任務に就くことは決定事項だったし、ならば私が望む形状にすることが合理的だという結論になった。扱いやすいというだけでなく、愛着ある形に」

ふうん、と二人は感心した。

政府の機関にいて、研究員で、居合いの手練れで――

人格的にはやや取っ付きにくいし難だけど、まるで万能？

「おい、ユウはまだいるか」

重三が廊下をこちらへ歩きながら呼んでいた。

「あ、何じいちゃん」

リビングに入る引き戸を開けて顔を出した時、重三とナツネの目が合った。

「ユウの友達」というには大分年上。予想外の来客に一瞬戸惑った。ナツネはさりげなく太刀を後ろに置いて立ち上がった。深々と直角にお辞儀をする。

「お初にお目にかかります。ナツネと申します。お見知りおきを」

時代的な口調に更に面食らった様子を見て、ユウが助け舟を出した。

「あの、こいつ今度バンドに入ることになって…ベース！暗いだけに、ベースでね！」

ちよつと時代劇オタクだから、変なんだよ。今日は曲作りでカオルに聞きたいことがあって」

「ああ、ナツネさんとやら、ゆっくりしていきなさい。…ユウはこの後忙しいのか」

「え？別に大丈夫だけど何？」

「一時間後に、道場に来い。一本つけてやろう」

「げ。久々のシゴキっすか？」

「最近随分タルんでおるだろう。わしの目は誤魔化せんぞ。一本だけだから、ご友人には待つていただけ。いいな」

本当は自分が精神統一した確認としての手合いなのだ。

カオルは小柄で素早く、万全の状態でしか手合わせしたくない相手になってしまった。まだまだ負けないつもりでいるが、もしウツカリにでも一本取られたら、面目が立たない。やや不調のコンディション的には、力任せのユウの方が都合がよかった。

ニヤリと笑い、また重三は廊下へと出て行った。足音が道場の方へ小さく消えた。

「…おいっ！不自然すぎだろ。なんだよあの挨拶」

「そうか？年長の者への初対面の挨拶といったら、あれが適当だろう」

「若者なんだから、ちいっす！でいいだろ別に」

「ちいっす？」

ナツネはきよんとしてしまった。

その表情が思いの他可愛らしく、カオルは吹き出した。

「ユウ、変なこと教えないの。流行も時代を一周して返るって言うから、言葉遣いもきつとそうなのよ」

彼はまたじつと腕を組んで考えていた。

「言われてみれば、周囲の話し方はお前たちと変わらなかったな。私が変わっているだけなのかもしれない。ユウの言い訳もあながち嘘ではない。」

幼い頃から時代劇や時代物の小説が好きで、それで言葉を覚えたようなものだから」

こんな言葉遣いの、堅物の二十代が傍にいたら――

やっぱり、この人ちよつと難あり、かも。

それすら少し可愛らしいと思いつつ、カオルはユウと目を合わせ
て揃って肩をすくめた。

重三は道場に入り、上座の位置に膝を割って正座した。蝉の声がちらほら聞こえ始めていた。

もう、夏か―

最初はその蝉の声を消すように意識し、精神を集中する。移動で浮いた汗が、ほんの数秒ですつと引く。

周りの温度、匂い、感触、空気。それらを己の中から消し、果ては己を消す。

呼吸を落とし、無になる。

「…ええいつ」

今日は、どうしても無になるまで統一できなかった。途中でどうしても、サトの顔が浮かんでしまうのだ。

なんと、耄碌したものか。

体力も精神力も、ここまで枯れてしまったのか…

サトの可憐な花のような笑顔を思い出す。押し付けがましくなく差し出される親切を思い出す。そして同時に、腕から伸びた点滴、呼吸器の太い管、閉じられたままの瞼を思い出してしまふのだ。

己の不甲斐なさに苛立ち、集中することを諦めて拳で膝を打つ。

「…何故、こんな…」

それでも飽き足らず、床を何度も叩いた。

それに呼応するかのように、カタ、カタと窓が揺れた。構わずに、気が済むまで叩きつける。

立て付けが悪いから響くのだと思っていたが、ガタガタと鳴り出し、床までもが拳とは無関係に揺れた。

「な…地震かつ」

左右の揺れが激しくなり、正座を崩して両手で床にしがみついた。道場に通う子供用の下駄箱が、遠くで大きく倒れた。

「…カオル！」

古くとも梁のしつかりした、ガランと物の無い道場にいれば、自分は大丈夫だと確信した。

それよりもとかく、孫娘が心配になった。この揺れでは、リビングの家具もガラスも凶器となりうる。なんとか立ち上がろうと試みるが、足を置くべき重心さえ保てない揺れだった。

治まる気配もない不可思議な揺れ。どう、なっているのか…

カオルが無事か、見に行かねば―

彼は這いつくばって、少しずつ移動しようとした。

カオル…サト、サトさん…

サトはどうなっているだろう。

一瞬にして、心電図の機械が倒れてのしかかるところ、管が抜けて機能を果たさなくなるところ、ベッドから飛び出して息絶えるところまでが想像された。

カオルが家具に押しつぶされているところを心配するよりも、それは遥かに鮮烈に生々しい想像と確信だった。

胸に黒々と、絶望感が沸いた。

前向きに誠実に、生きることと向き合い続けてきた七十五年が、さつと暗い淵に落とされたようだった。

誰しも、いつかは死ぬ。しかし、今ではない。今ではない、と思い込みながら生きていくのだ。

自分の傍で、様々な死が過ぎ去って行った。女房も嫁も、息子までが親不孝に早世した。

また、あの苦しさをやりすごさねばならないのだろうか？

余りに、余りに辛い。

年をとって弱った身体と心に、厳しい鞭が下されるようだった。

「…うつ…！」

気弱になった心。負のエネルギー！

彼の胸の辺りからずるりと黒い霧が解放たれ、道場の中央に漆黒の影の球体が浮いた。

なんだ、これ、は…

彼は力を吸い取られ、揺れ続ける床に倒れた。

そこへ飛ぶように現れた、もう一つの黒い影。ナツネが空を切るように跳躍しながら「暁」の鞘と「宵」本体を投げ捨てた。

鞘と太刀は壁まで一直線に滑り、がちやりと止まる。

彼はそのまま「暁」を両手に握り直し、球体の真ん中に恐れず突っ込んでいく。光る刃と黒い面が接触し、がきん、と大きな音がした。

「ナツネ！何が…じいちゃん！」

一歩遅れてカオルとユウが飛び込み、床の揺れにたじろぐ。

扉の外の光景だけが止まっており、まるで地震の体験の装置に乗ったようだった。

揺れているのは道場だけなんだ――

ほんの五秒前、濃密な闇の気配に気付いたナツネが太刀を刀袋から出しながらリビングを飛び出し、二人は驚いて追いかけてきた。

考えなしにナツネを追って道場に踏み込んだが、余りの揺れにお互いしか掴まるものがなく支えあう。ほんの三メートル先に重三がいるが、這って寄ることも難しいように思えた。

ナツネは斬撃を利用してひらりと宙を舞い、柔らかい足捌きでぐらつくことなく着地した。

球体は割れ、細かく分裂した。飛び散った黒い塊が壁や天井にべたりと取り付き、染みのように広がっていく。染みは範囲を細く広げ、今度は下に方向を変え、幾重ものカーテンのように垂れ下がった。

ナツネは休むことなく、踊るように闇を切り抜く。跳びながらも斜めに斬り下ろし、遠心力で振り向きざまに斬り上げる。

軽やかにステップを踏み、前面も背面もこぼすことなく裂いてゆく。

「綺麗…」

思わずカオルは呟いた。

揺れの中、自分はユウの右腕にしがみつくとしかできないのに、

彼は実に舞うように闘っていた。

刃に当たった黒い部分は、瞬間布のように切り裂かれ、断面から色が薄くなった。そして一定の範囲がそのまま本物の霧となって失われてゆく。その範囲から逸れたカーテンはひらひらと床まで落ち、折り重なって床に広がるのだ。

徐々に、ナツネが着地できる床の部分が減っていった。

その都度、床を刺すようにして黒い部分を狭めてはいたが、気付かないうちに闇はゆっくりと動き、重三の方に影を伸ばしていた。

闇の総量に比例して揺れが小さくなったことに気付き、ユウが重三へと駆け寄った。

カオルもよろめき、それに従う。

「じいちゃん、大丈夫か？」

ユウが抱き起こして揺する。

「散々揺らされたのに、また揺するな。気分が悪くなる」

重三はされるがままになりながら、ふんと笑った。

「強がり言っている場合じゃないわよ・・・怪我はない？」

「心配するな！ お前たちは大丈夫か？ 地震で全員潰されているのではと思ったが、身体が動かなくて、な」

ぜいぜいと息を切らしながら更に強がった。

心を闇に喰われた衝撃と激しく揺すられた衝撃で、ほとんど消耗させられていた。

薄く開いた瞳に、暗い闇の切れ端が映った。

理屈では処理できない現象だったが、本能で危険を感じていた。

見えない向こう側から光る刃が突き立てられ、またしても端ぎれのように空を舞った。その上端がひらりとなびき、カオルの後頭部に届くほどの位置に落ちてこようとした。

ユウもカオルもそれを見ていない。

「カオル！」

ナツネが叫んだが、彼女が振り返ろうとした時にはもう目前まで迫っていた。

重三は何も言葉を発する暇もなく、勢いを付けて向きを変え、反動で力一杯力オルの腰を蹴りとばした。

どさり。

彼女が激痛に顔をしかめて元いた場所を見ると、重三の腰から下
が闇に埋まっていた。

「じいちゃん！」

金切り声を上げて駆け寄る。

ユウはすぐ横で、おろおろしながら重三の両腕を捕まえていた。

「…何とも、ないわい…」

苦痛に口元を歪め、カオルの頭に手をやる。

「じいちゃん、今、今引き出すからな！」

ユウが涙声で叫びながら脇に手を組み、必死で引き抜こうとする。
しかし、黒い塊は嘲笑っているかのように波打ちながら、今にも飲
み込もうとしていた。

腰から次第に鳩尾へ、胸へと伸びていく。

「ユウ…手を離せ。あぶ、ない…」

顔中から汗を吹き出しながら、ユウの手を掴んで解かせる。

ナツネは、身の回りに迫る物体を三百六十度斬り付けながら、な
んとか三人に近付こうとしていた。闇はそれを知ってか知らずか、
ナツネの視界を遮るように襲い掛かる。

三人の方に向けて跳躍し、邪魔になっているカーテン状の闇を斬
り、床の隙間に左手で着地。反動で宙返りしつつもう一度太刀を振
るった。

その先は既に頭の上の物体は斬り尽くしてあった。

しかし床がすべて黒一色で、その端に重三が見えている。

一歩ではぎりぎり、間に合わない。

一か八か…

彼は三步下がって助走をつけ、跳んだ。

やはり足りず、黒い床に足を着きそうになる。

咄嗟に刀を下にして床に突き立て、柄の先端に足をかけて二重に跳び、ようやくカオルの横に着地した。

さすがに、息が上がっている。

「ナツネ！どうしたらいいんだよ！引いても出てこないんだ！」

太刀の周りの闇が消え、隙間ができていた。

彼は刀を取りに戻り、返事もせずに重三の腰の辺りの闇に「暁」をぐっと刺した。

ちかりと光が差し、闇が一部、消え去った。

しかし、床が見えるのみ。そこにある筈の身体は見えなかった。

ナツネは無念そうに下を向いた。何も言わず、そのまままた後ろを向いて、ひたすらに闇の残党を払った。

重三の胸に被さって消えない空間から、ほとんど首と左腕だけが出ており、その下は闇が薄く床になっていた。

「いや…いやあ！じいちゃん、消えないで！」

重三は尚も強い瞳でカオルを見据え、笑顔を浮かべた。

「カオル…悪かったな…わしのせいで、お前を…早く大人に…させてしまった。」

今、思えば…道場に入れずに、ただ、孫として…可愛がればよかったのに、な…」

カオルは必死で、頭を撫でている重三の手を握った。

言いたいことなら山ほど、ある。

でも、何を言うべきか、何が一番言いたいことかわからなかった。唇を震わせ、ただ何度も首を横に振った。

「ユウ…カオルを…たの…」

彼は最後の力で彼女の手をぎゅっと握り返し、はつきりと振り解いた。闇もまた最後の一息で盛り上がり、頭と腕を同時に飲み込もうと広がった。

解かれた手を追おうとするカオルをユウが覆い、力強く押さえた。「離して！」

彼は絶叫する彼女を抱き締め、絶対に緩めなかった。

「見るな！」

平たい物体は広がり、細く姿を変えて触手を伸ばし、楽しんでいくかのように頭部と腕をぐるぐると絡めとって、丸い塊へと変貌した。

ユウはカオルを押さえるのに必死だったが、自分自身も見ていられなかった。しゃがんでカオルを包んだまま、目をぎゅつと瞑って耐えている。

黒い塊は今度はユウの背中に目をつけたように、伸び縮みした。と同時に、ナツネが中心を外さずに太刀を突き刺した。轟音が収まり、揺れも完全に止まった。

それが最後だった。

からん、と太刀が落ちて乾いた音を立て、ナツネが喘ぎながら崩れ落ちた。

背中が傷が開き、出血している。

「すまない…カオルは？」

仰向けのまま両手で顔を覆い、彼は息を整えていた。

ユウは力を緩めて彼女の顔を覗き込もうとしたが、落ちそうになつてまた抱きとめた。

「気を失ってる。お前は大丈夫なのか？」

「疲れただけだ…どこかに巢食っていないか、外に漏れていないか調べるから、彼女を看てやっていてくれ」

「なあ！」

嗚咽を堪えながら、喉が震えないように堪えながら聞いた。

「駄目なのか…？もう、どうしようもないのか？こいつ、家族、誰もいなくなっちゃうんだよ。まだじいちゃんなしじゃ駄目なんだよ。何とかしてやってくれよ！」

ナツネは重い身体を支えて起き上がった。

声も、心も、すべてが重かった。やはり、重三を道場へ入れさせるべきではなかったと後悔していた。

「…見ただろ。あれが、すべてだ。辛いだろうが、今は悲しみに

飲まれるな。とにかくカオルを支えてやってくれ。闇は負の感情を喰らう」

「……くそっ」

ユウはカオルを抱き上げて、壁を思い切り蹴りつけて出て行った。大きな音がして木の壁に穴が開いたが、もはや気にするつもりもなかった。

12・雨の海 - 1

ユウはカオルをベッドに寝かせ、タオルを濡らして顔を拭いてやった。

クリーム色のラグの上にへたり込み、ベッドの横にぐったりと寄りかかって彼女の顔を見た。

支えろって、どうしたらいいんだよ。俺に何ができるんだよ。あいつ、無茶苦茶言いやがって――

腕に顔を埋めて、深いため息をつく。

でも、やっぱり――無茶苦茶だけど、やっぱり俺が支えるべきだ。方法はわからないけど、とにかく俺が泣いている場合じゃない。目が覚めた時に俺が泣いていたら、どう思わせることになる。落ちて置いて、ゆっくり伝えた方がいい。

自分を奮い立たせるように大きく息を吐いた。集中しろ、集中！カオルの手がぴくりと動き、口が開きかけた。目が、覚める――

「カオル」

静かに声をかけると、彼女は薄く目を開けた。

「ユウ……」

穏やかに呟いてから、倒れる前のことが甦って飛び起きた。

「ユウ、じいちゃんは？」

真っ直ぐに見詰め、彼の衿元を揺さぶる。戸惑いながら、その両手首を握った。

「カオル……落ち着いて、聞いてくれ」

彼女の視線を受け止め、下から見上げた。背筋を伸ばして近付き、手の甲を包んだ。

ためらいはあったが、先延ばしにすればただけ傷付けることになると思い直し、意を決した。

「じいちゃんは、完全に、闇に吞まれた。もう、帰っては……来ない」

「嘘…嘘だ」

大きく瞳を見開き、彼女は更に瞳に力を入れた。しかし、彼は揺るがない。カオルのために、微塵も揺らぐ訳にはいかない。

期待を持たせるのは罪だ。期待させても、ほんの数分しか持たない嘘にしかない。

「本当だ」

彼は真剣に、一切の虚飾を交えないように告げた。しかし決心を余所に、涙腺が緩みかける。

茶色い瞳がうつすらと濡れた。それを見て、頭先从足の先まで、びりびりと破けるような衝撃が走る。

「いや…嫌だ。ねえ、いや！」

首を力任せに横に振り両手でもがくが、ユウは離さなかった。

「落ち着け、頼むから」

「いやだ！」

絶叫して立ち上がろうとし、押さえられると抵抗した。

体格で優る分たやすく押さえられる筈なのだが、突然のパニックに対処する方法が見つからなかった。

「大丈夫、大丈夫だ！」

「大丈夫じゃない！私…私のせいで！私を庇って！」

「お前のせいじゃない！」

「違う！もう嫌だ！いや！みんないや！消えちゃいたい！」

最後はもう明瞭な言葉ですらなかった。

目をきつく閉じて、心が深く遠いところに飛び、戻る気配がなかった。

ユウは押さえながら、どうしたらいいのかぐるぐる考えた。彼もまた、波に飲まれてパニックを起こしかけていた。叫び続けるカオルを格闘しながらに押さえ続ける彼の目に、恐ろしい物が映った。

彼女の背後の壁に、黒い染みが浮き出てきたのだ。

「カオル、駄目だカオル！戻って来い！」

叫ぶ彼女の耳に届くように声を張り上げるが、まったく聞こえて

はいない。

天井から、ぽつん、ぽつんと小さな黒い雫がゆっくり落ちた。

彼女の恐れや哀しみ、そのものの姿で。

雫は二人の周囲を囲むよう、遠巻きに部屋の隅を滴っていた。落ちた雫は染み込むことなく、その一つ一つが盛り上がった黒い水滴となり、艶やかに家具や天井を映し出している。

すぐに二人を吞もう、という意志は感じられなかった。むしろ、それだけに不気味だった。水滴の上にまた一滴落ちると合体し、その分だけ成長する。

カオルは我を忘れて暴れ、とうとう汗でユウの手が滑って抜けた。何も見ずに手を振り回す。

ばちん！

ユウはしたたかに殴られるのも気にせず、逆にカオルの頬をベツドに横倒しになるほどの勢いで平手打ちにした。

彼女は浅い呼吸で動かなくなった。

呼吸の中に、上ずった悲しげな音が混じる。

深く傷付き自我を失くしているカオルを見て、彼女の父親の葬儀での彼女を思い出した。

無感情に心を閉ざし、自分にハンカチを差し出した。

彼女は、そう。表情なく笑って言ったのだ。私は、知らないから――ユウの瞳から、初めて涙が溢れ出した。可哀想で、悲しくて愛しくて仕方ない。たとえ同情だとしても、この気持ちは変えようがない。

彼女の肩を持って支えると、力なく素直に起こされた。口が微かに動き、何か呟いている。髪が乱れ、汗で湿って目に被さっていた手でそれを横に分けてやり、瞳を合わせる。でも、見ているように見ていない。暴れなくなっても、心はまだどこかを彷徨っていた。「カオル、ごめん。ごめんな。大丈夫じゃ、ないよな。当たり前だよな」

張ったばかりの、赤くなっただ頬を撫で、おろおろと囁いた。

ただ黒かった壁の染みからも水滴がぷつぷつと盛り上がり、筋と
なって流れた。

闇は、負の感情を喰らう…

恐れの中、ナツネの言葉が甦った。

情けないけど、駄目なんだ。やっぱり、俺じゃ…わかっているよ
うで、わかってやれてないんだ。

「ナツネ！来てくれ、ナツネ！」

開いたままの扉の向こうに高く叫ぶ。

しばし耳を澄ませるが、聞こえないのか応答がない。もし何事も
なければ、カオルがパニックを起こした時点で察知して駆けつけて
いるはずだ。

ナツネの助けは、期待できない。彼女を抱えて器用に雫を避けて
逃げる自信もない。

彼自身、異常な事態に理性の限界が頂点に達していた。

冷静でいようとする気持ちと焦りがせめぎ合い、まだ「消えたい」
と動く唇を、咄嗟に自分の唇で塞いだ。

言うな。そんな言葉を言うな。俺が、言わせない。

切なさが溢れてくる。

「咄嗟に」だなんて、俺、最低だな――

12・雨の海―2

カオルの瞳に、ふと光が戻った。

感覚がほぼ遮断されている中で唇の違和感が感じられ、一気に現実へと引き戻された。

驚いた身の動きがユウに伝わり、唇を離す。

そのままふわりと柔らかく抱き締め、彼女の頭を胸に引き寄せる。正氣に戻った様子に、今度は安堵の涙が浮かんた。

「俺が、いるから。絶対に、独りになんてしないから。頼むから、消えたいなんて思わないでくれよ」

部屋の壁は白と黒のストライプのように見えるほど、流れ落ちる雫によって覆われていた。天井からゆっくり降りてくる雨は疎らだが、範囲は確実に内に広がり、彼らへと迫っていた。

「ユウ…ごめん…」

温かい身体。温かい心。胸の中心にぽっかりと開いた穴に、感情が流れ込んでくる。

ユウの肩越しに、自分の手が見えた。手首にはくつきりと青い痕。痛みは感じないが、緩まる気持ちと同じ速さでじんじんと疼いた。

そっと、背中に手を当てて身体を包み込む。それ以外に、深い温かさに応える術が見つからなかった。

ぽつり―ぽつり―

黒い雨がそっと寄り添うように、二人へと近付いた。

決定的な意思を思わせる一滴が、ユウの左腕を掠める。

重力に反しての緩慢な落下なので、容易にを右に引き寄せてかわした。

今度は、彼の後ろ側。カオルが叫んだが間に合わず、右の脇腹を長く切り裂いて落ちた。

「…っ！」

ゆっくりなだけに、余計に耐え難い苦痛を味わう。

ドライアイスを押し付けられたような冷たさの後、鉛の塊がえぐっていったような熱さを感じ、二つに折れてしまいそうになる。

駄目だ。駄目だ。絶対に。

約束は、破らない。絶対に、独りになんてしないから。この程度で倒れたら、今度こそおしまいだ。言った先から約束を破るなんて、そんな恰好悪いことができるかよ。伊達に兄に虐げられて育ってないだろ。

気合を入れ、カオルを引き上げながら自分も立ち上がる。

シャツの切れ端に血が滲み、みるみるうちにデニムまでもが黒くなった。

「ユウ！」

「だい・じょうぶだつて」

血と痛みに吐き気を催し、自分で頬を打った。呼吸が乱れないように丹田に力を込め、なんとか意識を保つ。

我に返って見回すと、部屋の様相は一変していた。ぱらぱらと落ちた小さな闇が次々と合体し、いつの間にかそれぞれが盛り上がった大きな水溜りになっていた。

まるで黒い水銀のように、形を円めて周囲を映し出している。それら一つ一つの側面に、恐怖で固まった二人の顔が映っていた。

仕切られ、遮断された空間。闇は開けられたドアの外側まで漏れ出すことはなく、静かな廊下が伸びている。現状を確認するその数秒にも、壁から滴った物体が更に合流して、足の踏み場が消えつつあった。

二人を取り囲み、いつ一面を闇にしようと相談しあっているかのような蠢き……

「カオル…跳べる、か？」

「跳ぶ…しかないんだよね？」

「俺がアシストするから、先に跳べ」

わき腹を強く押さえ、脂汗を浮かべながら促す。

「だって、ユウは」

「いいから早く！俺も跳ぶから！」

有無を言わずに出口を顎で示す。たった一メートルが、とてつもなく遠く感じた。

決心し、彼女はたった一步しかとれない助走をつけた。

雨はまばらで、今出口まで跳べさえすれば、いける――！

踏み切る瞬間、ユウが絶妙のタイミングと力加減で、後ろから投げ的要領で腰を押した。押されたことで重心を崩すと落ちる。本能的に腹筋に力を入れて丸まった。

乱れて動いたふくらはぎを雫が掠り、ぴしつと音を立てた。どうなったか自分でもわからないうちに、彼女は廊下に転がり落ち、勢い余って壁にぶつかった。

冷たくじんとした後、自分の血が温かく流れたのに気付く。

それでもユウが気になり、すぐに起き上がった。

彼は脇腹を押さえたまま、天井を仰いで目を閉じていた。肩で呼吸をし、首や額から玉の汗が出ている。

もし跳べなかったら……

途方に暮れたような仕草に、焦って叫んだ。

「ユウ！跳んで！」

彼は頷き、背を屈めて腰を落とした。

利き足は右。しかし右で踏み切ったら痛みで勢いが弱まってしまった。

重三がするように痛みも現状も意識も頭から消し去るよう、極限まで集中した。

左足で、いったいに跳躍する。飛び散った血が黒い水溜りに落ちて、ジュツと泡を立てて蒸発した。

生臭い鉄の臭いと熱が立ち昇る。

その黒い煙が一筋糸を引いた瞬間、彼もまた廊下の壁に頭から激突して、部屋を無事に抜け出していた。

「……」

ずるずると廊下にもたれてしゃがむ。膝まで血染めが広がって

た。

右足で着地した血の跡が、黒い水の端ぎりぎりに付いていた。大柄でなければ、足が届かなかったかもしれない。長身になるよう生まれたことを、これほどありがたいと思ったことはなかった。

カオルも横に座り、胸が潰れそうなほど心配して身体に触れようとするが、ためらって手を引つ込めた。触れたら余計に痛そうで怖かった。

「どうしたらいい？大丈夫？痛い？」

「痛くない、とはさすがに言えないけど、頭はむしろしゃっきりした……脚大丈夫か？」

改めてふくらはぎを見ると、瞬間的に引つ込めたらしく、幅も深さも大したことはなかった。包丁で指を切った時のように鋭い痛みは走ったが、血さえ止まれば絆創膏でも済みそうな程度。

「こっちは掠り傷だから。それより、ナツネはどこ？」

「わからない。さっき呼んだけど、返事がなかった。何かあったのかもしれない！」

跳ぶ時に一気に集中したことで、意識が飛びそうなほどの痛みは遠のき、彼は道場へと急いだ。

カオルも慌てて後を追う。

冷気を感じて振り返ると、黒い水が廊下へ溢れ、はっきりと彼らを追って流れ出していた。

「ユウ！急いで！」

全力で走り出しながら叫ぶ。

ユウも一度後ろを見て血相を変え、右足を引きずりながら走った。右足が床を踏む一足ごとに、脇腹に鼓動が打ち、熱を持つ。

廊下を回りこむと、道場の扉が開いたままになっていた。

ユウが急に止まり、背中にカオルがぶつかった。

「な、何ー？」

彼女が覗くと、道場の中は異常事態になっていた。

13・賢者の海

道場では、至る所から火が出ていた。冷たく黒い火が、メラメラと音なく燃えている。

更に火の玉が空中をゆつくりと浮遊し、変則的な動きで飛び交い、ただ一人真ん中で闘うナツネを襲っていた。

黒いシャツの左肩が焼け焦げ、血に濡れた腕が露出していた。

「ナツネ！」

ユウが叫び、二人同時に道場に転がり込む。

恐ろしいのは山々だが、どちらにしても退路はなかった。背後から不穏な雰囲気を感じつつ、大河のようにゆつたりと水流が迫っていたのだ。

壁や床、空中に留まる火を避け、できるだけ道場の奥へ逃げ込む。「そっちの出口が開いている。時間を稼ぐから、外へ逃げろ！」

ぜいぜいと息を切らし、ナツネは身を低くしたまま、二人とは逆の方向へ駆けた。

前方の火の玉を突き、壁から噴き出す火焰を薙ぎ払い、ふわりと足元へ舞う火の玉を避けて左腕一本で側転した。

背と肩の傷に障り、肘がぐくんと落ちそうになりながらも体勢を保つ。動きは確実に精彩さを欠いていた。

逃げろと言われた二人だったが、共にナツネから目を離せない。

火焰は合体して数を減らし、大きくなりながら、次々と彼へと向かった。自然と二人の周囲からは炎が遠のき、出ようと思えばノーマークで外に出られる状況ではある。

ユウはナツネを見、次にカオルを見た。

俺に何ができるだろう。

今が大事。カオルが大事。自分も大事。同列で、家族や友達、たくさんが大事。不謹慎かもしれないけど、その後大分順位を下げて、世界の未来が大事。

それらを守るために、しなければならぬこと。

「カオル…怪我、本当に大丈夫か？」

またナツネを見据え、脇腹に手をやる。

出血はおさまりつつあり、脳内でアドレナリンが大量に噴き出していた。動ける！

「全然平気。それよりユウとナツネの方が」

「よかった。ナツネを助けに行く」

「…！だって、武器なしで、怪我もしてるのに」

「怪我はあいつとお互い様だよ。ナツネがもっている「暁」を使う。大した助けにならなくても、束の間休むくらいはできるだろ？もしあの黒いのが襲ってきたら、自力で逃げるんだ。できるか？」

「無茶言わないで！それなら私が助けに行く！」

「もう本当に痛くないから。お前が行ったって、あの太刀三回も振ったら腕が負けちまうだろ。むしろ…足手まといになる。頼むから、俺に任せてくれ」

有無を言わさぬ覚悟を見せ、言い聞かせる。

もし、俺もナツネも闇に吞まれたら、その時は――

思わず続けようとした言葉を、ぐっと飲み込んだ。

絶対に、吞まれない。

俺のことは、俺が守る。ナツネは未来を救おうと背負っているけど、俺は俺の力で、俺の大事なものを守る。

数々の、言わない言葉がカオルの心に伝わった。

止めても無駄。もし、ユウもナツネも吞まれたら――

その不安を打ち消して、ユウににこっと笑ってみせる。

私も守りたい。守れるものを全力で。例え非力でも。無力でも。でなきゃ、生きてる意味なんてない！

「じゃあ、任せる！その代わり、危なくなったら今度は私が守るから」

「カオル」

咎める声を出したが、彼女もまた有無を言わさぬ決意を込めてい

た。

「大丈夫だよ。一矢報いるくらいはできるって。それに、どこに逃げたらいいのよ。逃げたところでどうなるの？だから…私に助けさせないで。絶対、負けないで」

「は…了解っ！」

ユウも彼女の意志を悟り、笑顔で親指を立てた。

彼らの入ってきた扉からは、黒い水流が沈黙を守ったまま、じつくりと流れ込んでいた。

火焰がそれに力を得たようにまた増殖し、壁や天井から湧いては離れ、火の玉が生み出される。

ユウは集中を入れ直し、心の中で焦りを握りつぶした。

水が来ないうちに、あいつの所まで、とにかく走る！増えた火の玉をかいくぐり、右へ左へと避けながら進む。

突然目の前に黒い炎が現れて仰け反ると、顎の先から眉間にかけて刀がびゅつと逆手に突きこまれた。

思わず刀の背を見て寄り目になる。鼻の十センチ目前で、黒い炎が霧になって消えた。

「つつつつぶねえ！」

至って冷静なナツネに抗議の声を上げる。

「ちゃんと避けるのは確認した。もし当たっても峰打ちだ。それより何をしに来た。逃げると言っただろう」

「お前、それちよつと貸せ」

刀を休まず振るいつつ、ちらりとユウを睨む。

「ちよつとは信用しろって。もうフラフラだろ。お前みたいにアクロバットはできないけど、一休みする暇くらいは作ってやれる。とにかく斬り付ければいいんだろ？」

背後の火焰を見もせずに打ち払い、ユウの左側の炎をを袈裟斬りにした。

「連戦は、さすがに堪える…」

疲労した身体にユウの言葉が嬉しく思え、張り詰めた糸が切れて

膝を着いた。

待ってましたと太刀を取り上げ、正段に構える。

右、右上方、真上後ろ側、左下。

炎が揃って揺らめいた。くそ。今馬鹿にして笑ったろ。

重い太刀を振りかざし、フェイントをかけて後ろ側の炎をまず突く。ナツネみたいに視界が広くないからな。まずは死角からだ。

研ぎ澄まされた集中力で突いた刀を引き抜いて、右へと攻撃する。無意識に、頭の中で技を呟く。

抜き胴、逆胴打ち、引き面打ち。刀の重さもしばし忘れ、次々と打ち砕く。炎に刃が当たると一瞬の手応えが残って消え去る。奇妙な感覚だった。

振り返りざまにナツネが安全かどうか、遠いカオルが困っていないか何度もチェックしつつだが、正直、すべてに対応できる自信はなかった。

まったく、この闘い方をこの何倍も鮮やかに軽やかにこなすってどこにそんな筋肉が付いてるっていうんだ？

確か栄養失調って、言われてなかったか？背中、縫ったばかりじやなかったか？

研ぎ澄まされた集中の中、頭の片隅をそんな疑問がよぎる。

超人じゃあるまいし、簡単にへこたれて負けていられないな。

ナツネは傷の様子を見、焦げた袖を破り捨てた。油断することなくユウの動作を見守りながら休憩する。

彼の期待以上に、ユウは闇を相手に果敢に闘っていた。しかし、速くなくとも変則的な動きと数に、徐々に疲れが見え始めている。

集中が途切れ、大きく空振りして転びそうになった。

「ユウ！後ろ！」

カオルが壁際から死角を注意した。

声高に叫び、リビングで持った太刀の感覚を思い出す。

ユウが言ったように、私だったらあんなに振れないだろう。

稽古でユウと手合わせをしても、普段は性差を感じない。ユウは

体格を生かし、カオルは小回りを利かせるからだ。

それでもやはり、男と女では、持っているパワーが違う。

全てにおいて男が女より優れているということにはならないが、今この場合においては、その力が羨ましいと思った。そして、その力の限りに戦っているユウの姿。

どきん、と胸を打つ。

こんなことさえなければ、ユウは今でも頭の中で五歳の男の子のイメージのままだったのに。出会った頃のままでの、明るくて開けっぴろげで、天真爛漫で、裏表がなくて…

突然、先ほどの感触を思い出して唇に指を当てた。

いつまでもただの男の子だと思っていたのは、私だけ―？

やだ、どうしよう…

…とにかく冷静になろう。あれは、ただ、私を落ち着かせるためだけだった、と思っておこう。とにかく、とりあえず。

今そんな場合じゃないんだから。

頭を激しく振って、闇の動きに目を凝らす。

流れ込んでいた水がユウとナツネを遠く迂回して動き、カオルのいる壁沿いに川になった。

「！」

壁に手を当てたまま、後ずさるが、細くなったことで水流が速くなり始めている。

後ろに火の玉がないか気にしないと進めない。でも、確認しながら進む時間的余裕がない。

踵に何かが当たって躓く。

尻もちをついた目前に、黒い波が押し寄せた。間に合わない―

思わず目をつぶり、身を縮めた。波はドライアイスのように冷気を発散し、絶望・恐怖・悲壮といった負の感情を湧き上がらせる。

爪先を掠り、靴下が焦げる。体温を全て奪われるような、冷たさ。限界まで小さくなるが、希望も展望も体温とともに吸い取られた。

ああ、ごめん、もう駄目―

睨った瞼に思い切り力を入れ、冷たい波を覚悟した。

……

………？

予期していた最悪の事態は起こらず、恐々と目を開ける。黒い水は川となつて依然流れ続けているが、何故かカオルを避けて壁沿いを進み、最終的には彼女だけを排除した円形となつた。

どうして？

ふと身動きした膝下に、さっき躓いた物があることに気が付いた。見るからに重々しい、鈍く光る黒い柄。

「宵」だった。

「これ……」

不思議な思いで握り、膝に乗せる。水の淵に細波が起き、彼女との間隔を空けた。

疑問がおぼろげな確信へと変わり、すらりと刀を抜いて鞘をそつと置く。

また、さらさらと波が反応した。

柄を握つて、構えるように差し向けると、斬った訳でもないのに波がざつと割れる。

「やっぱり」

なんだか、嫌がつているみたい……

「カオル！大丈夫か？」

ナツネが大声で呼んだ。

ユウは既に息が上がつて、自分から攻撃することが難しくなつていた。かるうじて、自分とナツネに寄ってくる火の玉をかわして斬る。

ナツネは大分回復し、痺れるような右腕を揉んだ。彼女を心配しつつ、ユウと交代するタイミングを計る。

「私は大丈夫！ねえ、これ……」

カオルは刀を見せて、どういう現象なのか聞こうと思ったが叶わなかった。

黒い円形になったままぐるぐると流れていた川に、変化が起きたのだ。

一度、ピタリと止まった。小刻みに地鳴りがする。壁側に向かつてすり鉢状に盛り上がり、ゆっくりとではあるがどんどん高い壁となろうとしていた。

二人が、見えなくなる――

「ユウ！ ナツネ！」

返事が、聞こえなかった。

彼女は太刀をお守りのように身体に引きつけながら、心細さにわなわなとしやがんだ。

14・静かの海

壁が盛り上がった瞬間、ナツネは地鳴りの気配を察知して跳びさった。火の玉をくぐって二歩でユウの脇に滑り込み、太刀をもぎ取る。

彼はがくつと膝を落として座り込んだ。ぜいぜいと肩を揺らす。

「お前、ほんとにすげえな…」

息も絶え絶え。脇からはひどく出血していた。

「ユウのお陰だ。礼を言う」

黒い火の玉はナツネを力でねじ伏せるのをやめ、また分裂して数を増やしていた。ユウが太刀を振るうたびに消耗することにつけ込まれたのだ。

ナツネに代わった途端、ざつと引き下がり、緩慢に旋回した。彼はユウを守る範囲を測りつつ大胆に駆け回り、手当たり次第消していく。

すうつとナツネの胸の前に火の玉が躍り出た。

刀身を腹に抱え込むように前転してくぐる。

「わあっ」

ユウが背後で叫んだ。

がばつと振り向くと、彼が火の玉に前後から挟まれようとしている。

しまった――

ナツネは思い切り、狙い定めて「暁」を投げた。

太刀の後を追って、同時にナツネも走る。

「――」

刃がユウの目の前で火の玉に当たって勢いを殺され、霧と消える。とからんと落ちた。

ユウは即座に太刀を取り上げ、後ろに迫る最後の火の玉を自分で碎いた。

「…っお前なあゝ！なんか恨みでもあんのか！」

彼はナツネに突き返した。

「他意はない。それよりも、非常にまずい状況だ」

火の玉は残らず消えたが、翻弄される間に、川のように取り巻いていた闇が縦に成長していた。

湧きたつように黒い壁がせり上がり、轟音をたてた。

カオルが、見えない―壁の外だ。ユウがジャンプしてみても、壁の上には頭が出ない。

まずい。壁を隔てて完全に別れてしまう…いや。違う。状況的にまずいのはこちらだけで、カオルの方は大丈夫だってことか？

そうだとすると、外がどうなっているのかわからないことが不安にさせた。

ナツネが黒い壁に刀を刺すと一部分が消えて外が見えるが、一瞬で周囲の闇が孔を埋めてしまう。

もはや跨ぐことも、その孔から脱出することも不可能だった。

「カオル！聞こえるか？大丈夫か？」

彼女の耳に、壁の上側から迂回するようにユウの声が届いた。

「ユウ！二人とも無事？」

声を通らないので、思い切り怒鳴る。黒い壁は一切の音を吸い込んで遮断しているようだ。

「心配するな！」

ユウも怒鳴ったものの、何の対策もなかった。

「これが本体、か―」

「え？」

ナツネが腕をだらりと下ろしたまま、静かに呟く。

「この時代に来てからこつち、こんなに大掛かりな質量の闇は見たことがない。何かの引き金で、本体が引きずり出されたい。このままでは…」

カオルの部屋で生まれた、悲しい滴たち。涙のように壁に模様を描いていた。

合体し、止まることなく増殖したその流れを想う。

ユウは思い描く。

この闇を、俺が消せたらどんなにいいか。「暁」で見事に打ち払えたら。もしくは――

太陽のように輝く光を当てて、闇を残らず照らせたら。

でも、同時に理解もしていた。太陽の強い光はどこかに必ず影を落とし、光が強ければ強いほど、その影は暗いのだと。

それでも、だからこそ、明るい陽の光で満たしてやりたい。どんなに濃い闇を隠し持とうと、全てが闇よりは、絶対ましだから。

くそっだからなんだよ。俺に何ができるっていうんだ。

願いを想うと、想った先から吸い出され、代わりに無力感が注入される。

諦めるな、考える。絶対だって約束しただろう。

波を立てて対流しながら壁はそびえ立ち、カーブを描いて蓋をするように天井を形作った。

その瞬間、二人の前から一切の光と音が途絶えた。

襲いかかる恐怖。

胸が締め付けられる緊張感。ぴーんとした静けさで耳鳴りが止まらない。聞こえるのは、微かに息づく細波の気配と、お互いの呼吸音のみ。

一步、後ずさる。もし、今後ろに壁が迫っていたら。そう思うと、一步でも大移動だった。

ナツネと背中同士がぶつかってびくりとする。

同じ反応をしたということは、超人でもやっぱり怖いんだな。

このまま、吞まれるのか？

このまま、やられるのか？

外界から隔てられた空間は温度を下げ、汗が急激に冷えた。恐怖とあいまって、身震いをする。

ナツネが壁と思われる方向に太刀を振るった。

手応えは、ある。しかし壁の厚さまでもが成長し、光の入る孔は

開かなくなっていた。

気温以上に冷たい感情に支配されそうになり、叫びたいのを必死で抑えた。

声は通さないようだが、もし万が一叫び声がカオルに聞こえたら、どれだけ怯えさせることだろう。

決めた。

もし吞まれても、腕や脚をもぎ取られようとも、絶対叫んだりしない。口を結んだまま、消えてやる。

叫んでなんか、やらないからな！

15・嵐の大洋

「ユウ！ナツネ！返事して！」

完全に闇のドームの中に二人は消えていた。どんなに大声で呼んでも、もう返事が聞こえない。

どうしよう、どうしよう、どうしよう

ただただ、焦燥感ばかりが頭の中を駆け巡る。

これは一体何なのかと考えることで、必死で落ち着きを取り戻そうとした。

まだ、まだ諦めるのは早いから。パニックっている場合じゃない！その黒いドームは、形態も動作も異常だった。もちろん最初からどこを取っても異常としか言えない現象だが、それにしても今まで見たものとは比べ物にならない。

ナツネの言葉を思い出す。

「闇は負のエネルギーを喰らって増殖する。この先何があっても、怒りや悲しみに取り込まれるな」

…私が暴走したから？あの時、確かに黒い雨が降り出したんだ。

でも、まだ水溜りレベルで我に返ったのに、こんなに大きく――負のエネルギーを喰らって。

増殖…

闇が、増殖する。

カーテンのように垂れた闇も、火の玉の闇も、一度発生した後は斬られるたびに消えて小さくなった。そもそも一つ一つが、ある程度大きさが決まっていた。

分裂すれば小さくなり、合体すれば大きくなる。「暁」で斬られれば、無くなる。霧のように、ぱっと見た印象よりも儚く大人しく消えた。

こんな、単体で見上げるほどの、密度の濃い闇は初めて…
あまりの質量に今や重力を持ち始め、髪の毛やシャツがくいくい

と引つ張られていた。考えることに集中した感覚に、ピンとくるものがある。

それは、これが、闇の本体だからー？

ナツネは言っていた。隣の世界でもその隣でも、本体までは消し去ることができずに失敗したと。

これが地中に眠っていた、怪物…

うつん、怪物じゃない。これはただの、ただの暗いエネルギーの塊だ。意思を持ち、違う、持っているかのように動く、ただの無機物。

流れ出したきっかけは私だったとしても、これは、私が生み出した闇ではない。

だって私の悲しみはいつも、私自身を攻撃してきたんだもの。いつもいつも、私の中の暗闇は、陰湿に内に向かって棘を生やしていた。

こんなの、私の意志じゃない。私の、闇じゃない。

もし発端が私なら、もし私から出たあんたが少しでも混じっているのなら、どうか二人を。

無機物と思おうとした闇に、いつしか心で問いかけていた。

…あんたがどうしても引き下がないなら、私が闘う。その一部でも私の中から出たものなら、私を包んで呑めばいい。楽しくしてても努力してても、どうせいつだって私の中にいたんだから。

さつきみたいに、自ら消えたいなんて全然思っていない。でも、あんたのために、私のために二人が消えてしまったら、それはー

全身を食い破られて死ぬより、よっぽど痛いことだから。

怒りに身を打ち震わせながら、彼女はゆらりと立ち上がった。

それは確かに怒りだったが、二人を助けるというはつきりとした目標に到達するための、意志そのものだった。

手には「宵」。

本能的に、彼女はこれを握っていた。

あんたが二人を呑む気なら、私はどうなってもいい。世界とか、

他の人とか、もう関係ない。私は私が守りたいものを、守りたい手段で守る。失敗したら、あんたより大きな闇を生み出して吞み返してやる。

ナツネが言っていた「隣の世界の終焉」って、もしかして同じような状況だったのかもね。

指を咥えて見ているのも、闘って失敗するのも結局はどうせ同じこと。どちらにしてもすべてが終わる。

大局に変わりはないーでしょ？ナツネ。

燃え上がるような心で「宵」を上段に構える。闇はもう、何も反応しなかった。内包した獲物だけを見詰めているようだった。

ユウ…まだ、無事？もう一度、もう一度会いたいよー

毎日のように会っていたのに、遠い世界の人のように思える。

胸が、締め付けられた。

いるのが当たり前だった彼のことを、こんなに焦がれたことなど、一度もなかった。

先を上に向けた「宵」は、確かに「暁」よりも重く腕にのしかかった。安定させられず、一度下ろして脇差のように脇に構え直す。

時間がないのはわかっていたが、敢えて深呼吸をして息を整えた。

一、二、三――

覚悟を胸に、ためらわずに黒い壁に向かって突進した。

ガリガリガリ

破壊音とともに、手に激しい衝撃が伝わった。冷たい爆風が、カオルを吹き飛ばす。

「宵」は突き刺さり、黒い壁に残されたが、彼女は道場の壁面にしっかりと身体を打って落ちた。

「う……」

肺の衝撃に咳き込みつつ、まだ立ち上がった。強靱な意志が意識を留め、更に駆け寄って柄を握って奥まで差し込む。

太刀は重く、手応えも重く、全体重をかけた。

触れてはいけない黒い塊に接近し、ほつれた髪の毛が吸い寄せら

れ、音と臭いを立てて焼け焦げた。

刃の接する境目は激しく光り、白い火花が飛んでいる。

雷のように弾け続けるそれは瞬きながら周囲へと触手を伸ばし、勢いを弱めることなく広がり続け、ドームに光の蔦が絡まって包み込んだ。

モーターに鉄を巻き込んだような強い衝撃にたじろぎながら、カオルは柄を離さず、むしろ離すことができずにぶら下がるようにしがみついていた。

蔦は球を一周して完全に包むと、呼吸を合わせて光り輝いた。呼応するかのように、ドームが小さくなってゆく。苦しげに波うち、収縮して内側へと力を爆発させて爆音を轟かせた。

壁の外周はそのままに、足場だけが円を小さくし、最後には完全な球体へと変化した。

中心へ、中心へ。

「宵」の手応えがなくなった。

中心へと縮むことで自然と抜けていた。

ユウは、ナツネは――

球体は縮み続け、直径五十センチくらいのところで止まった。

火花が消え、辺りが静けさを取り戻した。沈黙だけが流れる道場に、カオルと小さな黒い球体だけが取り残された。

彼女の瞳が光り、涙が浮かぶ。

二人が無事なまま中に閉じ込められているとは思えなかったし、もはやそんなことを期待できる大きさではなかった。

失敗……だ。二人とも、消えてしまった。

もう、誰もいない。

球体はふわふわと浮いていたが、こちらを攻撃する力は残っていないようだった。

涙を流れるままに、彼女はもう一度、立ち上がった。

後始末は、私がつける。

真つ二つにするつもりで、今度は大上段に構えた。力を使い果た

しつつあり、後ろによるめくが、耐えて狙いを定める。

艇子の原理で、重さを利用して、振り抜く――

がきん、と金属音がして弾かれそうになるが、びりびりと痺れる腕を引き絞って体重をかける。

一瞬の抵抗の後に、ぐにやりと気味の悪い感触を残して、闇は二つに割れた。

硬い殻を破った卵のように中身がこぼれ、床でゼリー状の物質を残す。その後は盛り上がり、へこみ、黒い水溜りへと変化してしまった。

消えた。何もかも。成功だなんて、全然思えない。一番大切なものを失ってしまった。

黒い淵に面してへたり込み、中を覗く。自分の、情けない顔が映っていた。

せつかく結った髪はぐしゃぐしゃ。汗まみれで涙の跡が付き、ピンのシャツはユウの血を吸って汚れていた。

「馬鹿みたい」

何がでも、誰が、でもなかった。

無力感と寂寞とした想いが言わせた、意味すら持たない独り言。

この水溜りを霧として消したら、本当に終わるのだろう。赤子の手を捻るようなものだ。

終わって、それで？だから何？後に一体何が残る？

カオルは祈るように手を組んだ。

この闇よりも深い闇が、心の中で溢れ出し、とてもではないが、すぐに動くことができなかった。

完全に脱力し、生気の抜けた自分の顔を見ていた。

16・氷の海

ユウとナツネは浮遊していた。

轟音がして、内側への爆発が始まった時、二人はまだ背を合わせたまま、身動きができなかった。

どこにも逃げ場はない。

「ナツネ…どうする」

「諦めるな。とはいえ、何の案も出てこない。すまなかった」

「だあっ謝んな！最期みたいじゃないか！諦めるなって言っただばかりだろ？」

「本当に、どこまでも前向きな男だな」

ユウは軽く、肘鉄を喰らわせた。

「今、遠まわしに能天気だって言おうとしただろ」

「…わかったか？」

ナツネはふつと声なく笑った。

「お前たちに会えてよかった。どの世界でもない、この世界のお前たちに」

「だから、最期みたいなこと言うなつつの！」

言い終わらないうちに、がくんという衝撃が走った。

同時に床が抜けたように落ちる。

ユウの脇腹の血が凍り、シャツがパリパリと音を立てている。

俺がこれじゃあ、ナツネはもつと――

落下して離れそうな彼の腕を捕まえ、引き寄せる。

「おい、大丈夫か」

返事はなく、顔を探って叩いたが無反応だった。気を失ってしまったようだ。

左腕で脇を抱えて支えたが、彼の右手は空だった。

「あ、「暁」――」

思わず独り言を言って、何もない空間を探る。

どうか、傍にありますように。

一切の光がない。ただただ感覚だけを頼りにもがく。海の中を溺れるように浮力を感じ、必死で泳ぐ。

どこにも、刀が見つからない。

大事なんだ。ナツネが帰れなくなる。

口では大事なものがないなんて言っていたけど、刀だけは特別だったんだ。

刀フェチなんて聞いたことないけど、事情もよく知らないけど、激しく思い入れがあることだけはわかる。

頼むから、返してくれ。

泳げば泳ぐほどに寒さは増し、横に抱えるナツネの身体も冷えきっていた。

どんなに探しても、手を伸ばしても、「暁」が手に触れることはなかった。

諦めるな。どんなに吸い取られても、希望は失くさない。例え凍死しようとも、俺は諦めない！

どれだけ放心していただろうか。一分、二分…

闇はうずうずと波を立てていたが、大きく成長することも、移動することもなかった。

彼女の顔が映っては歪み、ただの肌色の煌めきになってからまた顔に戻る。

そしてまた歪んで輪郭を失くし、肌色へ―

その肌色の波の向こうに、何かが見えた。

黒い色は不透明で一切中が見えないが、確かにキラリと横切った。身乗り出して目を凝らす。また、魚影のように横切った。

……手、だ！

確信した刹那、彼女は迷わず上半身だけ飛び込んだ。

本来床であるべき面から先は、漆黒の異世界へとつながっていた。そして水に見えても闇は闇。決して水ではない。思わず息を止めて入ったが濡れる感覚はなく、呼吸は楽にできる。

ただ、ぞっとするような、その寒さ。

幼い頃父親に連れられてユウと入った、零下四十度を体感できる氷のアトラクションを思い出していた。

氷の上に置かれた、おどけたポーズのペンギン。肘について寝転がった白熊もいた。

気持ちが良いのを乗り越してすぐに寒くなり、でも出るのがもつたいなくて、三人で地団駄を踏んで笑いあった。

今でもはつきり、思い出すことができる。楽しくて、何故か哀しくてたまらない映像。

その記憶よりももっと冷たい空気。気温ではなく、心の中に直接冷たいものが流れてくる。負けそうになりながらも手でもがき、横切った手が触れないかと期待する。

しっかりと目は開いているが、そこは外から見たよりももっと暗

く、彼女は違うものを見ていた。
闇に今にも吞まれそうになる、重三の姿。頭に置かれた手の温もり。

じいちゃんのせいじゃないよ。私がひねくれて、変なところだけ勝手に大人になった振りをしていただけだよ。

どうしてすぐにそう言わなかったんだろう。

私に済まないという気持ちを残させたまま、独りで消えさせてしまった――

闇に吞まれる顔が変化し、喪服姿になった。父親の葬儀の後の、疲れきった顔。いつでもしゃきつとしている祖父が、その時だけはやけに老人の顔をしていた。

私、重荷だよ。早く大人になるから。迷惑、かけないから。
気を抜いて暮らそうと言われて楽になったが、同時にそう思っ
て勝手に自己否定して、自立した。

自立は正しいけど、卑屈になる必要なんてなかったのにね。ごめん。

次に現れたのは、父親が時折見せた寂しそうな笑顔。仏壇の母親の写真を見詰めて、心で何か話しかけているような。

ふと運動会の縞のレジャーシートが甦る。

ユウの母親がニコニコやって来て、豪華な手作りのおかずの詰まったお重を毎年渡してくれた。カオルと祖父は単純に喜んで、すぐに手を伸ばす。

父親は躊躇して礼を言い、家族だけになってから、自分の握った不恰好で大きなおにぎりを見て、申し訳なさそうに笑っていた。

「ごめんな、カオル。父さん下手くそで」

中学校に入って、体育祭に家族が来なくなったのでホッとしたのを、よく覚えている。

何の悪気もなく差し入れてくれるのはわかっていたが、できれば父親のそんな顔は見たくなかった。

更に、覚えていないはずの、父親の喪服姿。

自分の記憶よりもずっと若い姿。

まだ三十代で髪は黒々とし、正座したまま死んだような瞳で宙を見詰めていた。

知らない顔が次々と現れ、かわるがわる彼女の顔を覗いて、気の毒そうに目配せしあう。

これは、母親の葬儀なのか――

ふと、父親の横顔が誰かに似ている気がした。

しかし誰かと思う間もなく、次の映像へと目まぐるしく移っていく。

カオルの手を両側から握る、手。

よちよち歩いて無邪気に見上げると、右には父親が笑い、左には写真でしか記憶にない母親が、生き生きと笑っていた。

陽射しは柔らかく差し、サイレント映画のコマ落としのようだった。

断片的で、幸福で、何もかも満たされていて。握ると握り返される、温かい手。

ああ、これは――もしかすると、この満たされた画が一番へこむかも。

絶えることなく様々な映像が目の前を流れては消えていく。

これは、私の闇だ。怪物みたいな闇は、さつきもう消えたんだ。

これはきつと、私の悲しみの残骸。私がずっと一緒に生きてきて、嫌で嫌で堪らなくて、自己否定ばかりするようになった原因たち。

どうか、どうか、どうか。この闇に悪意がないのなら、どうか。

必死で掻き回す手に、一瞬だけ指先が触れるものがあつた。

あまりの冷たさで感覚がなくなりかけている手に、はつきりと伝わった。

突然のことに一度はそのまま素通りし、もう一度同じ場所に思い切り身を伸ばす。

空を、切った。

両手でまさぐっていた手を片手にし、左手で床を掴んで右手をそ

の分、もつと奥まで伸ばした。

… あった！

向こうの指先も同じ位置を探り、中指同士が引っ掛かったのを逃さず絡め、タイミングを合わせてしっかりと握り合った。

また、両親の手の温もりが甦る。

冷たい世界の中で、相手の手はその記憶と同じくらい温かくて満たされる感触だった。

泳ぐように浮遊している相手を、無我夢中で引っ張る。

この手は、ユウだ、

この温かい感触は、零下四十度の中で握り合った手、そのものだ。涙がこぼれる。

黒い空間に、透明の液体が浮かび上がった。

無重力同然の世界にぼつぼつと煌めく、光。

彼女は泣きながら、全力で腕を引いた。

17・神酒の海―2

カオルは異常な重さを感じながら引つ張り、とうとう自分の身体
のほとんどが完全に外に出た。

黒い水溜りが、小さくなっているようだ。

このまま消えてしまうの？焦りが浮かび、限界まで引く。

中途半端なこの状態で外界と断絶したらどうなるか、考えただけ
でもぞつとした。

「くっ」

自分の腕が出、握った手が現れた。渾身の力で引き続ける。

徐々に浮かんで見える、懐かしいキャラメル色の髪。

「だあああっ！」

外界に手が出たのを感じたのか手を離し、床に手を着いて一気に
ユウが出てきた。

そして彼女は、どうして右手しか触れなかったのか、異常に重か
ったのかを知って、嬉し涙がまた浮かんだ。

彼は左手に「暁」を握り、その腕でナツネを抱えていた。

ナツネは気を失っていた。カオルも手伝って、彼をまず引きずり
出す。

傷の出血もなく、冷え切っているが顔色はそんなに悪くない。シ
ョックでただ意識がないだけのようだ。

後からユウも身軽に乗り上げて転がり出た。

そのまま目を閉じて大の字になる。胸が浅く激しく上下に動いた。
「はあ…さ…寒かった…しかも、こいつ、すっげえ重いし。ずっと
支えて、泳ぎ続けて…泳ぐって形容も変だけど、でも泳いで…」

「暁」がなかなか見つからなくて…お前が見えた瞬間、一回だけ光
が差して―まるで…ナツネのこと待ってるみたいに、傍に浮かんで
た。でも、マジで、死ぬかと、思った…」

言っただけ言って笑って見せた。

涙で目が曇って、何も言えないカオル。ユウは彼女の頬に手を当て、また笑った。

「今日は、珍しく、よく泣くんだな… ひっどいカッコ…」

「…ひつく…ユウ、だって…」

しゃくりあげながら、彼女も笑う。

「手…引つ張る間はすごく温かったのに、今はすごく、冷たいね」
「だから、寒いって、言ってるだろ？それとも、あつためてくれる？」

頬から手を離し、抱擁を求めるように両手を差し出した。

「ばっばば馬鹿！何言ってるの！」

「へへ。それでこそ、カオルだな」

悪びれずによっこいしょ、と起き上がる。ナツネも暖かさに身動きした。

闇が、更に小さくなった。本当にこのまま消え去るようだ。

彼女はそれに気付いて、少し切なくなった。

ずっと付き纏われていた負の感情が、水溜りに全て持っていけたような感覚だった。

悲しい記憶は悲しい記憶。でも、そこに一緒に詰め込まれていた卑屈さや自己否定からは解放されていた。

付き纏われていたんじゃないかって、もしかしたら私自身が引き留めていただけだったのかな…

ごめんね。今までありがとう。悪いけど、全部持っていって—
大分軽くなった心で、名残惜しさすら感じて、心の中で別れを告げた。

ナツネが激しく咳き込んだ。

「大丈夫？」

彼は顔をしかめて目を開け、カオルとユウを交互に見、深いため息をついた。

「何があつたのか、説明、してくれないか—？」

「あの…「宵」で刺したの。闇が、これを嫌がっているように見え

たから。「暁」はないし、それしかできることなくて…失敗しても何もしくなくても、同じだと思ったから」

恐る恐る話す。彼の困惑した表情を見ていたら、なんだか怒られてしまう気がした。

「突拍子も無い…だが今まで考えたことのない、斬新な手段だ。そうか…そう、か…」

眉間を揉み解し、何かしきりに考えいてた。ゆっくりと重い身体を起こし、カオルを引き寄せて軽く抱き締めた。ぎよっとするユウ。

「ありがとう。カオル」

「んなな何してやがるっ」

ユウがいちゃもんを付けると、くすりと笑ってユウのことも引き寄せた。

「ユウも、ありがとう。意識ない中、お前に支えられるのを感じた。…本当に、助けられた」

「べつ別につれを言われるほどのことじゃ、ねえつての!」

顔を真っ赤にして照れまくり、半ば強引に離れたが、満更でもない顔だ。

「それより、ずっと「暁」で闘ってたのに「宵」で勝つって、一体どういうことなんだ?」

ナツネもまた、小さくなりゆく闇に想いを馳せていた。

「はつきりとは、わからない。」

実験では「宵」にそんな効果はなかった。だが「宵」の本質は、本物の闇の擬似空間だ。

本体を直接攻撃することで、同質の物が反発して喰らい合ったのかもしれない。

それに、闇に包まれた世界はそれ自体が相当な重力を持つ。

闇の中で「宵」による移動手段の闇が発生し、隣の…強大な闇に包まれた方の世界に流れていった可能性も高いと思う。時間をかけて分析しないと真実はわからないが…」

大きな球体に接近し、髪の毛が焦げたことを思い出す。

頭の上で一つにまとめていたので、触ってもほとんどわからない。前髪との分け目のほつれた部分が少し焦げただけで済んだようだ。三つ編みだったら、房ごと全部持っていかれていたことだろう。その点だけでも、この上ない偶然と幸運を感じた。

ナツネはまた少し考えて、言葉を継いだ。

「確かに言えることは、今回は状況的にすべてがラッキーだったということだ

隣の世界がブラックホールのように重力を持って吸い寄せられているという前提で、「宵」を置く機会があったからな。

何よりその幸運と、カオルの状況判断のもたらした結果だ。研究者というのは、得てして頭が固くなる…情けない」

自分を責めて、ナツネは肩を落としていた。

「いいんだよ。できることをやっただろ？お前は、守っただよ」「そう、だよ…」

フォローしつつも「守る」という言葉を聞いて、思わず重三を失った現実を思い知らされる。

私を守って、消えてしまった―

「私のせいで」という言葉は、もう使わない。じいちゃんだって喜ばないから。

カオルは思わず、彼を呑んだ闇の最後の姿を眺めた。

ユウもナツネも慮って、同じくしんみりと水溜りを見詰めた。

「ごぼ、ごぼ…」

黒い水溜りは直径を狭めて小さくなり、黒い泡を吹き出していた。

苦しんでいる、みたい。

底があるものなのかはわからないが、深部からの気泡が次々に湧き上がった。湧き上がるその泡が正に終焉を思わせたが、その泡の中から突然、人間の腕がによきつと生えた。

「！」

三人揃って、腰を抜かすほど驚いた。駆け寄るその間に、なんと重三がほうほうの体で身を上げた。

「じいちゃん！」

がくがくとする肘を支えて引き上げてやる。彼もまた、そのまま横になって身を休めた。

「ど…どうだ、見たか、わしの、根性…！」

にっこりと笑ってVサインを作って見せた。

余裕を見せたつもりなのだが、息は浅く痰が絡まり、瀕死の様相だった。

闇は、ようやく異物を吐き出した、という表情を見せて気泡を発するのを止め、すっかり消えてなくなった。

「じいちゃん！じいちゃん！…よ・よ…よかった…うええええん」
カオルはVサインをがっしりと掴んで冷たさにびっくりしたが、それでも安心して子供のように泣き出した。

ユウもまた眉を思い切り八の字にして涙を浮かべたが、ただ重三が帰ってきた安堵だけではなかった。彼女がまったく抑えることをせず、こんなに素直に大声で泣いているのを見て、心からほっとしたのだ。

一方ナツネは、達成感と共に疲れを感じていた。

深い息をつきながらもなんとか立ち上がり、「宵」と「暁」の鞘を拾い、道場の入り口に落ちている刀袋も拾った。

三人の傍に戻り、床に置かれた抜き身の太刀を鞘に収める。

カオルは歡喜の波が引いて、恥ずかしそうな顔をして泣き止んだ。重三はカオルに手を握られるままにして言った。

「ずっと、長い間旅をしていたようだ…真っ暗い中をもがいて、歩いたと思うと放り出され、投げられて…疲れた…」

目を閉じて、しばし黙る。

ユウが反対の手を取って脈をとった。

「体温も低いし、年齢を差し引いても脈が弱いような気がする。病院に連れて行った方がいいかもしれない」

「…そうだね、せつかく助かったのに身体壊させたくないし」

「勝手に、決めるな…なんてことない。少し寝れば、すぐ元に戻る…」

「もう。病院嫌いなんだから。たまには素直に言うこと聞いて」
まだぶつぶつと文句を言ったが、重三の抵抗は弱かった。自分でもかつてない疲労で弱りすぎたとわかっていた。

ナツネが様子を伺っていたが、ちゃんと正座をして声をかけた。
「その前に、少しいいか？挨拶だけさせてくれ」

膝の前に二本の太刀を綺麗に並べ、手を着いた。

改まった様子に別れを感じ、二人は黙り込んだ。

重三も、片目を開いて横目に見る。

「辛い思いをさせ、身体を痛めさせ、本当に申し訳なかった。私独りではきつと、何もできなかっただろう。…改めて心から礼を言う。ありがとう」

言葉は簡潔に、深々と礼をして上げた顔は、透明な感情を思わせる笑みを浮かべていた。

重三が、半身を無理に起こしてナツネをじっと見詰めた。

「あんた…名がナツネか。姓は、なんという」

「…私に、姓はありません」

「そう、か…」

思わせぶりに言葉を濁したが、ナツネはそれ以上の返答をしなかった。代わりにもう一度、今度は重三に向かって礼をし、すつと太

刀を持って立ち上がった。

カオルも思わず立ち上がり、彼の服の裾を握った。

「もう、帰るの？ 帰らなくても、いいのに。駄目？ 刀が壊れて帰れないことにしちゃえば」

彼は名残惜しそうにその手を取った。

「長居をするだけ辛くなる。大事な物は、自分の力で守りきつただろう？」

この世界に、私の居場所はない。私は堂々と、成果を持って自分の世界へ帰ることができる」

「でも…」

大事な物はないんでしょう？ と言いたくなり、口を結んだ。

ナツネは子供を見るような優しい瞳で言い聞かせた。

「遠く離れて逢いたい時は、月が鏡になればよい…」

古い、この時代よりももっと古い俗謡だ」

彼女は想いを込めて手を握り、伝わるものを受け取って、離れた。ありがとう。私、ナツネが来なかったら、一生変われなかったかもしれない。

…ナツネ、あなたには大事な物、ある？」

彼は俯き、声なく笑みを浮かべた。

星空のような黒い瞳を生き生きと輝かせ、彼女の頭を撫でた。横髪を耳にかけてやり、ユウの方にも目を向けた。

「ああ、ある。何より大事な物を、もらった」

ナツネは後ろに八歩下がり、太刀を左脇に下げた。

「暁」を抜く。

ユウも立ち上がって大声をあげた。

「俺も、もらったから！」

胸の中の大事な物を握るように拳を当て、目を大きく見開いた。

「一生忘れないからな！」

ナツネは黙って頷き、太刀を片手で大上段に構えた。

何かを斬る動作ではなく、頭上で円を二度描いた。

刃先から、光が迸る。

光は螺旋を描いて床まで消えず、二重の円が現れる。円の間に、線から芽吹くように青白い文字が現れ、完了すると点滅し始めた。

その間に彼は「暁」を収め、「宵」に持ち替えた。

体重をかけ、座りざまに一気に床を貫く。床の傷から黒い霧が湧き上がり、円の内側に満たされる。

片膝を着いた姿のまま、ずっと闇の中に腰まで沈み込んだ。最後に道場全体を目に焼きつけ、立ち尽くすカオルとユウにもう一度頷いた。

手を振ろうとしたのだろうか。

怪我をした左腕を上げる途中で、彼は完全に姿を消した。

再び静かになった耳に、外の穏やかな蝉の声が届いた。

18・南の海

「…行つた…な」

「うん…」

「考えるのは後にして、とにかく病院行くか」

切ない想いに駆られたが、惜別の情に浸るのは、今の二人には似つかわしくなかった。

カオルは彼に笑いかけ、重三の様子を見た。事情も何も知らされぬまま、放心した様子で光景に圧倒されていた彼は、突然はつとした。

「ゆつ床に、刀を差したな！おのれ…カオル！床を見ろ！」

「はいはい」

大丈夫だと確信しつつ、一応見に行く。

重三にとつては大きな問題なのだ。適当にあしらつては、また興奮させてしまう。

「大丈夫。傷一つないよ」

「そうか…ああ壁に穴が開いておる！どういうことだ！」

思わずびくりとするユウ。後先考えずに蹴り付けた、自分の足を恨めしく思う。

「ど・どうしたんだろうな…刀でも、ぶつけたのかもしれないな…

あいつが」

むむうと唸る重三。

床に穴が開くことに比べればよっぽどでしたが、直さずに放っておく訳にもいかない。子供たちが怪我するようなことがあつてはならないからだ。

「稽古は…当分休みだ。壁も身体もすっかり直して、初心に戻って出直した」

老骨にやる気がむくむくと湧いた。しかし、実際には立ち上がるのもやっとだった。

「表にタクシー呼ぶから、そのまま寝てて。ユウも私も、この格好で外出たら驚かれちゃう」

廊下の電話でタクシー会社に電話し、自室へと入った。

部屋は当然ながら静かだった。

黒い、雨…

濃密な異空間を思い出し、身震いした。まだどこかに蠢く黒い物体が潜んで、こちらを見ているかのように錯覚する。

着替えのためにカーテンを閉めようとした目に、物干しに下がる黒いズボンが映った。

「あ…置いていっちゃった」

間抜けに独り言し、何故か急におかしくなって笑った。

ウツカリするタイプでもないけど。もしかしたら「冥途の土産」に、わざと持っていったのかもね。

勢いよく脱いだＴシャツを眺めて一瞬考え、そのままゴミ箱に捨てる。乾いた血の跡は簡単には落ちない。

明日、買い物に行こう。アキとノンちゃん、空いてるかな。お洒落な友達に付き合ってもらって、ラフじゃない女の子服とか買ってみよう…

やっと日常の感覚が戻ってきて、一人でにまにまとした。

クローゼットを開けた時、電話が鳴った。ユウの足音とボソボソ応答する声が聞こえる。

そのまま電話は任せ、別のＴシャツを出して着た。

手早く髪を梳かし、簡単に一つにまとめて乱れた髪を誤魔化す。

最後に保険証や財布を確認してバッグに放り込んで肩にかけた。

頭の中でこれからの段取りを考えながら、道場に戻る。

ユウが携帯電話で喋っていた。上下ともに着替えていたが、グレーのシャツにはまた血が滲んで真っ赤になっていた。

「だから、真田のじいちゃんが体調崩したんだって。あと、昨日の件がらみで、俺もちよつと怪我して…保険書使うとお袋にバレるか

ら、レン兄に、仕事の合間でいいからちょっと診てほしいんだ。

わかってるよ。そう、全部片付いたから。じゃ、とりあえずじいちゃんだけ外来に通す」

携帯を切ってポケットに突っ込む。なんだか高揚しているようだ。「持つべきものは、医者の兄ってね。本当は借りを作るのは非常にまずいんだけど。とりあえず、うまいこと早めに診てもらえるように言っておいた」

「あ、ずる」

「ずるで結構。いい報告があるんだけど、聞くのやめる？」

「さっきの電話？」

ユウはニヤリと笑って、重三の横に座った。

眠っているかのように休息を取っていたが、目を閉じたまま、

「タクシーか？」

と聞いた。

「それはまだ……でもサトさん、意識が戻ったって」

重三は目をカッと見開いてユウを見た。慌てて起き上がるようにして押し留められる。

「ほ・本当か！」

「ほんとだつて。もちろん動けるようになるのは当分先だけど、意識もはつきりしてて手術は大成功だったって。娘さんが、できれば今後もずっといいお友達でいてください、ってさ。伝言」

「は、ははは……」

重三は今度は慎重に身体を起こしたが、安堵感で前のめりに倒れそうになった。

「おっと、無理すんなって」

ユウが支えてまた横にさせようとしたが、ちょうどタクシーが止まる音がした。

「よかったね。診察の後、休んで動けたら会いに行けばいいじゃない」

「そ、そうか……レンは慶心だったか」

「それを見越して、無理矢理予約割り込ませてもらったに決まってるんだろ。立てる？」

うまく立てない様子を見かねて、ユウが強引に背負った。

「こら！自分で歩けるわい！恥ずかしいマネはよせ！」

首に掴まりながらもまだ毒づく。

「タクシーまでなんだから、恥ずかしいとか関係ないだろ！まったく、こんだけ元気なら心配ねえな」

普段通りに口喧嘩を始めながら、すすいといと歩いてタクシーに押し込んだ。

じいちゃんも年、だな。随分軽いや。あんなにしごかれた鬼の師匠をよもや背負うなんて、思ってもみなかった。

そんな想いは億尾にも出さず、重三の隣に腰を沈める。

中年の運転手がぎよっとして、ユウの腹を見た。

「あ、すみません。もう汚すほどじゃないと思うんで」

「それはいいですけど、大丈夫ですか？」

「これから病院行きますから」

「は、はあ……」

カオルも入り口の鍵を閉めて乗り込む。

「慶心医大、お願いします」

「あ、ちよっと待って……先に駅ビルに寄ってください」

ユウが訂正してエンジンがかかり、出発する。

他者が存在することによる、妙な沈黙。ユウがそれに堪りかね、小声で話し始めた。

「頼みがあるんだけど、駅ビル着いたら、何でもいいから濃い色のシャツ買ってきてくれない？予備の着替え、みんな白系で目立つから。」

家に帰ろうか迷ったんだけど、もしお袋でも家にいたら卒倒するからさ」

「OK。いくら病院とはいえ、その格好はあんまりだもんね」

「……カオル」

重三が、わざと渋い顔を作って言った。

「何？」

「その、は、は・な…のことだが」

「え？」

「昨日言っていた…花、はもう予約を取り消したのか」

「…あつ！忘れてた」

例によつて、重三はごほんごほんと照れ隠しの咳払いをした。

「予約したのに、取りに行かない訳にはいかん、な…ついでに、受け取ってこい。立て替えられるか？」

「うん、どっちにしろＡＴＭ寄るから。そつか、なるほどね。自分も病人の癖に気が利いてる」

「な・なんだ！何が言いたい！お前が電話を忘れるから、仕方なくだな」

ユウも脇でニヤニヤする。

「意識も戻つてるんだし、手ぶらじゃ、な。じいちゃん、男を上げたね」

「こんの若造が！くつ…」

勝手に興奮して息が上がり、背もたれに寄りかかった。

「あまりか弱い老人をいじめるな」

「かーっ！こんな時だけか弱い老人かよっ…ま、ちょっとしよぼくれてるくらいの方が扱い易くていいや」

重三は何事かに想いを馳せ、カオルに言った。

「あの、ナツネという青年だが。道場での佇まいが、誰かに似ていると思った…わしの、息子に、な」

カオルはどきんと胸が鳴った。彼女もまた、思い当たった。そうだ。ナツネに似ていたんだ。

記憶の中で見た母親の葬儀の、若い横顔。髪型も違つし、顔もナツネのほうが全然整っているが、雰囲気や座った姿勢が。

重三にそれを伝えようとしたが、目を閉じて眠ったようだった。車はすぐに駅ビルに着き、カオルだけで用事を手早く済ませる。

目まぐるしい展開に気が張っていたが、食品売り場を通り抜ける時に、自分がひどく空腹なことに気が付いた。

売り場の時計を見ると、午後二時を過ぎたところだった。

え…昼過ぎたのはわかっていたけど、まだこんな時間だったんだ。体感時間だけで言うなら、もう日が暮れてもおかしくないと思えるほどだった。

黒い霧や水に翻弄され、走り回り、激しく泣いて怒って、笑って――時間が過ぎるのがのろく感じるのは、当たり前なのかもしれない。時計の針から連想して、突然ノンの言葉を思い出した。

逆位置の運命の輪が出た。アクシデントがあるかもしれない。

天城くんはハングマン―吊るされた男の正位置。避けることのできない通過儀礼と、忍耐や奉仕がカードの意味だから。

怖っ…

ノンちゃん、冴えすぎだよ。って、今更ぞつとしても遅いんだけど。

ぞわぞわした感覚をひきずったまま、お茶やおにぎりなども買い込んだ。花を受け取り、カジュアルな洋服売り場へと急ぐ。

忙しなく、すっかり日常に戻った気分だった。

「過労・暑気当たり・軽い脱水症状、そんなところですね。大分弱っているようだし、帰したら休まないタイプだから、一日二日入院して様子見ましょう」

レンが聴診器を外して言った。初診で保険証を出して、すぐ通されての診察である。

「そうだよ、そうしろよ。循環器科の病室に入り浸れるじゃん」

「なっなんと！…そうかそんな手が…」

「あんまり訪ねて、サトさん疲れさせたら駄目だよ。ガツガツした男は嫌われるからね」

カオルが注意すると、重三はむむつと黙ってしまった。

「内科と循環器科なら同じ病棟の階違いだし、疲れない範囲でお友達を訪ねることは構いませんよ。次、ユウはどうなっているんだ？」

「あ、俺？これなんだけど」

ユウがぱらりとシャツをめくると、レンは目を疑った。出血は止まっているが、傷は浅いながらも長く、生々しく開いていた。

「確かにこれは親には言えないな…あの男と同じ傷だ。一体どうしたらこんな風になる」

ユウは面倒くさそうにTシャツを脱ぎ、荷物置きのカゴに投げた。

横に立っていたカオルは、どきりと後ろに下がって見ないように遠慮していた。

「説明しようと思うと、すっごい長くなる。死ぬような傷じゃないんだから、いいだろ」

「心配する兄に向ってその言葉か？昨日も言ったが、死ぬほどの怪我じゃなくても、感染症を起こしたら死ぬんだ」

傷の様子を診ながら、ふと怪訝な顔でカオルを見る。

「まさかとは思うけど…カオルちゃん、いくらこいつが付き纏うからって、刃傷沙汰は…」

「えっ…ぎゃー！私じゃない！付き纏われるくらいで、こんなことしません！」

慌ててレンに向かって首をぶんぶん振る。

「ははは、冗談だって。相変わらずリアクションが可愛いね。ま、ちよつと縫って抗生剤をちゃんと飲めばなんてことない。とにかくそっちに横になれ」

看護師を呼んで、素早く治療する。

「カオルちゃんも怪我しているね。一応消毒してあげて」

同時進行で看護師に指示し、てきぱきと治療が進んだ。

ユウは最初の消毒がひどく染みて、口を一文字に結んで我慢していた。

一通り治療が済んでガーゼを当てられると、まだ腑に落ちない表情でシャツを着る。

…だーれも、付き纏うって言葉の否定を、してくれない…

いいんだいいんだ。俺なんか。

内心いじけてはいたが、レンの前で追求すると必ず藪蛇になってしまう。黙っておくのが得策だ。

サトさんのこともあったし、今回は俺が泣くしかないんだよな。

「さあさあ、この後も患者が一杯なんだ。真田さんは念のため、車椅子でそのまま病室へ。カオルちゃんは入院手続きをして、必要な物の説明を受けて取りに帰る。」

ユウは…この処方箋で、外の薬局で薬を買って飲むこと。ちゃんと飲み切るまでサボるなよ。この後話があるから少し残れ」

さらさらつと処方箋を作って寄越し、手をひらひらと振る。

「レンさん、ありがとう」

カオルがお礼を言うのと、

「おじいさんは正当な患者さん。カオルちゃんは治療じゃなくてただの担当だから、お礼はいらないよ」

と笑顔で返してユウを横目で見ると、にこやかな形のまま、眼光だけが鋭く光っていた。

「…レン兄、さんきゅな」

「一個貸し、だな」

心から楽しそうにくっくつと笑う、ユウには悪魔にしか見えない横顔。

カオルは重三の車椅子を押して、別の看護師と共に病室へと引き上げた。

残されたユウの前で、レンは新人らしい女性の看護師にニコリと最高の笑顔を向けた。

「今の患者さんの付き添いで来た、僕の可愛い弟。ついでで個人的にちよつと診てやってただけ…だから、保険証もないしカルテも作らないんだ。飽くまで個人的なことなんだけど、内密にしてくれないかな？二人の秘密ってことで」

口到人差し指を当てて小声で囁く。若い看護師は真っ赤になって頷き、促されるまま席を外した。

「レン兄…またそういう手を…」

ユウが白い眼で睨む。

「世渡りのための知恵じゃないか。大体、誰のためだと思ってる？お陰でまた一人、看護師を落とす破目になったじゃないか」

ああ、そつか。だから必要もないのにわざと看護師を呼んで、貸しを高く見積もった訳か。マジ、これは高くつくな…このドS兄貴。

「…で、患者がたくさんで商売繁盛なんだろ？何の用？」

「予想以上に早く片付いたようだが、あれ、使ったのか？」

「使う訳ないだろ！あんな恐ろしい物！」

「僕のモノはユウのモノだからね。大事な時のために取っておきなさい。その代り、その辺に適当に捨てたりしちや駄目だよ？大変なことになる」

「いらない！か、か、返す！」

ポケットを探ったが、着替えたことを思い出してぎよつとする。

「まさか…失くしたのか？」

眼光が更に鋭くなった。

「ある！あるって！じゃ、俺、急ぐから！」

着替えた後、買った服と交換で血濡れの服を入れた紙袋。うつかり、車椅子の取っ手に掛けたまま力オルに持って行かれてしまった。病院の中にも関わらず、慌てて飛び出して追ったのは、言うまでもない。

レンは次の患者のカルテを用意しながら、くすくすと笑っていた。
「全く、実に可愛いね」

一度荷物を取ってまた病院にとんぼ返りして届けた時、重三はもう大分回復していた。

花束の袋がない、ということは、どうやら無事にサトさんに渡したようだ。

彼がどんな顔で花を渡したのかと思うと、こちらの方が恥ずかしくて、聞くのはやめようと目配せして帰ってきた。

間もなく夕暮れが迫る。夏の陽が傾く。どこかの家から夕食を作る匂いがする。

「あー、腹、減った。よく考えたら、八時からストリートなんだよな、俺」

「…そつか！なんか、その話したのが昨日だなんて信じられない」

「俺も。でもやっぱり今日だし、意外と時間ねえし…な、支度し直してチャリ出すから、六時頃迎えに行つていい？どつかで食べよ」

「いいけど、食べるだけなら早すぎない？」

「いいからいいから」

カオルは首を傾げたが、その場で別れた。とにかくシャワーを浴びたかった。

誰もいない自宅に入ると、薄暗くて気味が悪い気がした。

退院するまで、独り。

…どうせ一泊か二泊のこと。気楽だよ、気楽！

心細さに気合を入れて、熱いシャワーを浴びた。誰もいないのいいことに、タオルを巻いたまま、しんとした自室へと戻る。

五時四十分。思ったより時間が迫り、慌てながらクローゼットと相談し始めた。

今度は…スカートでも、いいのかな。もう、何かに襲われるなんて考えなくて大丈夫だから。

アキに勧められて背伸びして買ったが、着慣れなくてずっとしま

つていたさらさらのロングスカートを当ててみる。

裾にレースの飾りが付いたパフスリーブのブラウスと合わせる。去年買ったのだが、なんだか気恥ずかしくて、あまり着ていなかったのを発見した。

うん、三つ編みじゃなければ着れそうじゃない？

さつとドライバーをかけてアップに留め、一本だけ、ノンから誕生日にもらったリップグロスを付けてみる。

…なんだ、私。怖くて今まで気付かないようにしていたけど、やっぱり女の子、なんだ。

一つ一つ工夫するたび、勝手に楽しくなってしまう。

誰かに「ユウに見せるから」ということではなく、自分の変化を純粹に楽しんでいた。

終わるか終わらないかのうちに、表で自転車の止まる音がする。

少し恥ずかったが、もう一度鏡で全体をチェックしてから外へ出た。「支度できてた？ 急ぎすぎたかな」

自転車に跨り、これから使うギターを後ろに斜めがけにしている。

「おかしく、ない？」

「おつ、いいじゃん、それ。そんなの持ってたなら、前からどんな着ればよかったのに」

彼の完全にオープンな褒め方に安心する。自転車の後ろに横座りし、ユウは漕ぎ出した。

お腹に掴まったらさぞかし痛いだろうと、荷台の端を握る。

「左の方なら平気だから、掴まれよ。危ない」

ちよつと照れた口調で注意される。右手はそのままに、左手をそつと回す。ギターが邪魔だったが背中に接近し、シャンプーの匂いがした。

「…お風呂入ったの？ 傷大丈夫？」

「ナツネと同じようにしたから大丈夫。濡れなかったけど、はがすときに、これは無茶したと思った。ビニールとガーゼのお陰で当然傷は平気だけど、周りが真っ赤になっちゃった。」

…何も言わなかったけど、あいつもそうだったかもな」

はは、と悪びれずに笑いながら体重をかけて漕ぐ。

「駅前じゃないの？」

駅とは別方向に進んでいることに気付いた。

「ああ、寄り道しよう」

傷があるにも関わらず、長い坂を一気に上る。この先は…確か、何もない高台で道が終わっている筈。子供の頃によく自転車で冒険して、誰が早く着けるか競争した場所だ。

ぐんぐんと上るのだが段々苦しくなってスピードが落ちた。

自転車は力尽きて止まり、二人とも降りた。高台はもうすぐだった。

20・晴れの海

夕闇が迫っていた。

ユウは自転車を停めてギターをベンチに置き、手摺りにもたれて街を見下ろした。

「ここなら月が綺麗に見えると思って」

カオルもつられて横に並び、夕焼けのオレンジから紫へのグラデーションの空を眺めた。

東の空に、満月が顔を出して輝いていた。

ナツネを思い出す。

月は、いい。

繰り返して、満足そうに、寂しそうに眺めていた。

ユウもまた、彼を思い出していた。竜巻のように現われ、引く掻き回すだけ引く掻き回して、また勝手に帰っていった。

奴が現われる前がものすごく過去に感じる。でも同時に、彼が消えて日常に戻った途端、幻だったかのように錯覚しかけてしまう。

「あいつのこと、一生、忘れないようにしような」

「そうだね」

ぼつりぼつりと点り始めた街の灯りを見ながら、迷いなく返事をした。しかしユウは、手摺りの腕に顔を埋め、複雑な想いで彼女の横顔を見ていた。

言おうか、言うまいか。

視線に気付いたカオルは一瞬驚いたが、また月に目を戻す。

この距離で直視することが、少し怖かった。

「あのさ、でも、できることなら忘れて欲しいことも、あるんだ」
何の話か予想できないが、きつとこちらが本題なのだと悟った。

「何？」

鼓動がゆつくりと、喉元で脈打ち始めた。鉛が詰まったように、声を出しにくくなる。

「ナツネのこと、好きだろ。それ、早く忘れるよ」

ユウは迷いながら言い切った。思わずぞんざいな調子になってしまったが、とにかく言い切った。

カオルはカオルで、返事に困っている。

深い気持ちは残っているけど、ちよつと違うし、なんだろう、この気持ち。

黙った彼女の気持ちを推し量ることができず、彼はちよつと慌てた。

「だってほら、お前いきなり変わったし、昨日の夜、何かあったんだろ？」

最初から帰るつもりで、お前の気持ち掻き乱して、本当にあつさり帰っちまうなんて、なんか無責任っていうか。もう、一生会えない癖に――」

カオルは、そつとユウの瞳を盗み見、また月に視線を戻した。ゆつくりと口を開く。

「何かは、あったよ。私のこと、根本から全部、変えてくれるような。でも、ユウが思うような、そういう気持ちじゃない」

「何があつたか、教えてくれる？」

拗ねた口調について秘密を明かしたくなるが、やはり話すべきではないと思い直す。

自分が嫌いだった、泣けなかった。笑えなかった。

そんな話、ユウにはできない。彼の優しい気持ちを無用に哀しませ、同情を引くのは今でもやっぱり嫌だった。

「詳しい経緯はトップシークレットだもん。一生、言わないよ。」

でも、私に言ったの。人間はいつか死ぬって。だからそれまで生き生きと、感動して生きなきゃいけないって。自由に、いろいろ感じて生きろって。

それですごく、楽になった。そうしてみようって思った。要約すると、そんな感じ」

ユウはつまらなさそうにふうん、と返事をした。

そんなことなら、別の方向からいつでもアプローチしてきたつもりだったんだけどな。

時間なんて、いくらでもある。確かに、俺はそう思っていた。いつか死ぬなんてこと、考えもしなかった。

時間をかければ、いつか都合よく悟ってくれるだろうなんて、馬鹿さ加減にもほどがある。

そんなヘタレだから、カオルの心を動かせなかったんだ。一瞬で見抜いて諭してしまうなんて、やっぱりあいつはある意味特別だったんだ。その点では、完敗。

「確かに大人っぽい人が好みだし、顔も綺麗だし、変なテンポの会話もちよっと可愛いつて思ったけど……ううん、本当はちよっと、ときめいた。でもあの人は、私のことを変えようとしてくれて、私も変わろうと努力しているところで。

ごめん。とにかくあまりに忙しい一日だったから、頭の中ごちゃごちゃ。今この瞬間、やっと気持ちを整理している途中な訳……ええと、とにかく、恋に発展するにはちよっと違うかな、って。恋するっていうより、慕う気持ちが強くなったっていうか。

タクシーでじいちゃんが言ったこと、覚えてる？私も、聞くより前に同じこと感じてたの。闇の中で、見たことのない若いお父さんを見て。

誰かに似ていると思ったら、ナツネに似てたんだって」

ユウが手摺りを放し、真っ直ぐに立った。妙な気合も力も抜け、フラットな心で彼女を見ることができている。それくらい、彼女のナツネに対する感情が腑に落ちた。

人見知りする彼女の心に不自然なほどずっと入り込めたのは、父親の面影があったから。

ふわりとまた、葬儀で涙一つ浮かべることのなかった少女が思い出された。仲は良かったし漠然と好意は感じていたが、あれを見た時、自分の心は決まったのだ。

この娘を、なんとかしたい。放っておけない。俺が笑わせて、泣

かせてやりたい。

それは多分、この顔を見た自分でないと思し遂げられない、と。
あの娘は、もういない。

ここにいるのは思うとおりには笑って泣いていいと知ることができた、魅力的な女の子だ。

そうさせたのは結局自分ではなかったが、他でもない父親本人の影を感じさせる男。

畜生。それなら勝てなくても仕方ない。

悔しいながらも、ほっとしていた。

「はあ。言いながら、なんとなくすつきりしてきた。

…ちゃんと言葉にして整理しないとすつきりしないなんて、駄目だよ」

呆れるように肩をすくめてこちらを見た顔に、ユウはどきんと切なくなつた。緊張が解けて、ただの幼馴染みとして笑いかける気の抜けた表情も、引き締まっているが剣道でしっかりしている身体も、一瞬線が細くなつたように見える。

駄目だ、そんな無防備な顔。泣きなくなるほど、愛しくなるじゃないか。

衝動的に、力強く抱き締めた。カオルは驚いて身じろぎもできず、そのまま受け入れた。

苦しくて、心地いい―また、温もりが流れ込んでくるように感じられた。

力を緩めて彼は頭一つ分屈み、密着したまま頬を寄せ、唇を探り当てた。

ほんのり、りんこの匂い。

すぐに唇を解放し、わずかな距離で、彼女の瞳を見詰めた。

カオルは何度も瞬きし、唇と瞳を交互に見詰めた。瞳を見ることが、強い視線で射抜かれそうになる。

一瞬にして、元の「幼馴染み」には戻れなくなってしまった。けれど、不思議と嫌ではない。嫌でないどころか望んでいたというこ

とに、ようやく気付いていた。

「…強引。順序が違う」

ささやかな抵抗が、風に消える囁きにしかなかった。ユウもまた、小さく囁いた。はつきり発声する意味がなかった。

彼女の耳にだけ、届けばいい。

「…ごめん。ほんと馬鹿だよな、俺。きちんと言わなきゃ、伝わらないよな。カオル、好きだ。大好き」

もう一度、今度はいつでも逃げられるくらい優しく腕で包まれた。嬉しくて、満たされて、でも、なんだか怖い…

―誰にでも怖いものはある

頭の中で声が響く。そう言ったのは、確かにナツネだった。しかしどこかで、父親の声に変換している自分がいた。

氷のアトラクションの後、お化け屋敷の前で父親は手を広げて言った。

―どうしたカオル。何も怖くないよ。父さんがいるから。もし怖かったら、それを楽しむのが醍醐味なんだぞ？

…この怖さは、自己否定じゃない。怖いなんて、本当はみんな一緒なんだ。誰もが平気そうな顔をしていると思ったけど、きっとこの怖さも楽しんでいるんだって、今なら思える。

だから私も、この気持ちを伝えたい。

ユウの背に自分から手を回した。傷に障らないように、そっと。

「私も好き…」

言ってしまった後に、動悸で胸が潰れそうになった。でも、その動悸は自分だけのものでなく、耳に伝わるユウの鼓動でもある。

肩に手を置かれて、少し身を離す。

ユウは指を絡ませて手を握り、もう一方の手で愛しそうに頬を撫でた。カオルは照れて笑い、上を向いて目を閉じた。

今度こそ自分から望んでキスを受け、軽く押されて後ずさり、手摺りに背が付いた。

握った手が離され、もどかしそうに腕を上る。彼の舌が衝動的に

唇をなぞり、ほんの僅かに動揺した。きゅっと、シャツを掴む。

動揺は正確に彼に伝わって動きを止めた。

俺が怖い？

テレパシーさながらに、瞳だけではつきりと心に伝わった。

怖く、ないよ。

心で返し、ユウの短い横髪を握り、頭の後ろまで撫でた。

唇を離してまた抱擁し、彼は決意を持って切り出した。

「俺さ。約束、破りたくないんだ」

「約束？」

「独りに、しないって」

カオルはきよんとした。

「…いつ？」

「したの！お前は覚えてないかもしれないけど、したの！」

頬を柔らかくつねって、言い聞かせる。気の抜けた顔が、子供み
たいに可愛かった。

ぷっ変顔。やっぱり相当パニックでたんだな、あの時。こっちも
相当、パニックでたけどさ。

「わかった、それで？」

彼の意図がまったく読めずに聞き返す。

「今夜、独りにさせたくない。お前が独りで心細くなるの、俺わか
ってるから。」

だから。今日、泊まっていい？」

……

一瞬の間が空いて、二人で真っ赤になる。

「馬鹿！変態！展開が早すぎる！」

腕を振り解いてそっぽを向く。胸が早鐘のように鳴っていた。

「だっ！だから！お前が嫌なら、何にもしないって！」

「…嫌」

やばい。あわよくばという気持ちは否定しないが、完全にガツガ
ツした男だと思われる！お前が嫌なら、ってのも、厳密に言うと

NGだったか？絶対何もしない、の方が紳士的か？…いや、俺は嘘は言わん！絶対ってのは嘘だよな、健康な男子として。

カオルは余所見をして気を落ち着けようとしていたが、我に返った顔でユウに向き直った。

「いいこと、聞きたい？」

突然の話題変換にずっこけたが、嫌われた様子でもないので安堵した。

「何、急に」

「すごい面白いもの、見つけた」

彼女が指差す後方に、ベンチと自転車と、高いポールの時計があった。

ベンチ、自転車、時計…時計？

七時四十分。

七時四十分？

「のわー！なんだこの時間！時計狂ってるだろ！」

連絡なしにこの時間で、相方から電話が来ない筈がない。慌てふためいて、携帯を取り

落としそうになりながら開く。

「まずい。病院で電源切ったつきりだった。ぎりぎり間に合うかも！急ごう！」

結局、空きつ腹かよ。つつか、うまくはぐらかされたな。嫌われるよりマシか。

ギターを頭にかけてくるりと後ろにし、自転車に跨る。カオルが乗り込まないので不思議に思った時、彼女が斜め後ろに立った。

彼のシャツにつかまって、一瞬寄り添う。ちょうど同じ高さになった頭を寄せて、

「…じゃ、ないよ」

と、ぶつきら棒に言った。

「え？何？」

彼が耳を寄せると、目を合わせないまま答えた。

「さっきの質問の、答えの続き。…じゃ、ないよって」
「??？」

じゃ、ないよ？

さっきの質問。

泊まっていい？嫌なら、何もしないって！の、返事？

嫌…じゃ、ないよってこと？

回路が繋がって、がっとな振り向いて顔を見た。彼女は赤面して、慌てて手を振る。

「ちよ、待つ！あのね！やっぱり、独りじゃ、心細いと思ったし。

さっき、まだ暗くなっ

てもないのに、ガランとしすぎて怖かったの思い出したから！だから…」

「わかりにくい！紛らわしい！それ、泊まっていいかの返事？嫌だったら、何もしない、の返事は？別？」

肩越しに、首を傾げて流し見る。

ここではつきりさせておかないと、どっちに間違えても撃沈だ。

聞くは一時の恥、聞かぬは一生の恥！根性出せ、俺！

そんな想いで決死の質問だったのだが、彼女には横目が妙に大人っぽく映っていた。

上の空に、あまり似ていない筈のレンと、目付きが似ていることに気付く。

彼女は咳払いして、強烈な眼差しを受け流した。

「私のこと、大事？」

彼の髪の毛を一本一本見ながら訊ねる。皺が付きそうなほど、シヤツを握る手に力が入る。

「世界で一番大事」

期待通りの、迷いのない即答にほっと溜息をついた。

「じゃあ傷付けないで。私のこと困らせないでね」

耳まで赤くして、返答は聞かずに荷台にすっと座り込んだ。

ユウもまた、正面を向いて赤い顔を隠した。軽く彼女の手の甲をを包んでから、ハンドルを握る。

まったく、すっかりして頼もしいとこだけは変わらない。

「了解。帰り、一緒にドラッグストア寄りたい？」

精一杯の軽口を叩いて漕ぎ出した。行きとは逆で、すぐにスピードに乗る。

「絶対、やだ！」

カオルが叫んだが、夜風になびいて後ろに消えた。

「まぢ、間に合わねえって！とりゃああああ！」

気合とも歓声とも取れる照れ隠しの雄叫びを乗せて、自転車はどんどん速くなる。

外灯がまばらで、光と闇が等間隔に彼らを照らした。

しかし、闇だけの闇ではない。暗さに慣れた瞬間に、月の光を感じる。全身で浴びる、柔らかい、透明な光を。

この先、月を見るたびに、彼らはそこに映る男のことを見ることになるだろう。

遠く離れて逢いたい時は月が鏡になればよい

そう言った、黒ずくめの一風変わった男のことを。

20・晴れの海（後書き）

終わったように終わっていません^^・誤解されてしまうかと思うので、念のため。

あと1章だけお付き合いくださいませ。

終章

からん、と彼は餌を皿に投げて戻した。ろくに食べもせず、窓際に座る。

後ろから、同僚が声をかけた。

「おい天城。また食が細くなったんじゃないか？…それ、ちょっと大きいな？余計に痩せて見える」

裾を折り、腰回りにも余裕のある黒いデニムを指さしてからかう。左腕の傷を包帯の上からさすり、彼は何も答えなかった。

「…ちえ、相変わらずだな」

必要に迫られてではあるが、ここ数日間彼は彼にとって喋りすぎた。口や喉が疲れたし、精神的にはもつとだった。今は基本的に、用事も無いのに口を動かすつもりはない。

「でもよ、よかったな。お前のデータ、今デスクが血眼でさらつてるよ。「宵」で本体がやられるなんて、想定外だったからな。

あれ、最初はただデータ詰めにしたリモコン形の予定だったろ。なんでわざわざ「暁」と同じ剣にするのかって呆れたけど、いい方向に転んだな。リモコンでは攻撃しようって発想も出ないだろう」

黒いシャツの男は重い口を開いた。

「剣じゃない。太刀だ。同じ刀でも、種類が違う。研究者が、そういう適当な語句を使うべきではない」

「はいはい。刀オタクさんよ、特別配給品。ご褒美だつてさ」

差し出したが返事がない。テーブルに置いておいたら、温くなるより前に、誰かが持ち去ってしまうことは必至だ。

同僚は親切に真横まで歩き、プルトップを開けて顔の前にぶら下げて見せた。

冷えた、汗をかいたビール。彼は黙って受け取り、一口飲んだ。

同僚はいつものこと、といった様子で怒りもせず、部屋から出て行った。

彼は窓際に座ったまま、暗い空を眺めていた。

昼間なのに、漆黒の闇に覆われている。

昼間なのに、彼は闇に月を探していた。

窓に額と頬を押し当て、寄りかかる。どこを探しても、あの輝く月は見えなかった。

満月の、一日前の。

諦めて目を閉じると、蛹が蝶に羽化するように変わったカオルと、何事も快活に真っ直ぐに見詰めるユウが思い浮かんだ。

彼には、愛しい彼らを映すことのできる鏡は存在しない。もう二度と、会うことはない、大事な者たちを。

じゃあ、代わりに――私やユウのこと、大事に思ってよ。

感情表現を拒否する透明な瞳から、一滴だけ涙が落ちた。拭くこともせず、彼はまた、いつまでも空に探した。

虚空にぽっかりと浮かぶ、幾望の月を。

終章（後書き）

最後まで読んでいただき、ありがとうございました。

明日からは新章。二人のその後の話へ移行します。

ファンタジー色はなくなりますが、お気に召しましたら幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8682f/>

幾望の月

2010年10月8日14時12分発行